平成30年2月1日発行第15巻第1号通巻111号

cover illustration by おにぎりくん(ALICESOFT)

ドリームマガジン

DREAM MAGAZINE

2018 02 Volume.98
DIGITAL EDITION

18 未満

今号の特集 Special Fetishism Series

変身ヒロイン

(表紙&ピンナップテレホンカード応募者全員サービス)

カラーピンナップ COLOR PINUP

おにぎりくん(ALICESOFT)

阿呆宮/冥土黄泉

【連載&読み切り小説】

Triangleのヒット作が読み切り小説化!

『sin 光臨天使エンシェル・レナ』
黒井弘騎×佐藤匠

『聖天使ユミエル外伝』
黒井弘騎×白う～凪い

『サンダークラップス!リボーン』
羽沢向一×緑木邑

『変幻装姫シャインミラージュ&聖光剣姫スターティア』
あろまーら×でぃふぃーと×高浜太郎

筑摩十幸×くろいわしんじ
有機企画×緑木邑
酒井仁×桐島サトシ

【えっちマンガ】

時丸佳久
楠木りん
ぱふぇ
さき千鈴
嘉納あいら

BEAT VALKYRIE EXSEAL

超昇神騎エクシール

小説:峰崎龍之介
挿絵:孫陽州
原作:ALICESOFT

大人気変身ヒロインゲームがノベライズ連載開始!

新連載

二人の美少女を襲う触手の罠!
肉牢獄に嬲られ快楽の虜に!
BEAT VALKYRIE IXBEAL
超昇神騎エクシール
気高き蒼と紅、触手陵辱に沈む
小説 NOVEL／峰崎龍之介（みねさきりゅうのすけ）
挿絵 ILLUSTRATION／おにぎりくん（ALICESOFT）
原作 ORIGINAL／アリスソフト

天空に浮かぶ堕天使の居城、フレナンジェロ城。『暴力』と『悪意』の階層の狭間にて――

「遠いね、次の階層……」

と、うんざりした様子の呟きが聞こえて、エクシールは小さく苦笑した。蒼い髪を腰まで伸ばした、はっきりとした美少女である。蒼い聖鎧を身に纏った姿は清廉なる天使を思わせるが、スカートから覗く肉感的な太腿や立派な胸の膨らみだけは、その印象を真っ向から裏切っていた。

「そうですね。流石に堕天使の本拠だけあって、簡単には進めないようにしてあります。……まさか罠でも門番でもなく、単純に階層の間を長距離にしているとは思いませんでしたが」

言ってついと視線を前に向けると、長大な階梯がひたすらに続いているのが見えた。目的地である『悪意』の階層は、見る限りまだまだ先だ。先ほどのぼやきもわからない話ではない。

「これならいっそ、敵が出てきてくれた方が気が楽な気がする……」

エクシールの隣でそう答えたのは、小柄な赤髪の少女――キリエルだった。ついでに言えば、先ほどのぼやきを零した張本人だったりもする。きりりとした目元が特徴的な彼女には、紅を基調とした神騎の戦装束がとてもよく似合っていた。エクシールとは対照的にスレンダーな体型だが、大胆に露出している脚からは健康的な色気が感じられもする。

「……ん」

と、キリエルの顔が不意に顰められた。それを見て、エクシールは眉を曇らせた。

「どうされました？」

「いや……なんでもないよ。ちょっと疲れただけ」

そう取り繕ったキリエルだが、表情の中にある疲労の色は消えていなかった。

（当然と言えば当然のことですね……あの怪物と戦ったのは、ほんの数十分前のことですし……）

胸中で呟く。世界を滅ぼそうとしている――厳密には少し違うが、概ねそのようなことを企んでいる――堕天使アゼルを打倒する使命を帯びた『神騎』であるふたりは、つい先ほど『暴力』の階層の番人、アレーガを打ち倒したばかりだった。並外れた膂力を持つ獣面の怪物との戦いは熾烈を極め、ふたりは大きな負傷こそしなかったものの、決して少なくない消耗を強いられていた。

（魔力は十分残っているようですし、心配するほどではないかもしれませんが……気にはなりますね）

と、そんな風に考え込んでいると。

「おーい、エクシール？　足が止まってるよ」

「え？　あ、ごめんなさい。つい考え事を……」

指摘されて遅れていたことに気づき、エクシールは速足になった。するとキリエルは苦笑して、

「疲れてるのはお互い様だね」

「……ですね」

頷いて、エクシールは苦笑を返した。と、その時。

『あー……大丈夫か、ふたりとも』

不意に声が聞こえた。姿はなく、声だけである。

声の主は央道継彦。エクシールやキリエルとともに堕天使と戦っている男であり、この戦いの中心人物でもある。条件次第で強力な魔力を使役できるが、直接戦闘を行う能力に乏しいため、いまは遠く離れた場所で指揮に徹している。

その彼がどうやら、なにか言いたがっているようだった。

『あんまり疲れてるようなら、一時撤退もありだぞ。アゼルの動きは気になるが、負けちまったらなんにもならないんだしな。それに今日は、既に十分な戦果を挙げてる。欲張る必要はないと思うぞ』

「センパイ、心配してくれてるんだ？」

からかうように、キリエル。すると継彦は即答した。

『そりゃもちろん心配してるさ。むしろしない理由がないだろ』

「……」

キリエルが黙った。継彦のストレートな物言いに面喰らったらしい。もっと言えば照れたようでもあったが。

「継彦。心配してくれるのはありがたいですが、私たちは大丈夫です。確かに疲れはありますが、まだやれます」

キリエルの反応を微笑ましく思いながら告げる。すると継彦はしばし押し黙ってから、

『……よし、わかった。現場の判断を信じよう。ただし無理だと思ったらすぐに退くこと』

「はい」

頷くと、そこで通信は途切れた。

「行きましょう、キリエル」

「そうだね。センパイ、あれで案外心配性だから、あんまり待たせたら可哀そうだし」

「ふふ、そうですね」

ふたりは笑い合うと、改めて長大な階梯を進み始め――その直後。

ヴゥゥン……。耳障りな音が聞こえたのと同時、ふたりの周囲に紫色の靄が出現した。

「――っ。これは……結界⁉」

いち早く異常事態に気づいたエクシールは、目元を厳しくして周囲を睨んだ。

（この魔力は……シェムールのもの。ここにきて罠というわけですか……！）

周囲を取り囲んでいる紫の靄は、どうやら毒というわけではないようだった。だが視界がひどく悪くなり、数歩先すらろくに見えない。

「キリエル、背中を合わせて！」

こちらを分断するための罠――そう判断したエクシールは、キリエルに背中を向けた。すると唐突な事態に目を白黒させていたキリエルも、はっと我

に返ってエクシールの指示に従った。
「エクシール、これは……」
はぐれないようぴったりと背中同士を合わせつつ、キリエルが囁いてくる。エクシールは小さく頷きつつ、
「結界です。おそらくはシェムールの罠でしょう。私たちを離れ離れにし、各個撃破するための――」
と――そこまで口にした瞬間だった。ふたりの足元から、無数の触手が湧いて出てきたのは。
「えっ⁉　あ、しまっ――」
周囲の靄に気を取られていたエクシールは、死角である足元からの襲撃に対応できなかった。あっという間に気色の悪い触手に絡みつかれ、全身を粘液塗れにされてしまう。
「この、離れなさい！　……くぅっ、キリがない……！」
エクシールは神騎としての膂力で二度三度と触手を振り払ったが、無数に湧いて出てくる触手はそのたびにエクシールの手足を封じ直した。そしてそんなことを数度繰り返しているうちに――
「くっ……振り解けない……！」
触手はエクシールの両腕を頭上に引っ張り上げ、足から胴にかけて蛇のように巻き付いてきた。それらはたかが触手とは思えないほどの力でエクシールの動きを封じ、やがて完全に固定してしまった。これではいかに神騎といえど、十分に力を発揮できない。
「……！　キリエル！　無事ですか⁉」
背後のキリエルはどうなったか――気になって声をあげる。すると……。
「……たぶん、エクシールと同じ……かな。怪我はないけど動けない。……う、ぬるぬるしてて気持ち悪い……」
触手への嫌悪感を滲ませながら、キリエルが言う。どうやら彼女も、エクシールと同じく抵抗を封じられているようだった。負傷していないのが唯一の救いだ。
「……まんまとやられたね。ここまで雑魚すら姿を見せなかったから、ほんの少しだけ気が抜けてた。この罠は、ちょうどそこを突くように仕掛けられてたんだ……」
センパイの言う通り、一時退却すべきだったかな――キリエルはぽそりとそう付け加えた。エクシールは内心同意しつつ、静かに口を開いた。
「……起こってしまったことは仕方ありません。……もちろん、このことはあとで猛省しますが……まずはこれからのことを考えましょう。……気づいていますか？」
訊くと、背後のキリエルが頷くのが、気配で知れた。
「うん。この靄のせいかな。センパイと通信が繋がらない。魔力が外に漏れない仕組みなのかも」
そう。いつでも繋がるようになっているはずの通信――魔力を使った念話が、いまはまるで役に立たなかった。エクシールも先ほどから試みていたのだが、手ごたえがまったくないのだ。キリエルの言うように、靄が魔力を遮断しているのかもしれない。
なんにしろ。戦闘力を持ったふたりが同時に囚われ、救援要請も送れないというのは、おおよそ考え得る限り最悪の事態だ。打開策があるとすれば――
「……継彦がこの事態に気づき、アッサルの矢を放ってくれるのを祈るしかありませんね」
「……だね。悔しいけど、いまの私たちだけじゃ、この状況は打開できないと思う」
アッサルの矢というのは、神騎が持つ神の道具のひとつだった。対象がどこにいようと弓の下へと連れ帰ることができる、『救出』に特化した代物である。矢が放たれてからこちらに届くまでに相応の時間を要するが、放たれさえすればほぼ確実にエクシールたちを救ってくれるだろう。ただ……。
「問題は……矢が届くまでの間、こいつらが大人しくしているわけがないってことだね」
と、キリエルが呟いた瞬間だった。ただでさえ大量に湧いていた触手の数が、さらに増えた。数えきれないほどの数となった触手群はひしめき合いながら上へと伸びていき、やがてふたりを完全に覆い隠した。触手によって作られた、ドーム状の肉牢に閉じ込められた――とでも言うべきか。
「せっかくの獲物を逃がす気はない……とでも言いたげだね」
逃げ場を塞がれたことでかえって覚悟が決まったのか、キリエルが落ち着いた声で呟く。エクシールは小さく顎を引いた。
「そのようです。……せっかく捕らえたのに殺そうとはしないところを見ると、もしかしたら生け捕りを目的にしているのかもしれません。もっとも……死なないからといって、安全なわけでもないでしょうが……」
言いながら触手を観察する。
触手はどうやら、様々な種類があるようだった。妙に細長いものがあれば、極太のものもある。吸盤のないタコの足のような形状のものや、先端が花の蕾を模しているものもある。共通点を強いて挙げるなら、どれもが粘液を帯び、ぬらぬらと光沢を持っていることくらいだ。
そしてまず行動を起こしたのは、先端が花の蕾のようになっている触手だった。それはゆっくりとエクシールの胸元と股間に寄ってくると、先端の蕾をぱっくりと開かせ、謎の粘液を吐きかけてきた。粘液はべちゃりと気色の悪い音を立てて、エクシールの胸元に着弾した。
「う、これは……」
「嫌な予感がする……」
と、同じように粘液をかけられたらしいキリエルが嫌そうに呟いた瞬間だった。しゅううぅぅ……という奇妙な音とともに、聖鎧の一部が溶け始めた。

著者近刊　『ダンジョン暮らしの元勇者1～3巻』　好評発売中！

アリスソフトの人気作品がついに登場!
蒼と紅、二人の神騎の戦いに刮目せよ!!

BEAT VALKYRIE IXSEAL

超昇神騎エクシール

第一話 迫る決戦の時 ～双翼、魔悦調教～

小説 NOVEL／峰崎龍之介（みねさきりゅうのすけ） 挿絵 ILLUSTRATION／孫陽州（そんようしゅう） 原作 ORIGINAL／アリスソフト

長大な階梯を上りきり、開けた場所へと出る。天空に浮かぶ堕天使の居城、フレナンジェロ城を構成するみっつの階層のうちのひとつ、『悪意』の階層だ。

「誰も……いませんね」

常人には立ち入ることすらできないその場所に、ひと気などあるわけがない。それはわかっていたが、神騎エクシールは視界で捉えた情報を咀嚼するように、小さく呟いた。蒼を基調とした聖鎧を身に纏い、同じく蒼の髪を腰まで伸ばした、絵にも描きようのない美女である。ぱっと見る限りでは温厚で柔らかな雰囲気に満ちているが、目だけは凛とした光を湛えている。その峻烈な眼差しは、彼女を戦士――神騎であると証明するようだった。例えるのなら、伝承に伝わる戦乙女のようだとでもいうべきか。

「そうだね。……でも、油断はできない。相手はあのシェムールだ」

呟きに応じたのは、紅の戦装束を纏った少女――神騎キリエルだ。どこか忍者を思わせるいで立ちの彼女は、小柄な体に目いっぱいの警戒心を詰め込んだまま、目元を厳しくして『悪意』の階層を睨みつけている。その視線が左右に動くたび、サイドテールにした紅蓮の髪がさらさらと揺れた。

エクシールはそんなキリエルの言葉に、小さく顎を引いて見せた。ふたりが討とうとしている敵は、奸智と魔法に熟達した堕天使、シェムールだ。どんな罠が待ち受けていても不思議ではない。

「彼女のことです。闇討ちくらいは平気でやってくるでしょうから、十分注意しないといけませんね――」

「あら、失礼ね」

――と。

唐突に。まったく唐突に声が聞こえて、ふたりの神騎は同時に身構えた。そしてその鋭い視線の先に、ずず……と紫色の影が現れる。影は徐々に人の形を取り始めると、やがて褐色の肌と漆黒の翼を持つ妖艶な美女へと変貌を遂げた。そしてその女こそが、堕天使軍団グリゴリのナンバー2、シェムールだった。

「神騎如きに闇討ちなんて、いまさらしないわ。そんな面倒なことをしなくても、捻り潰せばいいだけだもの」

ふたりを――いや、世界のあらゆる全てを見下すような笑みを浮かべて、シェムールは嘯いた。

「出たね、女狐。……今日こそ決着をつけるよ」

キリエルが吐き捨てるように告げた。

毒婦、蛇、女狐、裏切り者――シェムールから想起される言葉はいくらもあるが、そのどれもがろくでもないものだ。実際その印象は、なにひとつとして間違っていなかったりするが。

「ふふ……出来損ないの神騎の分際で、よく吼えるわね。……八つ裂きにしてあげたくなるわ」

シェムールは言うと、豊かな胸を持ち上げるようにして組んでいた腕を解いた。それを見て、エクシールは――

（――来る！）

そう内心で叫んだ時には、彼女は左に跳んでいた。視界の端には、反対側へと跳躍するキリエルの姿も見えている。そして次の瞬間、ふたりが一瞬前までいた場所を、禍々しい魔力の弾丸が通り抜けていく。

「――うふふ、流石にこの程度は避けるのね。ではこれはどう？」

微笑んで、シェムールが何事か呟き始めた。するとその体がすぅと霞んでいき、やがてみっつに分かれた。

「さあ」

「三人分の攻撃」

「果たしてかわしきれるかしら？」

三人のシェムールは、まったく同じ顔、同じ声で告げてきた。感じ取れる魔力の強さもほぼ同等だ。正直、ぱっと見ただけでは見分けなどつかない。

そして敵が、じっくり観察する時間などくれるわけがなかった。

『死になさい、哀れな神の操り人形！』

三人に分裂したシェムールたちは、次々に手を掲げて様々な魔法を連続して発動した。

たちまち『悪意』の庭園は、爆音と高熱、雷撃と氷柱が荒れ狂う地獄絵図へと変貌した。

「っ――なんて無茶苦茶な……！」

エクシールは小声で呟きながら、大小のステップを踏んで攻撃魔法の嵐をやり過ごした。聖鎧の防御能力ならば一撃や二撃受けたところで死にはしないが、だからといって当たってやる義理もない。

（強大な魔力に、強力な魔法。シェムールが大きな力を持つ堕天使なのは間違いありません。ですが狙いが甘すぎます。やはり彼女は暗躍こそが本懐。直接戦闘を行うのは、それほど得手ではない……）

三人に分裂して魔法を行使する端末を増やしたことそのものは、実に高度な技術だ。だが逆に言えば、彼女はその高い技術を活かし切れていない。高すぎる己の基本スペックに驕って、戦うための創意工夫に至っていないのだ。ならば付け入る隙など、いくらでもある――

「……キリエル！」

飛び交う致死の攻撃魔法から身をかわしながら、エクシールは鋭く叫んだ。

「わかってるよ、エクシール。――ここは私の速さが必要だってね！」

紅の神騎は勝気な目を闘志で彩りながら、打てば響くような返事をし、一切の予備動作を挟まないままトップスピードで駆け出した。忍者じみた装いの印象を裏切らない、神速の飛び出しだ。

「――させると思う？」

当然ではあるが、シェムールは迎撃してきた。無差別に近かった魔法爆撃が、キリエルの進路を塞ぐように集中する。だがキリエルは、慌てず騒がず進路を変えた。すると魔法の爆撃は彼女を追う。

キリエルが走り、三人がかりの魔法攻撃が進路を塞ぐ。それが何度も繰り返された。

（かかりましたね）

それほど戦い慣れていないシェムールは、キリエルの持つ『速度』という武器を、無意識のうちに過剰に警戒していた。折角得た広範囲への攻撃性能を捨て、その狙いをキリエルの進路に左右され続けている。

それによって、エクシールはわずかな時間、完全にフリーになった。彼女はその時間の中で、そっと手を掲げて呟いた。

「――神剣ソル・クラウンよ――」

求めに応じ、神武――神騎だけが扱える究極の神造兵器が顕現する。清廉な輝きを持つ白銀の剣。邪を祓い魔を断つ、彼女だけの刃。

その柄を強く握り、エクシールは深呼吸した。

（相手は分身を作り出しています。つまりふたりまでは偽者。魔力さえあれば復元できる、倒しても意味のない人形。対応策は本物を見抜いて叩くか、あるいは――）

――一息に三人とも抹殺するかだ。そう付け加えた時には、蒼銀の神騎は爆裂するような音を足元から発して踏み出し、シェムールの下へと一直線に駆け出していた。

「っ、おのれ――！」

高速の突撃に気づいたシェムールたちのうちのひとりが、表情を歪めてこちらに手を向ける。そしてその次の瞬間、その掌から漆黒の魔力弾が、立て続けに放たれた。

咄嗟に編んだ魔法とはいえ、それなりの威力はあるだろう。少なくとも直撃して無傷でいられる代物ではない。

それはわかっていた。わかっていたが、エクシールはあえて、魔力弾の雨に向かって真っすぐに突っ込んでいった。

「⁉　なぜ――」

額、右肩、左前腕――あちこちに魔力弾が着弾するのを感じながら、それでも走る。するとシェムールは奥歯を噛み、驚愕と焦燥を孕んだ呻きを漏らした。痛みと傷を無視した特攻は、保身に長けた彼女にとって意外なものだったのだろう。

「なぜ止まらない――！」

エクシールは全てを無視し、『目の前のシェムール』を、白銀の刃で袈裟に斬り捨てた。

「あああああああぁぁぁ……っ！」

断末魔が聞こえた。だが同時に、斬り捨てたシェムールの体が紫の霧に化けて消えていくのも見えた。まずは偽者が片付いた、ということだろう。

「お、おのれ！　神騎如きが――！」

流石に余裕をなくし、残るふたりが一斉にこちらを向く。が、それは悪手だ。

「よそ見してると死ぬよ」

神速の攪乱術でシェムールの気を引き続けていたキリエルは、敵の注意が自分から逸れると、瞬く間にシェムールの懐に潜り込んだ。そしていつの間にか握っていた彼女の神武――神双刃ハヤテ・カムイを巧みに操り、並び立つ褐色の毒婦の腹を十字に裂いた。

「ぐ……っ！　あああああああああああっ！」

再びの断末魔。が、今度も本体ではなかった。斬られたシェムールは霧となって空気に溶けている。ならば最後のひとりこそが――

「――あなたが本体ですね。……『悪意』の番人シェムール。あなたを……神に代わりて誅滅します！」

叫び、腰だめに構えたソル・クラウンを突き出す。だがシェムールも黙って殺されはしない。咄嗟に魔法の障壁を生み出し、迫る致死の切っ先を防いで見せた。

白銀の刃と魔力の障壁が、ばちばちと火花を散らして拮抗する。その膠着は、そう簡単には崩れそうになかった。

もっともそれは、これが一対一の戦いであればの話だが。

「言ったよね。よそ見してると死ぬよってさ」

「――⁉　こ、の……小娘が！　……がっ⁉」

怒りと屈辱に歪んだ表情のまま、シェムールは凄まじい勢いで後方へと吹き飛んでいった。いつの間にか跳び上がっていたキリエルに、妖しい美貌を思い切り蹴りつけられて。

「あぐ……あ、かふっ……」

十数メートルほど地面を転がったところで、シェムールの体はようやく運動エネルギーを使い切り、制止した。まだ意識はあり、抵抗の意志も挫けてはいないようだったが――

「……終わりです」

エクシールは冷然と告げて、起き上がろうと足掻いていたシェムールの眼前に、ソル・クラウンの切っ先を突き付けた。するとシェムールは蹴られて割れた額から血を垂らしながら、憤怒と憎悪に満ちた形相を見せた。

「おのれ――おのれおのれおのれっ！　ありえない……この私が……たかが神騎に！」

「その驕りこそが、あなたの敗因です。……私たちは既に、『暴力』の階層でアレーガを倒している。彼は強かった。知性を感じない獣同然の怪物でしたが、それでも……戦いにおいては、あなたより余程手強かった」

「それに……『仕掛けて嵌める』ということだけが、

著者近況　エリスもキリカも本当に可愛い。継彦が選べないのも納得ですね。……ところでアズエル様に肉の悦びを教えたり、シェムールにきついお仕置きをするミニディスクはまだですか⁉

お前の勝ち筋だった。卑怯卑劣が売りだった。正面から戦おうとした時点で、お前はもう負けていたんだ」

と、ゆっくりと追いついてきたキリエルがそう付け加え、ちらとこちらの目を見た。エクシールはその意を汲み取り、小さく頷く。

「シェムール。あなたはもはや戦える身ではない。けれど放置しておくには危険すぎます。ですから……ここで完全に封印します。Periorizo amartolos!」

エクシールは凛然と詠唱を口にした。ここに来る前……『暴力』の階層でも使った、対堕天使用の封印術式だ。

「……！　それ、は……アレーガを地下に封印した……！　くっ、やめろ……やめなさいっ！」

シェムールは目を見開き、体を起こそうとした。だがダメージを負った肉体は簡単には自由にならず、結局顔を上げる程度のことしかできない。

「我が神武――ソル・クラウンよ」

「我が神武――ハヤテ・カムイよ」

ふたりの神騎は凛々しく、だが淡々と詠唱を続けた。

『深き奈落への路を穿ち、目前の堕し者を炎の大河に封じよ――』

――と。ふたりがついに、詠唱の末尾に辿り着いた――その瞬間だった。

「――無様よな、シェムール」

声が聞こえた。ただそれだけだった。威圧されたわけでも攻撃されたわけでもない。

『……!?』

だがその声が持つ不可視の、そして不可避の邪悪な圧に、ふたりは思わず詠唱を中断し、同時に後方へと跳んでいた。

「この……声は！　……アゼル！」

エクシールは叫び、声のした方を睨みやった。終階位『裏切』へと続く階梯――そこに、その女はいた。

漆黒の翼に褐色の肌。鮮血のように赤い瞳と銀の髪を持つ、美しくも邪悪な最凶最悪の堕天使。

――アゼル。堕ちる前の名はアズエル。天使長を務めるほどの清廉な天使であり、エクシールとは強い信頼関係で結ばれていた仲だったが……いまの彼女は堕天使軍団グリゴリの長にして、人類から叡智の光を奪い去り、原初のけだものへと回帰させようとしている……いわば、世界の敵に成り果てていた。

「……アゼル、様……」

シェムールが掠れた声で呟く。するとアゼルは赤い瞳に冷たい光を過らせて、小さく鼻を鳴らした。

「ふん……いつまでも階下が騒がしいから、戯れに出向いてみれば……まさか敗けているとはな。大言を吐いて出撃したわりには、随分と情けないことだ」

「……申し訳、ありません」

「言い訳もしないか。……まあ良い。お前にはまだ使い道がある。人類総獣化は私ひとりでも成り立つが、雑務をこなす者は必要だ」

アゼルは言うと、倒れ伏したままのシェムールに手をかざした。すると褐色の毒婦の体は、瞬きする間に忽然と消えてしまった。

恐らくは転移の魔法だろう。アゼルほどの力があれば、予備動作なしで発動しても不思議はない。

「さて……」

と、赤い瞳がこちらを捉えた。それだけでも、体の芯まで凍るような心地にさせられる。

（敵の総大将が自らお出まし。見ようによっては絶好のチャンスですが……いまの私たちで、果たして勝てるのでしょうか……？）

ソル・クラウンの柄を握り直しながら、疑わしい気分で呟く。『暴力』と『悪意』の階層を一気に攻略した反動で、自分もキリエルもかなり疲弊している。特にエクシールは、先ほど断行した無茶の影響が、まだ体に残っている状態だ。

いまアゼルと戦うのは下策。そう判断せざるを得ない。もっとも、相手が逃がしてくれるとは思えないが……

「……蛙。しかも傷だらけの、か」

……と。アゼルはこちらをしばし睥睨したあと、小さくそう呟いた。そしてそれきり興味を失ったように視線を切る。

「帰れ。いま戦うのは興が乗らん」

「……見逃してくれるって？」

油断なくハヤテ・カムイを構えたままキリエルが問うと、アゼルは肩をすくめた。

「ただでさえ力の差は歴然としている。蛇に睨まれた蛙、というやつだ。その上お前たちは疲れ切り、傷だらけ……これでは戦いにすらなるまい。お前たちは生贄だ。私が目的を達する際、その血で以って全ての終わりを飾り立てるためのな。ゆえに……」

言葉を切り、アゼルは傲然と続けた。

「全力で私に挑み――そして散るがいい。それだけが、お前たちに残された存在価値だ。……もっとも」

言って、アゼルはエクシールを見つめた。そして告げる。

「エクシール。あなただけは、生かしてあげてもいいわ。降伏するなら、だけどね」

口調が変わっていた。声音もだ。アゼルが『堕』天使となる前……天使長アズエルだった頃の名残が、わずかに顔を見せていた。

「……。お断りします」

エクシールはアゼルの提案を、即座に否定した。

「それが仮令、アズエル様としての言葉だったとしても……いまの私はあなたの敵。それが覆ることはありません」

「……そう」

著者近刊 『ダンジョン暮らしの元勇者1～3巻』 好評発売中！

アゼルはわずかに、ほんのわずかにだけ残念そうな顔をした。が、すぐに元の冷たい表情に戻って転移魔法を発動し、現れた時と同じく忽然と姿を消す。圧倒的な気配が消えると、『悪意』の庭園は恐ろしいほどの静寂に包まれた。

「……水入り、か。はは……正直、助かったね」

ふたりきりになると、キリエルが渇いた笑いを漏らした。

「ええ……あのまま戦っていれば、恐らく負けていたでしょうから……」

と、エクシールが力なく笑い、額の汗を拭っていると。

『……やれやれ。いまのはびびったな。まさかアゼル本人が出てくるとは』

魔力による通信を介し、男の声が聞こえた。すると張り詰めていた空気が不思議と気にならなくなり、ふたりの神騎は自然と表情を明るくした。

「継彦」

「センパイ」

それぞれの形で男の名を呼ぶと、彼はこう続けてきた。

『ふたりともお疲れ。話したいことは山ほどあるが、まずは帰還してくれ。まだ全部終わったわけじゃないが……今日の分の祝勝会をやろうぜ。ベゼルにピザを用意させる』

「はい。では……帰還します」

エクシールは頷くと、キリエルとともに背中から純白の翼を生やして飛翔し、天空要塞フレナンジェロ城をあとにした。

◇

堕天使と戦う者たちの本拠地は、どうということのないマンションの一室にあった。表札には『エリス・エクシリア』とだけ書かれている。要するに彼女が住む部屋そのものが、世界の行く末を左右する決戦戦力の溜まり場なのである。

フレナンジェロ城から帰還したエリスは、シャワーを浴びて戦いの汚れを落とすと、普段着に着替えてリビングへと向かった。ちなみにエリスというのはエクシールの人間としての名前で、普段は専らそちらの名を使っていた。

「……っと。来たか。……お帰り、エリス」

そう言ってエリスを迎えてくれた男の名は、央道継彦。こうして見る限りでは、街を歩けば二秒で見つかりそうな普遍的な少年でしかない。だがそれは見かけだけのことで、彼の中にはとてつもない力が秘められている。

その力の名は――エイダム。敗北するたびに転生し、時を置いて力を復活させ、再び天に挑むというサイクルを幾星霜と繰り返した、古の魔王の名である。

継彦はその転生サイクルの、現代における継承者だった。様々な要因によって完全な転生は成らなかったが、彼の中には間違いなくエイダムの力が存在しているし、彼自身も『魔王』を自称している。

「ひとまず座ってくれ。ささやかだが、宴の準備ができてる」

言われてテーブルを見やると、確かに準備は整っているようだった。通信でも言っていたピザが中心に鎮座し、脇にはフライドポテトなどのサブメニューもある。ボリュームは十分そうだ。少々ジャンクに過ぎる品揃えだが、エリスたちが勝利を祝う席を設ける時は、なんとなくこういうメニューにすることが慣例化していた。ちなみに、テーブルの傍にはキリカが――キリエルの人間としての名だ――既に腰を降ろしていた。エリスよりも先にシャワーを済ませていたので、当然といえば当然だが。

「さて、冷めないうちに食っちまおう。おっと。まずは今日の勝利に乾杯しないとな。――ベゼル」

エリスがいつもの位置に腰を降ろすと、継彦がそう言って空のグラスを掲げた。すると……

「――では失礼して、お注ぎいたします」

そんなことを言いながら、ダークな色合いの礼服をぴしりと着こなした壮年の男性が、静かに姿を現した。彼は継彦とキリカのグラスにコーラを、そして炭酸が苦手なエリスのグラスにはウーロン茶を注ぐと、あとは黙って一歩下がった。まるでよく訓練された執事のような所作だが――彼は別に執事などではない。それどころか人間ですらなかった。

彼の名はベゼル。正真正銘の、純粋なる『悪魔』である。ちなみにこの家にいる悪魔は彼だけではない。ワーズリー、ハウト、オベレット、ダイアンという、かつて死闘を繰り広げた強敵たちも一緒に住んでいる。諸事情により特別な処置を施した部屋から出ないよう厳命されているので、ここにはいないが。

ともあれ、各々の手に飲み物が行き渡ると、継彦が乾杯の音頭を取った。そしてそれが終わると、さやかな宴が始まる。

（……なんとなく慣れた気でいましたが。悪魔が恭しく接してくるのは、やはりこう、違和感がありますね……）

ふと食事の手を止め、エリスは内心で呟いた。この期に及んでという気もするが、いま置かれている状況が極めて特異なのは間違いない。

当たり前のことではあるが――天使であるエリスの家に悪魔が居座っているというのは、傍目から見ればたいへんに異様なことである。もっとも、それを言うなら魔王の転生体である継彦がここにいることもまた、おかしな話だが。

無論のこと、そんな異様な状況が成立するまでには、深い理由とややこしい経緯があった。

数か月前……エリスは幾星霜と紡がれてきた魔王

ヘルブランド…

やはりお前は我が王を呼び出した一族の末裔

ベゼリオンとの一騎討ち！

そうよ

わたしの両親が犯した罪の清算をしに来たわ

枯獄のリーゼ

淫罪の宿命

第7話　奇襲

漫画 COMIC 楠木りん　原作 ORIGINAL 竜胆

フォフォフォ やはりワシの 理論に間違いは なかったの!!

魔界ゲートの 開通が 成功したわい!!

魔界ゲート ですって!?

さよう…だが マスティマート様を 呼び出す門を 完成させるには 膨大な魔力が必要

お主の魂と魔力 その生贄に使わせて もらうぞ!

ふざけんじゃ ないわよ!

させないわ …絶対にっ!

神の名のもとに！
解き放て
第三の刃の使徒!!
薙ぎ払え
第三の刃
万雷の
サハシエル！
ガガガガ
フォフォ
まったく大した
魔力じゃの
しかし
魔界の眷属どもは
まだまだ幾らでも
召喚できるのじゃ
ニュル
っ…はぁ
はぁ…！
どこまで
持つのか
楽しみじゃな！

ハァ ハァ
フォフォ！最初の威勢はどうしたイバラの姉妹よ！
ズズ…
くっ…アイツと装置は次々召喚される悪魔どもに守られてるし…
どうしたら…
あの勝利を確信した顔ムカつ…
あっ
だからこそ油断が生まれるんじゃない
魔力を温存し最後にかける…!!
人間を…舐めないことね
わたしは諦めない…わ！
フォフォフォフォ
ガクン
う…
ほれみい体がおぼつかないわ
ニュル
堕ちた聖女というのもまた一興
お前たちちょっと遊んでやれ
ニュル

いやっ…何する気!?
ずるずる
聖女とはいえこっちも結構使っているんじゃないか?
ニュル
しゅるる
まさか…入れられちゃう!?
でも今は従っておかないと…
ゾクゾク
うう…
最悪だけど…今は我慢よ
そこはややめて…
くちゅ

◀◀◀◀◀ 掲載作品の原作PCゲームをご紹介!

Sin機一転! 生まれ変わった『エンシェル・レナ』

Sin 光臨天使 エンシェル・レナ
— REINCARNATION —

希望はあります たとえどんなに穢されても

©Triangle/Route2

STORY

近未来都市「ゼロポリス」にて頻発する怪事件。事件に巻き込まれた朋衛玲奈は、謎の怪物たちと戦うエリカという女性と出会う。

エリカが所持していた「エンシェリウムカード」が玲奈の秘めた力に反応し、彼女を「エンシェル・レナ」へと変身させて、怪物たちを追い払う。

エリカを自宅へ匿った玲奈は、エリカから異世界の侵略国家「アザハイド帝国」の魔の手が地上に迫っていることを告げられる。自分の持つ力を自覚し、戦うことを決意する玲奈。しかし、侵略を指揮する帝国の皇子ディネロに見初められた玲奈は、ディネロが送り込む怪物たちによる陵辱の罠に嵌り、清純だった身体を次第に淫らにされていってしまう。

シナリオ:黒井弘騎　原画:斎藤なつき/佐藤匠

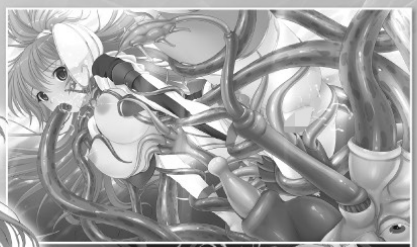
CHARACTER

エリカ
エディエンヌ王家に伝わる王族専用のエンシェリウムカードにより、エリカが光臨天使に変身した姿。

レナ
エンシェリウムカード「オリジナル・ワン」によって玲奈が変身した光臨天使。

アリシア
帝国側の変身ヒロイン。ジェネラル・コキュートスによって渡された漆黒のエンシェリウムカードにより変身する。

朋衛玲奈(ともえれな)
真面目で大人しい優等生。勉強も、友達とおしゃべりするのも好きな普通の女のコ。



変身ヒロインたちを襲う陵辱の数々…!

◀次ページより、ニジマガ限定エピソード! 本誌オリジナルの敵にレナが挑む…!

作品の詳細は公式サイトをチェック! http://www.route2.co.jp/Triangle/Products/sinRena/index.html

Sin
光臨天使
エンジェル・レナ
—REINCARNATION—
小説 NOVEL／黒井弘騎
挿絵 ILLUSTRATION／佐藤匠
原作 ORIGINAL／Triangle
変身ヒロイン界隈でも最強と名高い
彼女がニジマガに光臨！
凛と戦い淫に乱れる至高のヒロイン
エンジェル・レナ！

――原初のエンシェリウムカード「オリジナル・ワン」――

異世界パレキシアに伝わる、女神ラエリスの力を宿すという神代の聖遺物。その秘蹟は所有者に文字通り神の如き力を与え、奇跡さえ起こすと言う。

全次元宇宙を支配せんとするアザハイド帝国は、エンシェリウムカードを狙いパレキシアのエティエンヌ王国へと進行。戦火の中辛うじて逃げ延びた王女エリカを追い、地球次元までへもその魔手を伸ばしてきた。

未来型都市ゼロポリスに暮らす何の変哲もない少女、朋衛玲奈は、数奇な運命に導かれ、アザハイド帝国との戦いに巻き込まれしまう。

これまで争いなど無縁の人生を送ってきた玲奈だったが、彼女はその優しさゆえに、大切なものを傷つけられ、侵されることを見過ごせなかった。

そして、その純真な心――優しさゆえの強い正義感と揺るぎない意志に、エンシェリムカードは呼応した。

女神ラエリスに選ばれた玲奈は、聖なる力により、伝説の天使――光臨天使エンシェル・レナへと姿を変える。

闘争など知らなかった優しすぎる少女は、しかし、その優しさゆえに、自ら終わりなき戦いへと身を投じた。

だが、少女が歩む道は、決して平易なものではない。

戦いの最中、皇子ディネロに見初められたレナは、おぞましき魔物たちにその身を汚され、清純な心までもを淫らに犯されていた。

優しい女のコにとってあまりに辛すぎる戦いの日々――だがそれは、玲奈が自らの意志で選んだものなのだ。

大切なものを守るため――愛する人たちを、大好きなこの世界を守るため。

誰かが傷つけられるぐらいなら、自らが傷つくことを選んで――無垢な身心を無慈悲に汚されながらも、彼女は運命の一歩を自ら歩みだしたのだ。

そして戦いの中、エリカの助力や武装精霊との絆、そしてエンシェリウムカードの導きにより、レナは恐るべき敵を幾度となく退け、光臨天使として着実に成長していく。

今日もまた、光臨天使エンシェル・レナは、大切なものを守るため、アザハイド帝国と戦い続けるのだ。

だが、彼女はまだ、知らない。

その先に待ち受ける運命が、どれほどに残酷で、淫惨で――そして、罪と罰とにまみれたものなのかを――

※※※

「せあああああ――――！」

「グ、グアアアアア！」

ザシュッ！

鋭い槍先が、魔物の身体を貫きます。わたしの手に重い手応えが伝わり、ついで魔物の絶叫が響きました。

槍の武装精霊スピニール……数多の戦いを共にした頼れる仲間。

邪悪を貫き滅ぼす聖なる一撃を受け、アザハイド帝国の魔導生体兵器は苦悶に触手をうねらせました。

「……終わりです。この戦い、わたしの勝ちです！」

勝利を確信し、それでも油断なく武器を構えたまま、わたしは短く言葉を発しました。

――夜のゼロポリスに出没した、無数の触手を備えたおぞましい異形。アザハイド帝国の生み出した魔導生体兵器デモノガイスト――その一匹が、平和を侵すべくこの世界に現れたのです。

騒ぎを聞きつけたわたしは、すぐに駆けつけ――光臨天使エンシェル・レナへと姿を変え、戦いに望みました。

（……恐ろしい強敵でした。でも……勝ったのは、わたしのほうです！）

これまで戦った様々なデモノガイストの特性を備え、自在に形態を変化させる恐るべき合成生物――モルフガイスト。軟体生物の触手に植物の蔦、獣の巨躯と蟲の節足とを兼ね備えた姿は見るだけでもおぞましく、その戦闘能力はそれ以上に凄まじいものでした。

飢えた獣の剛力が蟲の俊敏性を持って振るわれ、イカの触腕と植物の蔓が想定不可能な攻撃を間断なく繰り出してくる……しかもこの魔物は臨機応変に姿を変え、牙や触手や毒針による変幻自在の攻撃をしかけてくるのです。

以前のわたしなら……光臨天使エンシェル・レナなら、為す術なく敗北し、この身を犯されていたかもしれません。

ですが、今のわたしは、以前のエンシェル・レナのままではありません。

今のわたしには……エンシェリウムカードが……女神ラエリスが授けてくれた、新たな力と姿があるのです！

「グ、グググ……。これが戦女神ラエリスの鎧……エイジスの力か……」

「はい。光臨天使エンシェル・レナ……エイジスフォーム。貴方がどれほどの蛮力を振るおうと、この女神の鎧には傷一つつけることはできません！」

槍を持つ右手にグッと力を込め、わたしは凛然と言い放ちます。

エンシェリウムカード「オリジナル・ワン」が引き起こした奇跡――フォームチェンジ。

それは、光臨天使としての新たな姿と力を、わたしに与えてくれました。

この新たな姿――エイジスフォームは、攻撃と防御ともに優れた、近接戦闘型のフォームです。

従来のコスチュームとは違い、エイジスフォームは、わたしの全身を隙間なく包み込むボディスーツ状の形状が特徴です。指先から爪先に至るまで、わたしの全身を隙間なく包み込んだ真珠色の生地は、薄手でありながら伸縮性に富み、わたしの肉肌にピッチリとフィットしています。

装着者の動きをまったく阻害しないどころか、魔力によるアシストで何倍にも運動能力を高めてくれて、しかも強固な斥力装甲が敵の攻撃から身を守る……胸やお尻のラインまでくっきりと浮かんでしまうほどの、少し恥ずか

著者近況 大好きな作品の続編ゲームの企画・シナリオをやらせて頂けてすごく幸せでした。愛と気合を込めて全力で執筆しましたのでゲーム版「sin 光臨天使エンシェル・レナ」もよろしくお願いいたします！

しいぐらいの密着スーツだけど、その近接戦闘力は従来の比ではありません。
精霊魔法こそ使えないものの、剣や槍といった武装精霊の力を限界以上に引き出し使いこなす……パレキシアに伝わる武装天使ラエリスの、戦神としての側面の顕現。
このエイジスフォームを持ってすれば、日々激化するアザハイド帝国との戦いにも十分に渡り合えるのです。
（ありがとう、エンシェリウムカード。わたしに、力を貸してくれて……）
物言わぬカードに、わたしは静かに感謝の意を伝えます。
――大切なものを守りたい……もう、誰も傷ついてほしくない。
――そのために、もっと、もっと力が欲しい……。
――何かを傷つけるためじゃなく、守るための力が欲しい……！
そんなわたしの願いに、エンシェリウムカードは応えてくれました。
だから、わたしは、負ける訳にはいきません。
どんなに辛くても、苦しくても……これは、わたし自身の望んだ願いなのですから！
「アザハイド帝国の生み出した忌まわしき魔導生体兵器……モルフガイスト！　平和を乱す貴方を、わたしは、許すことができません……！」
――本当は、戦いなんてしたくない。たとえ魔物だとしても、傷つけ、命を奪うなんて、本当はしたくない――
今でも、その思いは変わりません。
けれど、今のわたしは知っています。
重すぎる犠牲と代償を持ってして、実感させられたのです。
この世界をアザハイド帝国の手から守れるのは、わたしだけ……光臨天使エンシェル・レナだけ。
わたしが……レナが戦わなければ、大切な何かが壊され、傷つけられる……だからわたしは、戦うのです。
どれだけ心が傷ついても、身体を汚されても……そんなの関係ありません。
だって……大切な誰かが傷つけられるほうが、ずっとイヤだから！
「グググ！　俺が許せないだと？　だったらどうするのだ？　今まで多くの魔物を殺してきたように、俺の命も無慈悲に奪うか？　その汚れなき手を血に染め続けるのか、光臨天使？」
「……はい。その覚悟は……もう、とっくに出来ていますから！」
異形の表情を読むことはできませんが、邪悪な魔物は、わたしを嘲笑い、惑わそうとしていました。
ですが……わたしの、エンシェル・レナの覚悟と正義は、そんなものでは揺らぐことはありません！
「お願いスピニール、力を貸して！」
わたしは、両手に槍を握りしめ、強く語りかけます。
誇り高き王の牙は、わたしの覚悟に応え、聖なる力を解放します！
「誇り高き王の牙！　槍の精霊スピニール！　我が願いに答え、その鋼を貫きし力を我に与え給え！」
コォォォォォォッ！
長大な槍身に、凄まじい魔力が充填されていきます。複数の刃で構成された先端部が大きく展開して変形し、邪悪を滅ぼす聖なる輝きを纏います！
「いきます！　コズミック・ペネトレーション！」
噴き出す魔力の勢いのまま、わたしは魔物へ突撃しました。
エイジスフォームの能力でさらに強化された、武装精霊による必殺の一撃。
これで……終わりです！
「グァァァッ！　ギャァァァァ！」
武器から伝わる、命を奪う重い手応え。断末魔の叫びとともに、聖槍の直撃を受けたモルフガイストの肉体は、爆発するかのように四散しました。千切れた触手や肉片が、返り血とともにわたしの身体にかかります。
「っ……モルフガイスト……強敵でした。でも……勝ったのはわたし……エンシェル・レナです……っ！」
戦いの汚れを拭うこともせず、わたしは武器をカードに戻すと、はぁっと大きく息を吐きました。
これで今日もゼロポリスを守れた……誰も、傷つかずに済んだ。
そんな達成感とともに、重い疲労が全身にのしかかってきます。
「はぁ、はぁ、はぁ……っふぅ……」
（勝てたけど……やっぱり……魔力の消費も、体力の消耗も激しい…）
強力な力には、それだけの代償があります。エイジスフォームは圧倒的な戦闘力を与えてくれますが、その分、激しい消耗を強いるのです。
「わたし……エンシェリウムカードを、もっと使いこなせるようにならないと。でも……今日は、これで……」
アザハイド帝国との戦いはまだまだ続きます。課題も多いですが、今日のところは戦いに勝ち、この街を守ることができたのです。
「ありがとう、スピニール……エンシェリウムカード。わたし、もっと強くなるから……貴女たちを使いこなせるようになるから。だから、これからも力を貸してね……」
心強い仲間たちに感謝の気持ちを伝えると、わたしは変身を解こうとしました。ですが……。
にゅる……ぐちゅ、ぐちゅる……！
「う、あ……あぁっ!?」
――その時、でした。
コスチューム越しに伝わる不気味な違和感に、わたしは悲鳴にも似た声を零してしまいました。
「な、何……これ？　何か、ヌルヌルって、動いて……あぁっ!?」
胸やお尻、お腹や太もも……女のこの身体の中でも、特に敏感な場所ばかり。何かヌルヌルとしたものに、コスチューム越しに柔肉を撫でられている……そんな違和感に視線をやり、わたしは思わず驚愕の喘ぎを零しました。
「な……何、これ？　魔物の破片が……はぁぁっ。ニュルニュルって、う、

著者近刊　『ディバインハートマキナ ～反逆の女神～』『エンジェルストライカーズ』『超昂閃忍ハルカ 堕ちたる上弦 淫辱の刃』『鮮血の聖女エクレア 聖なる執行者』『くノ一淫舞伝 霧音 闇の風に抜忍散る』『聖天使ユミエル』シリーズなど　好評発売中！

動いてる……ぅ!?」
先程の戦いでたっぷりと浴びてしまった返り血……粘液質な魔物の体液や、千切れた触手や肉片などは、純白のスーツにべっとりとへばりついています。
すでに活動を止めたはずのそれが、今やまるで別個の生き物のように蠢き、コスチューム越しにわたしの身体を揉み触っているのです。
「うっ……こ、こんな……ひぁ、あ、ああっ！　き、気持ち悪い……」
コスチューム越しでも感じる、そのおぞましい感触……魔物の体液はヌルヌルとぬめり、べっとりとボディスーツに張りついています。触手の断片は今なおビクビクと蠢いて、それ自体が意志を持っているかのようにわたしの身体に絡みついていました。
ぴっちりとフィットしたスーツに締めつけられて、身体のラインそのままに浮かんでいる乳房やお尻が、揉まれ、つねられ、絞り上げられます……！
「うあっ……や、いや……あ！　そ、そんなとこばかり……く、ふぅっ！」
気持ち悪さに悶えながら、わたしは蠢く触手に手を伸ばしました。グラブに包まれた指先で、不気味な肉触手をグッと掴み、力を込めて引き剥がそうとします。
「っ……も、もう戦いは終わったんです。レナを犯そうとしたって、無理です！　だから……は、離れて……！」
恐るべきは魔物の生命力、いや執念でしょう。完全にトドメは刺したのに……肉体がバラバラになっても、なおも蠢き、こうしてわたしを辱めようとしているのです。
もう勝敗は決しているのに……こんなことをしても、何も変わらないのに。
最後の一瞬まで足掻いて、レナの身体を嬲り抜こうとしてくるの……！
（また……こ、こんな、しつこい……しつこすぎます。最後まで、レナのこと、犯そうとしてくるなて……！）
けれど、こんなことは、これが初めてではありません。
アザハイド帝国の魔物は、邪悪な皇子ディネロの命を受け、わたしを捉えようと……そして、戦いの最中においても、わたしの心身を辱めることを目的としているのです。
これまでの戦いの中、その恐るべき力に敗北したこともあります……。
そうなれば当然、待っているのは……筆舌に尽くし難い陵辱。
女のコにとって、あまりにも辛すぎる……死んだほうがマシと思えるぐらいの恥辱と陵虐で、心も身体も苛め抜かれるの……。
そして、戦いに勝利したとしても……呪いじみた魔物の執念は、様々な手段で、わたしの心と身体を追い詰めてくるのです。
そう……今回のように……！
「うあっ、ダ、ダメです……はぁ、っくぅん！　む、胸……やぁ、搾るようにしちゃ……やぁ、お尻も……ぉ！」
そして、そんな悪魔の陵辱によって、わたしの身体は消えない傷を刻み込まれてしまっています。
ディネロは言っていました……わたしは心と身体にどうしようもない被虐の性を秘めている、淫乱なマゾの素質がある、って。
違う、絶対にそんなことない……わたしは、絶対に認めたくはありません。
けれど、けれど……！
「はぁ、っくぅ、ふ、あぁんっ！　ダ、ダメですっ……お願い、も、もう離れて……こんな、ヌルヌルって……はあぁぁ、んんっ！」
（や……い、いやっ。わたし、な、なんて声を……）
拒絶の声に、甘い媚が混じっていくのがわかります。
身体が熱くなって、両手に力が込められなくなって……魔力を消耗した直後ということもあって、触手を引き剥がすことができません。
ダ、ダメ……このままじゃ……！
「くぅぅ……う、うぅぅっ！　ダ、ダメ……ここで流されちゃ。わたしは正義の光臨天使なの……こんないやらしい罠に負けちゃ、ダメぇ……！」
きつく奥歯を噛み締め、気合を入れ直します。
大丈夫……魔物はもう死にかけ……大した力はありません。
消耗しているといっても、エイジスフォームのパワーなら、簡単に……！
にゅる……にゅる、ぐちゅるっ！
「!?　え、え……ああっ!?」
グッと両掌に力を込めた、その瞬間でした。
握りしめた触手が突然ぐにゃり、と歪み、柔らかく潰れて飛散しました！
「な、何っ……っきゃぁぁ!?」
ぶちゃ、びちゃっ！
これまで肉蟲の形を保っていた触手が、まるで軟体のように……いいえ、スライムみたいに柔らかく崩れました。
粘体を掴むことはできず、それどころか力を入れた拍子にそれは潰れて、掌から溢れて飛び散ります。
勢い良く飛散した粘塊は、純白のコスチュームにべっとりとへばりつき、あるいは唯一露出したままの顔にびちゃっ！　とかかってしまいました。
「や、か、顔は……ひぅっ！　ヌルヌルして……う、動いてるぅ……！」
アメーバ状に形を変えたモルフガイストの残骸は、小さく千切れてもまだ不気味な蠢動を止めていません。
それどころか、さっきよりも動きが活発になってしまって……うにょうにょ、ブヨブヨと蠢いて、わたしの顔面や変身してピンク色に変わった髪を這い回り、あるいは顎先からダラっと垂れて首筋に至り、そこからスーツの内側にまで流れ込んできます。
「やっ……ダ、ダメぇ！　動かないでください……やぁ、ス、スーツの中に入っちゃダメぇ。うあ、肌に直接……ヌルヌルが……ひゃ、うぅっ！」
じゅる、ぐちゅ、ぶちゅ、じゅる！
聞くに堪えない粘音を響かせながら、

我が物顔に動き回るスライムたち。流動質な身体を活かし、僅かな隙間からスーツの内側にまで雪崩込んできます。
（うあ……は、入ってる……入ってきちゃってる。ヌルヌルして、動いて……冷たくて、粘っこくて、き、気持ち悪いのが……スーツの、中に……！）
コスチューム越しでも生理的嫌悪を禁じ得なかったスライムですが、直接地肌で感じる触感は別格でした。
ひんやりとした冷たさ、肌に吸いつく粘っこさ、ニュルニュルと常に変形を繰り返すいやらしい蠢き……何もかもがおぞましく、怖気が立つほどに気持ち悪すぎます。
すぐに取り出したかったけれど、エイジスフォームのコスチュームは隙間なく身体にフィットするボディスーツだから……こうして内側に潜り込まれてしまっては、為す術もありません。
「くぅ……ダ、ダメ……ダメ！　う、動かないで……出ていってください。ああ、そ、そんなニュルニュルって……ひぃ、そ、そこ……ぉ……⁉」
無敵のスーツの内側に潜り込んだ粘塊はなんの遠慮もなく、加速度的に伸縮していきました。
首筋から上半身にまで滑り落ちて広がると、ひんやりとしたスライムは広く大きく伸び、乳房を包み込むようにして広がっていきます。
「こ、こんな……スライムが、胸に……ふぁ、っく、ふぅ……んんっ！」
両方の乳房をすっぽりと覆われ、アメーバ状の被膜で包み込まれる……まるで、スライムで出来たブラジャーを着けられてしまったみたいです。
たまらない気持ち悪さに悶える間も無く……わたしの両乳房をラッピングしたスライムブラジャーは、激しく振動を開始しました！
「ひゃっ、ひ、くひぃぃんっ⁉　こんなぁ、ふ、震えて……ふぁあぁ、あ、あああぁんっ！」
ぐちゅ、ぶるん、ぶるんぶるん！
にちゅっぐちゅっぶるるるんっ！
「ひあ、あ、ああっ！　は、激しいぃ……スライムが震えて、お、おっぱいが……はぁ、あはあぁぁっ！」
密着スーツの内側で、不気味なスライムにおっぱいを完全にラッピングされ、激しい振動で虐められる――まるで逃げ場のない責めに、わたしは大きく喉を反らして悶絶しました。
スライムたちが振動するたび、スーツの中で乳房がめちゃくちゃに揉み捏ねられ、根本から先っちょまでを何度も何度も搾られる……乳首もにゅるにゅると締め上げられ、まるでヌメった唇で吸われるように刺激されます！
「やぁ……あ、ああっ！　う、動かないで……止まってぇ。おっぱいも、乳首も……こんな、ダ、ダメ……ぇ！」
魔物の淫辱を止めようと、せめてスーツの上から乳房に手をやりますが……全然ダメです。
コスチュームの上からでは、内側に潜り込んだ魔物を牽制することもできず、逆に自分で自分の胸に刺激を与えることしかできません。
むしろ、グラブに付着していたスライムたちまでもが蠢きだし、スーツの外側からも、おっぱいへ刺激を与える結果になってしまいました。
さらにはスーツに絡みついていた触手や肉片も次々とスライム状に変質し、ヌルヌルと動いて生地越しにわたしの身体を刺激してきます。
「はぁ、や、ぁ……ああぁんっ！　ダメぇ、こ、こんな……ああんっ！」
ぬちゃぬちゃ、ぐちゃぐちゃっ！
コスチュームの上からも下からも、激しく蠢くスライムによって乳房を弄ばれて、快感に悶えてしまうわたし。
衣装の内側をなんとかするどころか、手袋から胸生地に移動してしまったスライムを引き剥がすこともできず、粘液まみれの乳房を白い指先でヌルヌルと擦ることしかできません。
でもそうすると……粘体質なアメーバの責めとは違う、固い指の感触が乳肉にめり込んで、余計に感じて……！
「はうっ、お、おっぱい……やぁ、ダ、ダメっ！　こんなので感じちゃダメなの……い、意識を集中しないと……ふぁあ、あ、ああっ⁉」
ぬる、ぐちゅ、にちゅっ！
コスチュームの内側に潜り込んだスライムたちは、そこでさらに新たな動きに出ました。
おっぱいへの揉み込みはそのままに、一部のスライムたちはどろっと蕩け、さらにスーツの奥へと流れていきます。
お腹を伝わり、お臍の窪みをクチュクチュと刺激しながら、さらにもっと下……女のコの大事な部分にまで、ドロドロと流れ込んでくるのです！
「や、いや……ああっ！　や、やめてください……そ、それ以上はダメなの。そ、そこは女のコの大事な……ひあああ、は、あああぁぁ～～！」
次に来るであろう陵辱の一手を予期し、わたしはスライム相手にふるふると顔を揺すって懇願してしまいます。
けれど当然……これまでレナを辱めてきたアザハイド帝国の魔物たちすべてがそうであってように……このスライムもまた、わたしのお願いなんて、聞いてはくれませんでした。
「う、うあ……ああっ！　は、入ってくる……レナのあそこ……恥ずかしいところにまで……ぬるぬるって、入ってきちゃってます……うぅ……！」
ぬる、じゅぶ、ぐじゅるるっ！
これまでの愛撫で恥ずかしく濡れてしまっていた、そしてはしたなくヒクついているあそこに、軟体質なアメーバは簡単に入り込んできてしまいます。
「ふあああぁぁっ！　やぁぁ、こ、こんな……はうぅっ入ってきてるぅ、ヌルヌルして冷たいの……レナの中に、いっぱい、いっぱい……ぃ……！」
肌に触れられるだけでもおぞましかったスライムが、直接、身体の内側に入り込んでくる……女のコの身体の中でも敏感な、性粘膜で直接味わわされ

無敵戦士インビンシブルリナぁ!!
我らの組織に楯突く者は潰す!
貴方たちの攻撃なんか
少しも効かないわ!
バカな!
オレ様のパンチで無傷!!?
絶対防御を身に纏い悪を討つ!!
無敵戦士
インビンシブルリナ
～貫かれた無敵の盾～
漫画／ぱふぇ

インフィニティ
ブラスター!!

ああ
ああ
ああ
ああ

ええい！
またしても

ダン

いまいましい
インビンシブル
リナめ！

あんな小娘に
なぜ勝てん？
弱点は
ないのか!?

奴のような
存在が現れた
時のために
私がいるの
ですよ

ご安心
下さい

おお！
魔法元帥!!

奴の強さの秘密などすでに暴いておりますぞ

あらゆる物理攻撃毒ガスでさえも

無効化できるまさに無敵！

く…ッ

だがワシの魔法は防げんようだな！

魔法だろうと何だろうと

負けないんだから！

ハハハハ無駄無駄！

無敵の防御力を失った貴様なぞしょせん
ぐ…っ
言わせておけば…
ただの小娘にすぎんわ！
ならば必殺！
インフィニティ
ブラスタ
――!!

ああ！
我ら組織に楯突いた者がどうなるか
泣いて謝るまで辱めて見せしめにしてやる！
くッ
無効化…できない!?
ううッ放せっ
な…にを
く…〜〜〜っ
放せ！私は何をされても
負けないんだから！
なら追加じゃ
媚薬が効かないだと？

いくら打っても無駄よ
そんな物効かないんだから！
ククク そうだった 薬も無効化するのだな
ぐい
ならば
恥じらいという感情も
ぐい
ぐぐぐ
無効化してみせよ！
ああっ
ッ〜〜〜〜ッッ
ガハハハハ そうら全国に貴様の痴態を中継してやる
やだ！ 変態!!
放しなさい ケダモノ！

二次元ドリームノベルズの元祖変身ヒロイン、
正義のスーパーヒーローチーム
「サンダークラップス」がニジマガに登場！

今度の敵は不気味な仮面野郎!!
フレアの孤独な闘いが
始まる……！

好評配信中！

電子書籍限定！
『サンダークラップス！リボーン
パラサイトクライシス』

小説 NOVEL／羽沢向一（はざわこういち）
挿絵 ILLUSTRATION／緑木邑（みどりぎむら）

サンダークラップス！リボーン
THUNDER CLAPS! REBORN
テスタメント

第一章

鈴堂麗はダイニングキッチンで夕食の天ぷらを揚げていた。

二十代なかばの豊満な美しい肉体をつつむ純白の割烹着は、わざわざ専門店で吟味して選んだ逸品。電気コンロに乗った天ぷら鍋も、手にした菜箸も、浅草は合羽橋道具街で買ったプロ仕様。

衣装と道具にふさわしく、天ぷらを操る手つきは軽やかに美しい。

その手がふいに止まった。

美味しそうな音を奏でる鍋の上に、いきなり身長十五センチのブレザー姿の美少女が出現して、油の表面に立っている。

もちろん立体映像。スーパーヒーローチームのサンダークラップスの自宅兼基地である屋敷を管理する人工知能のアバター小電光だ。

立体映像の少女は、自分をデザインした主人を見上げる。

「麗様。テスタメントの新たなテレビニュースが入りました。御指示の通り録画をしています」

「ありがとう。今すぐ、みんなを居間に呼んで」

鍋の中から急いで天ぷらを出して、大皿の紙に並べると、コンロを切った。

麗が割烹着のまま居間に入ると、畳に敷いた座布団にもう三人が座っていた。

北原静子は自分用の研究室でのプログラミングを中断して来た。

柳イザベラ美果と日向燦はおそろいのランニングシャツとトランクス。リトルボルトに呼ばれるまで、二人で軽いスパーリングをしていた。タオルで上気した汗をふいている。

麗は空いた座布団に正座すると、リモコンでテレビをつけた。

画面に人気の女子アナが映り、事件用のきびしい顔つきでニュースを読みはじめる。

『今日、午後三時すぎに、東京都葛飾区のマンションで、住人の田端憲明さんが射殺死体で発見されました。現場を捜査した警察によって、被害者は通称キツツキと呼ばれるオフビートの暗殺者だと判明しました。ウッドペッカーは小さな鳥に似た生物を操り、鋭い嘴で脳や心臓に穴を開けるという方法で、わかっているだけでも八人を殺害しています』

「あいつをどうやって見つけたの⁉」

静子が高い声をあげて、座布団から身を乗り出した。

「ウッドペッカーの正体をつかもうと、警察やヒーローたちの間で懸命になっていたのに……」

『田端さんの胸には「遺言に従い、死を送る」と書かれたカードが乗せられていました。同じカードを残す射殺事件は、これで六件目になります。過去五件の被害者はいずれもオフビートの犯罪者でした』

画面に六枚の写真が映った。テレビを見つめる四人の顔がともにけわしくなる。すでに何度も目にした、これまでの犠牲者たちだ。

サンダークラップスは相手をしたことがないが、二人は派手なコスチュームを着て大都市で暴れる粗暴犯。ヒーローが駆けつける前に射殺された。

もう二人は、表に現れなかった影の知能犯。ヒーローも警察も把握していなかったアジトで撃たれた。

さらに二人は、驚くべきことに刑務所の独房の中で銃弾を受けた。

『連続射殺犯の素性は今もってなにもわかっていませんが、カードに書かれている言葉から、ネット上では「遺言」と呼ばれています』

画面が切り替わり、有名な匿名掲示板のスレッドが映し出された。

『オフビート犯罪者を捕まえるだけのスーパーヒーローと違って、完全に退治してくれるんだから、テスタメントこそ本物の正義だ！』

『テスタメントみたいな、悪党を殺すのをなんていうんだっけ？』

『自警だよ』

『本当に必要なのは、ヒーローじゃなくて、ヴィジランテ！』

「それはダメよ！」

麗の怒声とともに、身体から青白い電光が伸びて、テレビの映像をグニャリと歪ませた。感情が昂ってつい放った電撃を急いで回収して、麗は柔和な表情でチームメイトを見まわす。

「見ての通りよ。テスタメントが犯罪者を殺すたびに、共感する人々が出てきているわ」

美果が南米育ちらしいオーバーな身振りで、ランニングシャツから露出する両肩をすくめてみせた。

「ボクがちっちゃいころに、ボクが生まれた国にも、『軍隊蟻』と名乗るヴィジランテのグループがいたよ。全員がかっこつけた黒いコスチュームで、ギャングを何人も殺して、ちょっとだけ人気が出た。でもヒーローの『骸骨貴婦人』に逮捕されて、結局は消えちゃった。ボクもカラベラカトリーナにあこがれて、よくまねしたっけ」

燦はきびしい顔つきで、画面の中で警察やヒーローの不甲斐なさを語る解説者をにらむ。

「ヴィジランテが消えたのも、その時々のヒーローの活躍があったからだ。人々に悪を正義と誤解させる犯罪者は、できるかぎり早く捕えなくては、あ！」

まだ汗に濡れている燦のランニングシャツの上半身に、背後から麗が抱きついた。

「その通りよ！　偽物の正義に負けないように、サンダークラップスもがんばらなくてはね。さあ、ご飯にしましょう」

「わーい！　麗ちゃんの天ぷら大好きっ！」

美果が子供のように歓声を放って重い空気を吹き飛ばし、燦と静子の手を握って、猫のように身軽に立ち上がった。

著者近況　今号掲載の「テスタメント」は、電子書籍用の作品の前半をニジマガ用に編集したものです。電子版では加筆して、フレアがもっとイロイロされているのでご期待ください。

＊

燦がコンビニエンスストアの壁の時計を見ると、午前一時七分。

ニュースでテスタメントの六人目の犠牲者が出たという一報を見てから、ちょうど六時間がたった。

燦はホッチキスの針の箱だけをレジに出した。切れていることに気づくと、深夜だというのにがまんできずに買いに来てしまった。

自宅兼サンダークラップス基地から歩いて十五分ほどのよく利用するコンビニなので、白いTシャツとダークブルーのデニムパンツにサンダルという気楽な格好だ。針の入った箱をパンツのポケットに押しこんで、コンビニを出た。

燦たち四人が住んでいるのは、昔からある住宅街。この時間に自分以外の出歩く人影もなかった。

いきなり目の前に男が出現するまでは。

明かりが灯っていない家のレンガ壁の表面から、男の身体が突き出した。

二十代なかばのチャラい顔が、街灯に照らされる。壁から現れたダークグリーンのジャージの右手は、黒いスポーツバッグをかかえていた。

壁の前に全身を現した男も、燦に気づいて、二人は同時に声を出した。

「えっ！」

「あ！」

燦のほうが、身体の反応が速かった。ほとんど反射的に右手を伸ばし、ジャージ男の右の手首をつかんだ。

「きみは泥棒か？　あれっ⁉」

指に触れる男のジャージの布の感触がなくなった。五本の指をすり抜けて、男の右腕が離れる。

（物体を透り抜けるオフビートか！）

ジャージ男が燦へ顔を向けて、得意満面にチャラチャラと笑う。

「悪いねー、おねえちゃーん。まーた今度ねー」

（こいつ！　わたしをただのおせっかいな通行人だと思っているな）

自分の正体がばれていないのはいいが、燦はわりきれない怒りを覚えて、駆けだすジャージ男の背中へどなりつけた。

「ふざけるな！　待て！　あら？」

意外にもジャージ男の身体が止まった。それどころか背中から燦へ向かって跳びこんできた。

「嘘っ⁉」

燦はとっさにジャージ男を受け止める。緑色の左肩に、ついさっきはなかった赤い色彩が目に入った。間違いなく鮮血だ。

「銃撃！」

真夜中だが街灯の光があれば、燦の視覚は昼と変わらずに見える。ジャージ男の倒れ方から、真正面から撃たれているはず。しかしまっすぐに伸びる道路の先に人影はなかった。

「いったいどこから⁉」

二十メートルほど前方の道路と交わる狭い路地から、銃弾が飛び出した。普通なら道路を横断して、反対側の家の塀に当たるはずだ。

実際には道路の中央で、銃弾の軌道がほぼ直角に曲った。明確な殺意を感じさせる動きで、ジャージ男へ向かって飛んでくる。

燦は考えるよりも速く右手を男の胸の前にまわし、手の甲で銃弾を受けて、路面へ弾き落とした。普通の弾丸が当たったくらいでは、肌に傷もつかない。

ぐったりしたジャージ男の身体を抱いて、夜の中へ呼ばわった。

「何者だ！　姿を見せろ！」

返答は新たな射撃だった。消音器（サプレッサー）をつけているのか、発射音はないが、正面からではなく、背後から、左右から、頭上から、銃弾が曲線を描きながら飛来する。

燦はジャージ男の身体を自分の胸に押しつけて、両腕を素早く動かし、前と左右から来る銃弾を跳ね飛ばし、たたき落とした。背後から来る弾丸は、自分の頭と背中に当たるにまかせる。

「おまえの弾は、わたしには効かない。あきらめろ！」

ふいに射撃が止まった。最初に銃弾が現れた路地から、人影が姿を現した。

ごく普通のダークグレイのスーツとスラックスを着た人物。中には黒いシャツ。そして黒い革靴を履いている。

体型から見て、大人の男。中肉中背。オールバックになでつけた短い黒髪。衣服の上からは身体的な特徴は見受けられない。

唯一目を引くのは、顔だ。

顔に、くすんだ銀色の金属の仮面をつけている。

なめらかな表面には鼻がなく、記号的な二つの目と口だけがあった。両目の穴は黒いミラーシェードになっていて、装着者の目を覗かせない。

単純な造形だが、目と口の微妙な形状で、悲嘆にくれた泣き顔に見えた。

哀しみの仮面から、機械を通して変化させた声が聞こえた。

「遺言（テスタメント）に従い、その男に死を送る」

「おまえがテスタメントなのか！」

「だが、今ここではテスタメントを執行できそうにないようだゲブッ！」

スーツの腹に、一瞬で距離をつめた燦の拳がめりこんだ。

「うるさいよ」

一撃で意識を飛ばされて、テスタメントがその場に崩れた。

相手が気絶したことを確かめて、燦はスマートフォンで警察とサンダークラップス基地へ連絡した。

＊

警視庁の取調室の壁にあるマジックミラーの窓の前に、フレアと年配のベテラン刑事がなかよく並んで、中を覗いた。

スーパーヒーローとして名前が売れた特典は、警察の捜査にある程度参加

著者近刊　『サンダークラップス！リボーン　パラサイトクライシス』（電子書籍限定）『調教豪華客船　女子大生陵辱クルーズ』『わが家は魔法の王国亡命ハーレム』『魔王さま、異世界で勇者となる』　好評発売中！

できることだ。そのためには警察との友好関係を築いておかなくてはならないが。

昨夜、燦はテスタメントを気絶させてから、チームメイトが持ってきたフレアのコスチュームに着替えて、警察に経緯を話した。

今朝にはテスタメントの取り調べをするという連絡があり、見学を申し出たのだ。

今日もフレアとして警察に来たので、コスチュームを着ている。

フレアのコスチュームは、よく白いチアリーダーと言われる。

外から見るとノースリーブにミニスカートのワンピース。じつはレオタード型のボディスーツのウエストに、スカートに見える布がついた作り。

しなやかな両脚には白いロングブーツ。高く隆起した胸では黄色い炎の模様が踊り、背中では腰までの長さの白いケープが下がっている。

フレアが見つめるマジックミラーの向こう側の殺風景な室内では、机を挟んで刑事と被疑者が向かい合う、ドラマでもよくある光景が展開していた。

被疑者は、燦が捕まえたときと同じダークグレイのスーツだが、銀色の仮面は机の上に置かれていた。

あらわになった素顔は、四十代くらいの男。平凡な容貌だが、薄い唇を強く閉じて、完全黙秘を貫く堅固な決意がみなぎっていた。

事実、いっしょに取調室をうかがっている山田刑事が、髪の薄い頭を振ってぼやいた。

「あの調子だよ、フレアちゃん」

捜査一課の山田刑事とは、サンダークラップスが活動をはじめてからのつきあいで、何度も協力している。

「やつは息を吹き返してから、ずっとだんまりでね」

「山田さん、あいつの素性はわかったのですか？」

フレアの問いに、山田刑事はメモ帳を出して開いた。

「指紋をインターポールに照会して判明したよ。東南アジア各国で暗躍するプロの殺し屋だ。日本に入国したのは今回が初めてだな。本名は不明だが『バナナショット』と呼ばれてる。ふざけた名だが、自分が撃った弾の軌道を自由に曲げられるオフビートだ。くわしい資料はメールでローズちゃんに送るよ」

「おかしいですね。その能力のプロなら、標的の前に姿を見せるのは避けるはずです」

「わしもそれがひっかかってるんだ。フレアちゃんの身体は防弾だ。さっさとしっぽを巻いて逃げりゃあいい。そもそもバナナショットは金のためにしか動かない生粋の殺し屋だ。悪党を殺してまわる無料奉仕をする奴じゃない。とくに昨夜の無名のコソ泥は、たまたま目についたから殺そうとしたとしか思えんよ」

あいかわらず沈黙するバナナショットを、フレアはじっと見つめた。

視線がひとりでに、机の上に置かれた銀の仮面の泣き顔に誘導される。シンプルな表情が変化するわけでもなく、今やただの置物でしかないのに。

「あの仮面は、バナナショットの本来のコスチュームなのですか」

「その記録はないね。本来は目立つコスチュームを着るタイプではないはずだ。うちの科捜研がざっと調べたが、ただのお面ではなく、なにか仕掛けがあるようだ。とはいえ科捜研の技術では、内部の透視も分解もできなくて困っとるよ。いまのところ、わかっているのはこれくらいだな」

「ありがとうございます」

「フレアちゃんは、今日はこれから新宿のチャリティイベントに出るんだろう。そろそろ時間じゃないかな。なにかあったら連絡するよ」

「イベントのことを、よくご存じですね」

「わが家はサンダークラップスのファンだからな。今日のイベントにも、長男の史郎が行ってるんだ」

山田刑事がにっこりと笑い、スマートフォンの画面を見せた。大きなサンダークラップスのポスターの前に、山田刑事と二十代の青年がなかよく立っている画像だ。見ているだけで父子が円満な様子が伝わってくる。

「よく似ている息子さんですね」

「そうかい。史郎は、まあ、わしとは正反対の学者志望でね。大学で外国の難しい本を原語で読んでるよ」

ますます山田刑事の顔が、ニコニコと崩れた。本庁捜査一課の鬼刑事が放射するほのぼのした空気に触れて、フレアも顔をほころばせる。

「今日は屋上から飛ぶかい。嗅ぎつけたマスコミが外で騒いでるからな」

「そうさせていただきます」

フレアは山田刑事と連れだって警視庁の庁舎の屋上に出ると、ヘリポートの中心に立った。一礼すると、左右のブーツの底を白いHの文字からふわりと浮き上がらせ、一気にスピードを上げて飛翔する。

青空に消える白い影を、山田刑事が目で追い、つぶやいた。

「スーパーヒーローが飛んでいく姿は、いつ見てもいいねえ」

第二章

東京都庁をはじめとする高層ビルにかこまれた巨大公園の一画に設営された特設ステージを、フレアは眼下に見ていた。

フレアが空中で静止している位置は、公園にいる人々からは小さな点にしか見えない高度だ。逆にフレアの目は、地上の様子がよく見える。

広いステージ上では、色とりどりのフリルをヒラヒラさせて、五人組の女性アイドルグループ『ラッキーリーグ』が軽快なパフォーマンスを披露していた。ステージ前では、男が八割、女が

二割の大勢の観客が歓声をあげつづける。
ラッキーリーグが三曲を終えると、ファンに向けて高らかに告げた。
「ここでスペシャルゲストの登場でーす！　わたしたちも大ファンのスーパーヒーロー！　サンダークラップスのフレアだよ！　さあ、みんなでフレアを呼ぼう！」
ラッキーリーグ全員がきれいに声を合わせて叫んだ。
「せーのっ、フレアーッッ！」
「フレア――――ッッッ！」
観客からの呼び声がひとつの大きなうねりとなって、空へ昇ってくる。
フレアの右耳に入れた通信機が、スタッフの声を発した。
「フレアさん、降りてください」
「了解です」
経験から学んだことだが、空を飛べるヒーローが舞台の袖から歩いて出てくると、人々は落胆する。過去に出演したイベントでも、屋内であっても、飛んで現れることを要求された。
フレアは空中で身体を上下逆にして、顔を地面へ向け、自分の名を呼ぶ声の渦へ向かって降下した。公園にいる人々に恐怖や威圧感を与えないように、スピードは調節した。
見上げる顔の列に驚愕と感動の表情がくっきりと浮かぶのを視認すると、身体の向きを地面に水平にして、人々の頭上を旋回しながら手を振る。
こういうタレントみたいなことは、正直なところ気恥ずかしい。先輩ヒーローたちの慈善活動を見て、これもスーパーヒーローの務めだと信じて引き受けている。
歓声を浴びながら、ステージ中央の赤いビニールテープの×印に着地した。
「こんにちは、皆さん。サンダークラップスのフレアです」
大歓声がどっと噴き上がる。収まるまで、少し待たなくてはならなかった。
「今日は『ザ・セイヴ』のイベントに呼んでいただいて、心より光栄に思います」
フレアとラッキーリーグの背後にそそり立つステージの壁に、ザ・セイヴと大きな赤い文字の列がある。
文字の下には、二人の男がなかよく並ぶ大きな写真パネルが飾られていた。
ひとりは白衣姿の中年の男。鳥の巣のようなもじゃもじゃの黒髪と、分厚いレンズの眼鏡が目立つ、いかにも学者然とした温和な風貌の人物だ。
もうひとりは学校の制服らしい紺のブレザーの若者。髪の質や聡明な顔つきが、中年男とよく似ている。
ひと目で父と息子だとわかる二人の背後には、複雑な機械が並び、大学か企業の研究室に見える。
背後の写真へ向けて、フレアは右手を上げた。
「ザ・セイヴは偉大な工学者佐々木伸郎博士が十年前に設立しました。不幸にして御子息の佐々木繁さんが犯罪の犠牲になって亡くなられた後に、佐々木博士は多数の特許によって得た財産を投げうって、犯罪被害者の遺児を支援するザ・セイヴ基金を設立したのです。残念ながら佐々木博士も、ザ・セイヴを設立してから一年後に病気で亡くなられました。佐々木博士の遺志は、大きな実を結んでいます。博士の遺産だけでなく、皆さんから寄付のおかげで、大勢の子供たちを支援できて……」
バラバラバラバラバラバラ！
懸命に考えてきたスピーチは、頭上からの大きな騒音にかき消された。ステージに大きな影が落ちる。
顔を上げると、巨大なヘリコプターが一機、降下してくる。長い機体の前後に二基のローターを持つ、タンデムローター方式の軍用輸送ヘリコプターだ。
軍用でありながら、無骨な機体は軍隊ではありえない鮮烈な赤と青と白に塗り分けられている。まるで小さい子供のおもちゃのようだ。
「あの色は！」
フレアはステージを蹴り、対空ロケットのごとく空中のヘリコプターの側面にぶつかった。
グラリと大きく傾いた機体を、そのまま全身を使って押す。回転する二基のローターが生み出す力に対抗して、公園の人がいない場所に落とした。
フレアは身体をねじり、背後の人々に大声を放った。
「逃げろ！　これはショーじゃない！　こいつは『機械狂』だっ、くっ！」
地面に墜落したカラフルな軍用ヘリから、太い腕が飛び出して、鉄の拳でフレアの胴体を殴った。いかにフレアの身体が頑丈で、剛力でも、突然加えられた力のベクトルを変えられはしない。殴り飛ばされ、ボールのように地面をバウンドさせられる。
フレアが地面をえぐっている間に、ヘリコプターが機体の構造を無視して、ギギガガガゴリゴリと耳障りなノイズを大音量で奏でながら変形をはじめた。
ヘリコプターからもう一本の金属の腕が生え、二本の脚が伸びて、赤と青と白の派手な機体が直立した。
機首が三つに割れて、中からロボットの白い頭部が出現した。直線の組み合わせで目鼻や口を造形した主人公らしい鉄の顔が、フレアを見下ろす。
ロボットの頭の上部から、さらに意外なものがニュッと生えた。
人間の上半身だ。
ロボットと同じ配色のパイロットスーツを着たマッチョな男の腰から上が、鉄の頭から突き出している。肉体にぴったりとフィットしたスーツとロボットの白い金属は、溶け合うように融合して、境界線が存在しない。
鋭角的なヘルメットをかぶった顔は、過剰に自信に満ちた笑みを浮かべて、見る人を不安にさせる。笑顔から熱血すぎる大声がドッとあふれた。
「やあ！　サンダークラップスのフレア君！　わが名はグレートスカイキン

グ！」
立ち上がったフレアが憤怒の大音声でさえぎった。
「おまえのことはニュースでよく知っているぞ、マシンマニアック！」
男は自分自身の身体を機械と融合させて、思うがままに変形させて操るオフビート。その能力はインフラを操り、大都市を支配することも可能だといわれている。
しかしマシンマニアックは乗り物と融合して、アニメに出てくるような巨大ロボットを造って暴れるだけに能力を使った。迷惑すぎる愉快犯だ。
本人は出現するたびに異なるスーパーロボットの名前を自称するが、世間からはネットで誰かが名づけたマシンマニアックと呼ばれていた。
「たいせつなチャリティを妨害したことは許さない！」
「いいとも。フレアと闘いたくて参上したのだ！　ぼくの鉄拳をもっと喰らえ！」
鉄の足で地面を掘り返して、ロボットが走る。頭上のマシンマニアックが右手の拳を握り、前へ突き出した。
今度はフレアも前へ走り、左のパンチを繰り出す。
フレアの拳と、人間の上体と同じサイズの鉄の拳が、真正面から激突した。サイズだけならロボットが圧倒的だ。
だがぶつかった瞬間に、ロボットの拳がグシャリと内側につぶれる。フレアの左腕が肩まで、ロボットのつぶれた右腕の中に潜りこむ。
左腕を突き入れたまま、右手で歪んだ鉄の腕をつかんだ。
「このっ！」
力をこめて身体をひねる。バキバキと悲痛な音をたてて金属が裂け、破片をばらまいて、ロボットの右腕が胴体から引きちぎれた。
（マシンマニアックは機械を自分の身体として操っていても、力まかせの脳筋だ。こういうやつの相手は、わたしの得意分野だ）
フレアは自分が肉体の頑強さと怪力だけのオフビートだと自覚している。
もぎ取ったロボットの右腕を振り上げて、残っている左腕の付け根に向けてたたきつけた。
グワシャッ！　と破壊音を公園に轟かせて、金属の腕同士が互いを粉砕する。左腕も付け根からちぎれて、地面に落下した。
「腕がああああっ！」
と、マシンマニアックが絶叫した。
フレアが読んだデータによれば、マシンマニアックは融合しているロボットが破壊されても、本人に痛みはない。
それでも芝居がかった表情で、芝居がかった声をあげる。
「よくもおおおっ！　グレートスカイキングを見くびるな！　グッレートッッブーメラッッンッ！」
両腕を失ったロボットの背後から、二基のローターが前へまわった。背中から伸びる二本のマニピュレーターが、空気を切って回転するローターを支えている。
こんな物騒なものを投げられたら、公園のどこで被害が出るかしれない。
フレアは高速で飛んだ。上ではなく、ロボットの足もとへ。
頭上からローターが回転ノコギリと化して襲ってくる。ぎりぎりでかわすと、すぐ脇で地面が深く掘り返され、土くれが高く散乱した。
ロボットの股の間をくぐり抜け、背後から鉄の右脚を蹴りつけてやる。
巨体のバランスが崩れ、もんどり打って倒れた。自らの重量で、下敷きになったマニピュレーターが二本ともへし折れる。
転倒の衝撃を受けて呆然とするマシンマニアックの両腕を、フレアがつかみ、強く引っぱった。パイロットスーツの下半身がロボットの頭部の外へ出て、地面をずるずると引きずられる。
フレアは腰のベルトの背中側にある小さいポーチから、白いダクトテープを出し、マシンマニアックの手首と足首を縛った。常人の犯罪者を拘束するための道具だが、機械から離れたマシンマニアックにも有効だろう。
自由を奪われ、地面に横たわるマシンマニアックが、むやみに清々した表情でフレアを見上げてきた。
「今回はぼくの敗北だ。だが、次は必ずフレア君に勝つ！」
「寝言は刑務所で言え。それよりも軍用の輸送ヘリなんて、どこで手に入れたんだ」
「それは最重要機密さ」
フレアがあきれていると、背後からワッと大歓声が押し寄せてきた。ふりかえると、観客たちがスマートフォンやカメラを向けて走ってくる。
プロのマスコミも撮影機器を構えていた。イベントにはもともと取材が来ていたが、数が増えた。公園での事件がネットに上げられて、他のマスコミにも知れ渡ったのだろう。
プロだけあって、マイクを握る男女のリポーター、カメラマンに音響スタッフが、観客たちを巧みにかき分けてフレアの前へ並んだ。遠慮のないマイクの砲列が突き出される。
「フレアさん！」
名前を呼ぶ合唱が響く。
だが、その後につづくはずの質問の十字砲火が撃たれない。
記者やリポーターの顔が、そろいもそろってカメラの前ではありえないポカンと呆けたものになった。マイクをフレアへ向けたまま、動きを止めて立ちつくしている。
「どうしたんだ!?」
周囲を見まわすと、大勢の観客たちも、まだステージにいるラッキーリーグのメンバーも、イベントのスタッフたちも、死んだ魚のような顔つきで立ち止まっている。
フレア以外の公園にいるすべての人々が、立ったまま意識を失っているようだ。

守護猫童女
アキ
しゅごねこどうめ
きゃあああああ!!
美脚で蹴散らす和装変身ヒロイン!!
そこまでよ怪人!!
みんな逃げて!
グアアアアッ!!
ぐっ! また出たか…神獣の童女…!
漫画 COMIC さき千鈴

ぐわっ!!
はぁあああああっ…
とどめっ!
がら…
ぱら
桁外れの能力だ…頭を使わなければ勝てんな…
がら…
ニラッ
封印っ!!

やった？
ぽっかり。
…いや…逃げられたぞ…
あちゃー…
せっかく能力を与えたのに雑に動き過ぎだ…
落ち着いて精神統一すればもっと強くなって敵なしだというのに…
神獣
00:09
通話終了
あーっ！もうこんな時間！学校っ!!
ここら…！話は終わってないぞ…！
おおい…！明来!!
変身終了～

手伝って
あげてるんだから
めんどくさいことは
無し無し～
タッ
タッ
タッ
なぜ私が
こんな苦労を…
あの世とこの世の
狭間にある門を守る役目を
手伝ってもらうには
一筋縄ではいかんな…
稀に門番の私の目を
盗んであの世からこの世を
侵略しに来る者が現れては
暴れることがある
ぎっ
ぎっ
ぎっ
ぎっ
私はここから離れられない故
能力の一部を貸し渡し
排除してもらう手下が必要だが
うーむ
素質がある者を選出して
倒してもらっているが…

くか
人格にはまだまだ難有りだな…
神獣の童女…！見つけた…!!
なんだあっ!?
きゃああっ!!
うわあっ!!
何!? みんなっ!!
さっき逃がした怪人だ!! 明来！
天衣を身につけよ！くるぞ戦闘だ!!
おっけ！変身っ！

あいつはどこ!?
痛っ！今度は何!?
…!! しまった！それは怪人の毒だ!!
どっ毒!?
ああっ！やだ…！
刺されたところが…熱いっ!!

聖天使ユミエル外伝
サイケデリックナイト
小説 NOVEL 黒井弘騎
挿絵 ILLUSTRATION 白う～凪い
二次元ドリームノベルズ
人気作の外伝登場！
異形の怪物エクリプスと戦う
美少女戦士ユミエル
ナイトクラブにエクリプスの気配を感じ、
足を運ぶが……

「う、うわぁ……」
脳に響く大音量の音楽、目くるめく色を変えるネオンボールの光。
華々しさを超えて毒々しくさえある、あまりにも派手な情景――サイケデリックな色彩の中では、何人もの若い男女が赤裸々に睦み合い、酒に溺れ、我を忘れてダンスに興じている。
真夜中のナイトクラブは、まさに、情熱と欲望の坩堝。その熱量に、少女は圧倒されっぱなしだった。
（す、すごいところに来ちゃった。こんなトコ、わたし、初めて……）
少女――羽連悠美は、改めて、ここが自分には場違いな場所だと痛感した。
楚々としたブレザーをかっちりと着こなし、綺麗な黒髪を肩上で整えた、見るからに生真面目で朴訥そうな女学生――その外見の通り、悠美は純情そのものの女の子だ。こんな盛り場に来たこともなければ興味もない。いや、ここが実際にどんな場所なのかも、はっきりとわかってさえいないのだ。
だが、そんな場所に足を運んだ理由は、自分にしか出来ない……いや、やらなければいけないことがあるからだ。
（……感じる。ここなら、エクリプスが巣にしていてもおかしくない！）
目立たないように注意しながら、店内の様子を窺う悠美。すると、見るからに柄の悪い男たちが声をかけてきた。
「いけないコだなぁ嬢ちゃん。ここはお子ちゃまが来る場所じゃないぜ？」
「純情そうな顔して、最近のガキは進んでるねぇ。一人でこんなトコ来て、お前も楽しみに来たんだろ、ええ？」
「え、あ……あの……そ、その。わ、わたしは……あの……その……！」
大柄な男たちに囲まれるようにして話しかけられ、言葉に詰まる悠美。
男たちの言葉通り、悠美の外見はあまりにあどけなく、このような盛り場に似つかわしくないものだ。
お子様と評されても無理はない、愛くるしい童顔と未成熟な肢体。見るからに純情可憐、幼気な少女だったが――男の視線を釘付けにするのも、また無理からぬ話だった。
無垢な幼貌は見るからに可愛らしく、純情可憐な美少女そのもの。綺麗に揃えられた黒の長髪に、可愛らしいリボンがワンポイントで魅力を増している。
未発達で子供っぽいとは言え、その肢体は、蕾から開く瞬間の花の美しさを湛えたものだ。ブレザーを精一杯に押し上げている小さな乳房や、柔らかに肉をつけ始めた伸びやかな太もも、小さくも可愛らしく膨らんだヒップラインなどなど、年頃の少女ならではの甘酸っぱい魅力を匂わせている。男たちを上目遣いで見つめる不安げな表情は、見るからに庇護欲を……否、暗い嗜虐心を掻き立ててやまなかった。
「へへ、そうビビるなよ。嬢ちゃんも興味があるからここに来たんだろ？」
「いいぜ、今夜はたっぷり楽しんでけよ……いや、俺らが朝まで楽しませてやるからよ、げへへへ！」
甘酸っぱそうな獲物を前に、男たちは下卑た欲望を隠そうとしなかった。慣れた様子で一人が背後に周り逃げ場を潰すと、もう一人が前面から手を伸ばし、膨らみかけの少女の胸に手をやる。
「やめてください！　わたし、そんなことのために来たんじゃありません！」
パシッ！　伸ばされた男の手を、悠美は強く払った。その瞳には怯えはなく、強い意志の力が輝いている。
「痛ッ！　な、なんだこのガキ、急に強気になりやがって……！」
無力だと思っていた獲物に抵抗され、苛立たしげに唸る男。怒りに任せ、今度は少女の肩を掴もうとするが――
「ぽ、暴力はいけませんよ！」
小柄な少女は素早い身のこなしでそれをかわし、男の脇から抜け出してしまう。場慣れした者にしか出来ない、まったく無駄のない体捌きだった。
逆に怒りに任せていきりたった男は、力余ってその場に倒れてしまう。
「あっ……す、すみません！　だ、大丈夫……ですか……？」
「て、てめえ……ぶっ殺してやる！」
こんな男にも心配そうに声をかける、優しすぎる聖少女。そんな態度が、余計に男の怒りに火をつけた。
その喧騒に惹きつけられた客たちが、ワイワイと周囲に集まってくる。
「ハハ、ガキ相手に何やってんだ！」
「んん～、でもこの女かなり上玉だぜ？　ちょいロリ体型だけど、へへ、たまにはこういうのも悪くないなぁ」
「おいビデオ用意しろよ、違法ロリモノは高く売れるぜ、その上輪姦孕ませとくりゃ大人気だ、ヒャハハ！」
男たちは一様に下卑た笑みを浮かべ、悠美ににじり寄る。その様は、欲望のままに動くケダモノそのものだ。
（……っ。この人たち……！）
油断なく周囲に相対しながら、悠美は得心する。このような状況は、初めてではない――そして、想定していなかったことではないのだ。
（ここはエクリプスの……欲望の影の巣。集まった人たちも、その影響を受けて、理性を失ってるんだ……）
――ことの始まりは小さな噂だった。
とある都市の路地裏、人気のない廃ビルの地下に、その店はある。
そこに行けば、どんな欲望も叶う……酒、女、ドラッグ、さらに非合法な性行為や暴力行為、背徳の宴も。
そして実際に、その周囲では、行方不明になる若者も多く――事件の影にエクリプスの存在を感じた悠美は、こうして、単身で乗り込んだのだ。
（この中にいる……欲望に呑まれた人間の成れの果て……エクリプスが！）
エクリプス――『蝕』を意味するその名の通り、それは、人を蝕み闇へと堕とす欲望の影。欲望に囚われ人間の尊厳を失った心弱き人間は影魔と化し、無尽蔵の欲望を満たすべく人々を襲い、食らい、幸せを蝕み尽くす。
影の存在であるエクリプスを知るも

著者近況　今年でデビュー15周年、つまりユミエルも15周年です！　なので今回の執筆が楽しみすぎて朝早く目覚めてしまうような少年の心を持ち続けている黒井弘騎を、ユミエルともども今後ともよろしくお願い致します！

のはおらず、その所業は巧妙に隠匿される――そう、彼らを狩る者以外には。
「いや～勇ましいねぇ。自分から俺たちの巣に足を運ぶだけのことはある」
「ッ!?」
理性を失いかけた人々とは違う、冷静な――それでいて、その奥底にさらなる邪悪さを滲ませた男の声。
声の主は、悠美のすぐ後ろにいた。
「……貴方が……この人たちを……！」
「そう。全部アンタの考えてる通りだよお嬢ちゃん……いや、影の狩人、と呼んだほうがいいかなぁ？」
「ッ！」
膨れ上がる危険な気配。振り向いた悠美に、男は残酷な笑みを投げかけた。
「噂は聞いてるぜぇ～？　俺たちエクリプスの天敵……せっかく人間やめて楽しくやってるのに、水を差してくる正義のヒロイン様がいるってねぇ」
見た目通りに軽薄な調子で語る男。その姿が見る間に歪み、変質していく。
細身の身体が膨張し、服を破ってぶくぶくと膨張する。大小様々な瘤を生やした表皮は不健康に生白く、そのシルエットは人型を保っているがゆえにいっそうグロテスク。頭部はキノコのように広がり、肉の傘を形成していく。
「実を言うと待ってたのよ、間抜けな正義の味方ちゃんが罠にかかるのをね。ここは俺の巣、周りの人間は俺の意のまま、手下でもあり人質でもある……辛いよねぇ、正義の味方って」
全身に刻まれたひだがうねり、キノコ型の触手が何本も伸びだした。
その姿の、なんと奇怪なことか――菌類に寄生されたような、キノコと人間とが混じり合ったかのような異形。人間の唇がニヤッと笑みを浮かべ、そこから白い胞子を噴き出した。
「……貴方たちは、いつもそう。自分のために他人を巻き込んで、幸せを奪って……恥ずかしくないの!?」
「いやいや、俺はこいつらも幸せにしてやってるんだぜぇ？　ここじゃ好きなだけ欲望を解放していいんだ……この極上のドラッグでねぇ！」
ぷしゃああっ！　傘状に膨らんだ頭部から、不気味な胞子が散布される。空気中に漂うそれを吸った男たちの様子が、さらに狂乱を増していく。
「お、おおお……オォォ……！」
「女……犯す、犯す……グヘヘ！」
白目を剥いて舌を突き出し、そして大きく股間を膨らませる。その様は、まさに欲望の奴隷そのものだ。
「他人の欲望を呼び起こし、無理矢理に快楽の奴隷にする……これが貴方の能力なの、エクリプス！」
「ああ。俺様の胞子は最高最悪のドラッグだ、みんなで楽しくイっちまえるのよ。この俺様……サイケエクリプス様の生み出した快楽地獄へな！」
完全に変質を終えた茸怪人――サイケエクリプスは、全身から大量の胞子を噴出した。それは人々を狂わせ欲望へと導く、悪魔のドラッグなのだ。
「っく……ぅ……！」
そしてそれは、少女へも容赦なく襲いかかる。視界が濁るほどの大量の胞子を前に、悠美は口元を手で覆った。
「はは、無駄だぜ。すぐに薬が全身に回る……どんな人間も同じだよ、快楽には逆らえない。一皮剥いたらケダモノさ……こいつらも、お前もな！」
「……違う！」
悠美は口元を覆いながら、鋭い視線で怪物を睨みつけた。
その輝きは、可憐な少女とは思えない、強く揺るぎない意志を感じさせる。
「人は、そんなに弱くない。人は欲望に負けたりしない……けれど、貴方たちエクリプスは、いつもそう！」
それは、幼い頃から欲望の影と戦い続けてきた少女の、心からの信念。
かつては、心迷うこともあった。
優しすぎる少女の純真は、あまりに過酷な戦いと、醜すぎる真実の前に、砕けそうになったこともある。
だが、今の悠美は、違う。
少女は、淫惨な運命を乗り越え、心身ともに強く成長し――そして、今もまだ戦い続けているのだ。
自分の意志で――人々の心の光を信じ、人々の幸せを守るために！
「人々の幸せを食い荒らす、欲望の影エクリプス！　わたしは、貴方たちを絶対に許さない！」
素早くポケットに手を伸ばすと、銀色に輝くロザリオを取り出す悠美。それを高々と掲げると、清浄なる銀の輝きが、周囲を眩く染め上げた。
「うっ！　な、なんだこの光は……」
毒々しいネオンライトとは真逆の、真っ白で清浄な輝きに、サイケエクリプスは一瞬怯んだ。周囲の男たちも、その眩さに動きを止める。
「聖なる光よ！　わたしに、希望の翼を！」
制止した時間は、僅かに数秒――それだけあれば十分だった。
言葉に応じ、聖なる光がさらに眩さを増し、少女の全身を包み込んでいく。
激しくすべてを焼き尽くすような、それでいて包み込み癒やすような――光のシャワーの中、少女は姿を変える。
そう。それは『変身』だった。
未発達な肢体はみるみる成長し、ぐっと大人びたボディラインを描き出す。四肢はすらりと伸び、腰はきゅっとくびれ、お尻から太ももへかけては瑞々しく肉感を増す。小ぶりな乳房は二回りもサイズを増し、つんと上向いた、自信に溢れた見事な稜線を描き出す。
蕾をつけた幼花が、勇気と自信を持って花開いた、凛と匂い立つ満開の女体美――スレンダーにしてグラマラス、異性どころか同性でさえ羨むであろう蠱惑のボディスタイル。顔立ちも大人びて凛々しさを増し、肩口までだった黒髪は腰まで届くロングヘアに伸長する。純真そのものだった黒髪は神々しい金に染まり、凛と伸ばされた背中からは眩いばかりの光の翼が現出した。
「わたしは、影を狩るもの……」
眩いばかりに美しい、新生した少女

著者近刊 『ディバインハートマキナ ～反逆の女神～』『エンジェルストライカーズ』『超昂閃忍ハルカ 堕ちたる上弦 淫辱の刃』『鮮血の聖女エクレア 聖なる執行者』『くノ一淫舞伝 霧音 闇の風に抜忍散る』『聖天使ユミエル』シリーズなど 好評発売中！

の艶姿――その気高き姿は、まさに天使と呼ぶに相応しい。
聖なる輝きに照らし出された産まれたばかりの肢体を、その神々しさに相応しい、新たな衣が包み込んでいく。
漆黒のボディスーツが上半身を包み込み、汚れ一つない純白のショーツが少女の聖所を包み隠す。密着スーツはグラマラスな媚肉を隠すどころかむしろ強調し、艶かしく輝く生地に浮かんだ美乳のラインはなんとも蠱惑的。若さ溢れる肢体を誇張するインナースーツ姿は、息を呑むほどに艶美だった。
聖なる威厳と、媚肉を実らせた肢体の蠱惑――相反する二つの魅力を惜しげもなく見せつける天使の肢体を、さらに聖なるコスチュームが覆っていく。
むちむちと瑞々しい肉感を見せつける太もも半ばまでが、純白のニーハイブーツに包まれた。ソックスの締めつけでぎゅっと押し出された太ももの肉感と、純白のショーツに際どく彩られた鼠蹊部の膨らみ――見るだけで罪悪感さえ感じてしまう、しかし男なら決して目を離せないであろう天使の下半身は、純白のミニスカートによって覆われる。だが、ひらめくスカートと食い込んだニーソックスに挟まれた太ももの肉感は、いっそうフェティッシュな魅力を以て輝いてしまっていた。
細い指は白のロンググラブに一本一本包み込まれ、肩口までにかかるケープが上半身を包み守る。神々しく輝く黄金の十字架が胸元を飾り、眩い光を放って少女の新たな姿を照らし出した。
「光翼天使……ユミエル！」
大きく伸びた光の翼が、雄々しく羽ばたき輝く羽根を撒き散らす。
瞬く光に照らし出された、凛々しく美しき魅惑の変身姿――少女はキッと目を見開き、凛然と名乗りを上げた。
「ここに光臨ッ！」
大きく胸を張り、高らかに新たな名を宣言する変身ヒロイン。
邪悪を見据える眼光は強く鋭く、さりとて純真な少女の優しさを失わず、迷いなき正義の光に輝いていた。
「光翼天使……ユミエル。クヒヒ、すげえな……噂通りの……いや、それ以上の最高の女じゃねえか！」
威厳さえ感じさせる聖性に圧倒され、人々は動くことが出来ないでいた。だが、彼らを操る邪悪の権化は別だ。
気高き魂と魅惑的な肢体を、フェティッシュなコスチュームに押し包んだ美しき天使――欲望の影にとって、光翼天使はこれ以上ない好餌なのだ。
「犯す……犯してやるよ天使様。こいつら全員使って押さえ込んで、休む間もなく犯し続けてやる……ヒヒヒッ。今夜は最高のパーティだぞお前ら！」
「う、うお……オォォ……！」
主の声に絆されたか、それとも、何らかの能力で強制的に操作したか。
サイケエクリプスが命じたと同時、男たちはケモノじみた声を上げた。
（……この人たちを傷つけるわけにはいかない……けれど！）
誘惑に負けてしまったとは言え、彼らはある意味では犠牲者……心優しき聖天使にとっては、救うべき存在だ。
だが、ユミエルは、彼らにその身を捧げることもしなければ、影魔の策にはまる気もなかった。
彼女は歴戦の勇士――数多の怪人を打ち倒し、重すぎるカルマを乗り越え、恐るべき影魔王にも勝利し、残酷なる運命さえ超克した――最強の光翼天使。
今のユミエルは強い――心も、力も、以前よりもずっと強く成長している。
そんな彼女にとって、この程度の苦境など、挫ける理由になりはしない！
「……ごめんなさい、みなさん。少しだけ……痛くしますからね！」
憂える瞳をしばし伏せ、しかし、ユミエルは強く言い放った。決意とともに十字架を手に取ると、眩い光が見る間に伸張し、光の剣へと姿を変える。
「影を滅ぼす聖なる剣よ！」
「⁉　ま、眩し……ぎゃああ⁉」
太陽のように眩い光が、聖剣から放たれる。ダメージこそないが、目眩ましで動きを牽制するには十分だった。
（よし！　これで……！）
人々を手足として使い、そして人質にもする気であったのだろうエクリプスの目論見は、脆くも崩れ去った。
そして、となれば――！
「後は一対一……見込みが外れたわね、サイケエクリプス！」
「ぐっ……お、お前ら！　散々良い思いをさせてやったのに使えないクズどもが……動け、俺の盾になれぇ！」
「なんて醜い……貴方のような外道に、人々の幸せを奪う権利はないわ！」
喚く怪人に向けて、輝く剣をまっすぐに構える聖天使。光の翼を大きく広げると、そのまま全力で直進飛行する。
「ひっ⁉　く、来るな……それ以上近づけばこいつらの命は……」
「遅いッ！」
卑劣な策だけが取り柄の怪人など、最強の光翼天使の敵ではない。
聖なる剣をまっすぐに構え、光の尾を引きながら突進する聖天使。その姿は、光の尾を引く流星にも似て――
「ドミニオン・ランサ――ッ！」
「ぐうぅっ……っぎゃあああ！」
無数の触手を振り回すサイケエクリプスだったが、天使の剣はその抵抗を軽々と打ち抜き、怪人の身体を貫いた。巨大な風穴を胸に開けられ、胞子の混じった粘っこい体液が飛散する。
「馬鹿な……この俺が、こんな……」
「……なめないで。わたしは影の狩人……貴方のような卑劣な影魔なんかに、負けるはずないんだから」
一撃――これが、最強の天使の実力。僅かの一撃で、戦いは決していた。
「う……お、俺たち、何を……？」
「！　みなさん、正気に戻ったんですね……良かった……」
彼らを操っていた影魔が滅び、人々が理性を取り戻す。とは言えまだ意識ははっきりしておらず、肉体の負担も大きい。虚ろなままの表情は、夢の中

にいるかのようにおぼろげだった。
「大丈夫です。そう、これは夢……悪夢のようなもの。次に目覚めた時には……全部、忘れていますから……」
人々の無事を喜びながら、しかし、どこか淋しげに呟くユミエル。小さく羽ばたくと、光の羽根が淡雪のように降りしきる。
「心配しないで……全部、忘れてください。わたしのことも、全部……」
光の奇跡により、彼らは、影魔に関わる記憶のすべてを消去される。無論、美しき天使に救われたこともすべて、だ。
（……いいの。みんなが幸せに戻れるなら……それが一番いい……）
達成感とともに、僅かに胸が痛む。
ずっと、この繰り返しだ。
誰も彼女の戦いを知りはしない、彼女のことを理解しない。
だから、悠美は決して知己を作らない。大切なともだちも、彼女のことを忘れてしまうから――そのほうが、彼女にとっても良いのだから。
（うん……それでいいんだ。わたし、自分で決めたんだから。ママ……恵理子……わたし、頑張ってるよ……）
心優しき天使は、誰よりも孤独だ。
だが、彼女はもう、それを悲しまない。運命を呪わない、憎まない。
彼女は、強くなったのだ――出会いと別れを繰り返し、絶望的な戦いを乗り越えて、運命さえ超克し――心も身体も、ずっと強くなったのだから。
「う、うぅ……あ、あ、ああ……！」
「な、なんだ……熱いぃ。身体が熱くて……お、おかしいぞ……ぉ……！」
「……えっ⁉」
思い出に浸った僅かの間に、異変は起きていた。意識と記憶を失い眠りにつくはずだった人々。なのに、数十人の男たちは、みな意識を保ったまま――全員が苦しげに呻きながらも、天使への包囲を解いていない。それどころか、彼らの視線すべてが、恩人であるはずの天使へと注がれていた。
それも、異様な熱を帯びたまま――
「な、なぁ……ユミエルちゃんって言ったよな？　おかしい、お、俺……」
「お、俺も……はぁ、はぁ。はち切れそうなんだよ……アンタを見てるだけで、我慢できなくて……おォォ！」
よろめくように緩慢に、しかしギラギラと瞳を欲望にたぎらせ、男たちはユミエルに迫る。その誰もが、ズボンを破らんばかりに股間を勃起させていた。
（そ、そんな⁉　エクリプスは倒したのに……この人たち、まだ……？）
狂っている――欲望に支配され、人間としての理性を失ってしまっている。その影響は肉体にも顕著に現れ、みな、極度の発情状態にあった。
「ククク……馬鹿なメスガキめ……」
「！　貴方、まだ生きて……！」
困惑するユミエルに話しかけたのは、そこだけが残されていたサイケエクリプスの頭部だった。
「言っただろ……俺の胞子は最悪のドラッグだ。俺を殺しても、その効果は残り続けるぜ……こいつらは一生肉欲の奴隷よ。それに……お前もな……」
「な、何を……う、あ……っ⁉」
グラリ……。視界が歪み、足元が覚束なくなる。それでも気を取り直しなんとか姿勢を保つユミエルだったが、異常は明らかだった。
「はぁ、はぁ、はぁ……。か、身体が熱い……頭も、ぼーっとして……」
（い、いけない……！　エクリプスの毒が、わたしの身体にも……！）
最初から警戒してはいた。この胞子はサイケエクリプスの最大の脅威――人々を欲望の化身へと変えてしまう催淫効果を持っているのはわかっていた。
できるだけ吸引しないようには注意していたものの、激しい戦闘で呼吸を行わないわけにはいかない。だからこそ、一気呵成の必殺技で圧倒し、素早く決着をつけたのだが――
「はぁ、はぁ、はぁ……う、あっ。な、何これ……こんな……あああ……！」
（な、何……これ？　頭がガンガンする……意識が、集中できない……）
女を狂わす媚薬効果は、多くの影魔が備える能力だ。これまでの戦い、そして陵辱の中で、その恐ろしさは身に沁みている。だが今回の毒効は、これまで味わったことがないものだった。
「はぅっ……ああ。ど、どうして……はぁ、はぁ。こんな……あっ……！」
視界が目まぐるしく明滅し、脳がシェイクされているかのよう。目眩と嘔吐感がこみ上げながらも、気分が悪いわけではなく、むしろ心臓は早鐘をうち高鳴ってしまっている。グラッ、と脚がふらつき、ユミエルはその場に膝立ちの姿勢で倒れ伏した。ちょうど目線の高さで男たちの股間を捕らえ、思わずゴクリ、と喉が鳴ってしまう。
（う、うあ……すごい。みんな、こんなにおっきくして……こんなすごいのが、た、たくさん……）
清楚な美貌が赤く染まり、けれどもそれから目が離せない。身体の熱は加速度的に高まり、肌が火照って仕方がない。じゅんっ、と下半身が疼いて、太ももを内股に擦りつけてしまう。
「清純ぶった天使様は、ドラッグなんてやったことないだろうからな……免疫も何もないな。その様子じゃ、お前も相当好きなんだろ？　理性の仮面なんざ外して、肉欲を曝け出せよ」
「な、何を……っく！　わたし、こ、こんなの……ふぁ、あ、ああっ⁉」
ヴィッ！　影魔の言葉を否定しようとした瞬間、熱く固いモノが顔面に押しつけられた。その熱気と匂い、そして蠱惑的すぎる存在感に、ユミエルは思わず言葉を失ってしまう。
（う、あぁ。お、おちんちん……！）
硬く太く熱く、そして逞しい――真正面の男がギンギンに怒張した男根を取り出し、天使に押しつけたのだ。
「おお……ユミエルちゃん。俺、もう我慢できねぇんだよ、おかしくなっちまいそうだ！　だ、だから……！」
「やっ……だ、だめです！　こ、こん

変幻装姫 シャインミラージュ SHINE MIRAGE & 聖光剣姫 スターティア

気鋭の人気変身ヒロイン作品、夢のコラボが実現！

小説:でぃふぃーと　挿絵:高浜太郎

変幻装姫シャインミラージュ
砕かれるプライド、穢される存在

異世界からの侵略者ダーククライムとの戦いの中、弱点をつかれ敗北してしまうシャインミラージュ。高貴なプライドがズタズタにされ、その身も心も白濁に穢し尽くされる!

シャインミラージュ

東堂院財閥の令嬢。シャインミラージュとなって、侵略者・ダーククライムと戦う。

ミスティ

ダーククライムの幹部。針を使った人体改造が得意。

コミカライズも!

『正義のヒロイン姦獄ファイル』にて連載中!
(『敗北乙女エクスタシー』にて連載継続予定)

美少女ゲーム化も!

ミルフィーユブランドでアクションゲームになって登場。付録DVDに体験版が収録されてるよ!

スターティア

聖なる宝石スタージュエルに選ばれ、悪の組織と戦う正義のヒロイン。

オブシディア

シャドーマテリアルの幹部。妖艶かつ変態でドS。

シルヴァリア

シャドーマテリアルの幹部にして、スターティアの好敵手。

聖光剣姫スターティア
女幹部にふたなり調教される変身ヒロイン

小説:あろまーら　挿絵:8000

スターティアは妖艶なる女幹部オブシディアの卑劣な罠にかかってしまう。さらに好敵手である魔剣士シルヴァリアも捕らわれ、苛烈なフタナリ調教を受けるのであった……。

ダブル女幹部に蹂躙されるトリプル変身ヒロイン！
変幻装姫
SHINE MIRAGE
シャインミラージュ
砕かれるプライド、穢される存在
&
聖光剣姫
スターティア
変身ヒロインが終わる日
小説／でぃふぃーと&あろまーら
NOVEL
挿絵／高浜太郎
ILLUSTRATION
聖光剣姫スターティア・キャラクターデザイン／8000

～プロローグ～

小説：でぃふぃーと

平和な世界に突如として現れた二つの悪の組織、ダーククライムとシャドーマテリアル。

お互いに協力せずとも、強大な力を持つ異世界からの侵略者に対抗する手段を持たない人々。このまま闇に支配されてしまうかと思えたが、彼らの前に二つの希望の光が舞い降りた。

「あなたたちの悪事もここまでですわ!! 闇を裂く神聖なる光。変幻装姫シャインミラージュ、ここに光臨ッ!!」

「聖なる刃を携えて、正義の光が悪を討つ！ 聖光剣姫スターティア、輝きまとってここに光燐ッ!!」

変幻装姫シャインミラージュと聖光剣姫スターティア。

正体が謎に包まれた二人の正義のヒロインの活躍により、悪の組織の作戦の尽くが失敗に終わっている。

彼女たちがいれば大丈夫だと、美少女ヒロインの最終的な勝利はもはや約束されたものとして、人々の心から不安を消していた。

しかし、正義が確実に勝つのは漫画やアニメの中だけの話。これから彼女たちの身に何が起こるかを、誰一人として予想できる者はいなかった。

そう、ある二人を除いては……。

※

「その話、乗らせてもらうわぁ」

深夜のとある廃ビル。その屋上で、ゴスロリ衣装を身にまとった少女と、それとは正反対なボディラインを持つ妖艶な褐色美女が相対していた。

ダーククライムの幹部の一人である少女、ミスティが赤い瞳を細めて笑みを浮かべる。

「流石、話がわかるわねぇ。このことは私とあなただけの秘密よ」

ミスティの反応に満足気に頷きながら、シャドーマテリアル七冥塊の一人、〝黒曜の〟オブシディアもまた笑った。

「わかってるわよぉ。こっちも結構ボロボロだし、敵対し続けて全滅してちゃただのおバカさんだものぉ。私は私が楽しければそれで構わないわぁ」

「うふふ、私も同じ考えよ。やっぱりあなたとは気が合うみたいねぇ、ミスティ」

交わるのは二つの闇。一切協力する姿勢を見せることのなかったダーククライムとシャドーマテリアルの幹部二人が、秘密裏に手を結ぶ。

すべては邪魔な正義のヒロインを倒すため。そして自らの欲望を満たすため。彼女たちは嗜虐的な笑みを浮かべた。

※

街外れの廃工場内。普段は人の気配を感じさせないこの場所で、激しい音が鳴り響いていた。

「人質などと卑怯な真似を……許せませんわッ!!」

群がる戦闘員たちを一切寄せつけずに、怒りの変幻装姫が駆け抜ける。

休日の街中に現れた怪人と戦闘員たちに対処するために現れたシャインミラージュとスターティアに告げられた人質の存在。

場所は二ヵ所。二人の変身ヒロインは罠の可能性が高いとわかっていても、救出のために向かわざるを得なかった。

「シャイン・スラストッ!!」

人質を前にして現れた怪人。接近戦に特化した手強い相手ではあったが、必殺の一撃により変幻装姫の勝利で決着がついた。

「もう大丈夫ですわ。どこか怪我はありません？」

部屋の隅で、黒い縄で縛られていた女性を抱き起こす。目を開いた彼女は、ゆっくりと口を開き――

「あ、ありがとう……罠にかかってくれて」

「なっ――くうぅぅぅぅッ!?」

歪んだ笑みを浮かべたかと思えば、シャインミラージュの全身に黒い電撃が纏わりついた。

まるで電撃による拘束。完全に油断していた変幻ヒロインは搦め捕られてしまう。

「あははははッ!! 流石は正義のヒロイン様。ちゃんと助けに来てくれて嬉しいわぁ」

「お、オブシディアぁ……どこまでも卑怯な真似を……んぐぅぅ……んぅあぁッ……!!」

そう、人質という存在が罠。ただの女性であったはずの身体が、蜃気楼のように歪み褐色の女幹部へと完全に変化した。

「こ、こんな電撃……んん……すぐに破って差し上げますわ……!!」

罠に嵌められた屈辱に表情を歪ませるが、この程度の電撃であればもうすぐ解除できる。

オブシディアが何かをする前にと、シャインミラージュが黒電撃から逃れようとした瞬間。

「ほんの少しでも私が近づく隙があれば十分なのよねぇ。はいオシマイ」

「んぶぅっ!? こ、これはぁ……」

オブシディアの肩のアーマーから放たれた黒いガスに覆われる変幻装姫。

息を止めることも間に合わず、脳をトロかせる甘い香りに誘われるように、シャインミラージュの意識が黒く染まった。

「さしもの神聖なエナジーといえども、私の科学力を防ぎきることはできないようねぇ。あははははッ!!」

※

同時刻。悪の幹部が密会していた廃ビルで、スターティアはミスティと対峙していた。

「人質はどこなの!?」

「うふふ、私を倒したらちゃぁんと場所を教えてあげる」

「ならすぐに終わらせるわッ!! ティアセイバークレセ……きゃあっ!?」

先手必勝と必殺技を放とうとしたス

著者近況 変身ヒロイン特集で『シャインミラージュ』を書けて、しかも『スターティア』とコラボできて凄く嬉しいです。ゲーム版もよろしくお願いします!!（でぃふぃーと）

ターティアの足下の床が、突如として波打った。

足場の急激な変化にバランスを崩しかけるが、咄嗟に転がり無事な部分へと逃れる。

「これ、ミスティの能力……」

「シャインミラージュに邪魔されない分、こっちは準備万端。さぁ楽しんでいってねぇ」

ミスティが闇のエナジーによる黒針を生成し周囲へと突き刺していく。

そう、この廃ビルは完全にゴスロリ幹部の手によって、異質な空間へと歪められていた。

「ひゃっ!? こ、このぉッ!!」

逃げていくミスティを追おうにも、床はトランポリンのように弾み、壁から何本もの太い突起が襲い掛かる。

スターティアは全方位からの攻撃に対処することで精一杯で、ミスティにまで届かない。

このままでは無駄に時間だけが過ぎ、消耗していくだけ。ならばと、剣姫はティアセイバーを持つ手に力を込める。

「輝刃瞬閃ッ! ティアセイバー……ハリケ――えぶッ!?」

安定しない床ではなく、壁から伸びる突起を足場としてミスティへと必殺の一撃を放とうとしたスターティアだが、その身体は床へと叩きつけられる。

足場にしたはずの突起が、まるで蔦のように脚に絡みつき跳躍を妨げていたのだ。

「私の針、便利でしょぅ? あなたはここでゲームオーバーねぇ」

「は、放して!! まだ、あたしは負けてないんだから……うあぁぁッ!?」

倒れたスターティアが立ち上がる前に、同様に変化した壁や床が剣姫を拘束していく。

そして、そんな彼女を襲う黒いガス。スターティアの意識は、一瞬で闇に沈んでいった。

～シャインミラージュ 変態ふたなり女幹部の洗礼！～

小説：あろまーら

ピンク色の内装が品のないいかがわしさを増幅する、とあるラブホテルの一室。

そこでは、本来こんな場所には絶対にそぐわない存在……正義の令嬢ヒロインたるシャインミラージュが、悪のふたなり女幹部相手の淫猥極まる肉奉仕を強制されていた。

「んふふっ、そうよぉその調子♥ もっとそのバカでかい乳肉を下品にヌリュヌリュ動かして私のチンポを挟みシゴくのよぉ、シャインミラージュちゃん♥」

「くッ……! こ、これでいいんですの、オブシディア……ううっ、さ、最悪ですわ……っ!」

ストライカーフォームのレオタード状コスチュームのまま、ベッドに座ったオブシディアのビンビンに反った巨根を乳コキさせられる屈辱の着衣パイズリ。

ローションでヌルヌルにされうっすら肌色が透けた純白の双球は、今や女幹部のゲスな欲望を満たすためのパイズリオナホへと蔑められてしまっている。

「ああんっ、コスチュームごと挟ませるのたまんなぁい♥ やっぱり正義のヒロインどもはこうやってバトルスタイルのまま汚し抜くに限るわねぇ♥ こ、興奮で先走り汁ドクドク漏れるの止まんなぁいっ♥」

「な、なんてゲスな発想ですの……! 恥というものを知りなさいっ、この変態女幹部っ!」

部屋に連れ込まれてすぐ強制されたのは、初めて見るふたなり巨根へのおしゃぶり奉仕。エグい量のザーメンをたっぷり飲まされる最悪な初体験に目を白黒させる間もなく、変幻ヒロインを次に襲ったのがこの強制着衣パイズリ奉仕というわけだ。いくら性知識が乏しくとも、行為の変態性は容易に想像できてしまう。

だが、キッと睨まれ罵声を浴びせられた女幹部は、なおさら自慢の肉棒をビキビキと硬くする。

「あん、もっと言って♥ 初めて見た時からこうして挟まれたかったスケベおっぱいに包まれてるんですもの、あんたのクソ生意気な態度もぜんぜん気にならないわぁ♥ むしろチンポ喜んじゃう♥ んぉお♥」

（こ、この……っ! うう、スターティアが捕らえられてなければ、隙だらけのこいつ一人ごとき逆転のチャンスもありますのに……!）

オブシディアとミスティ、悪の女幹部二人は相手を『交換』して、それぞれ別室で調教を開始した。その際、もし抵抗の素振りを見せれば即時通信によって知らされ、もう一方が無惨な目に遭うと脅されている。いわばヒロインたちは互いが互いの人質なのだ。

「本当は恨み重なるスターティアを真っ先に辱めたかったけど、まぁあとの楽しみにしておくわ♥ それに、あの娘と違ってあんたのはしたないスケベデカ乳、うっぷん晴らしのヌキ道具にはぴったりだしぃ？♥」

（な、何を勝手なことを……ッ! でも、今は耐えなければ……っ! 耐え抜けば、きっと二人で逆転するチャンスも巡ってきますわ!）

人払いされたこの建物のどこかで、スターティアもまたミスティにおぞましい変態行為を強いられていると思うと気が気ではなかったが、それでも正義の心はそう簡単には折れない。きっとスターティアも同じことを考えているはずだから、なおさらだ。

「ってちょっとぉ、何手ぇ抜いてるのよ? 誠心誠意乳奉仕してくれなきゃ気持ちよくドピュれないじゃない、使えないバカ乳ホルスタインヒロインねぇ!♥」

仲間のことを考えて心ここにあらずだった変幻令嬢の頬とバイザーを、カ

著者近刊 『変幻装姫シャインミラージュ 砕かれるプライド、穢される存在』（でぃふぃーと） 好評発売中！

ウパーで赤黒くテカった悪の亀頭がべちべち無遠慮に叩く。
「うっ……やぁっ!! わ、わかっていますわ……こ、こうやって中央に寄せて挟み潰すように揉みコけばいいんでしょう……っ！」
「お、おっほ♥ そうそう、やればできるじゃない♥ そ、その調子ぃぃ……あ～チンポが幸せぇ♥」
にゅるッ♥ ぬりゅぐんっ♥ と下品な水音を立て、ローション塗れのスケベ水風船が太肉棒を圧搾した。この部屋で調教が始まってから三十分以上、さんざん教え込まれた恥知らずなパイズリテクニックだ。
（そ……それにしてもなんておぞましい男性器ですの……しかも女の身体からこんな大きなモノが……っ）
褐色女幹部の誇るふたなりチンポは、令嬢が乏しい性知識で漠然と想像していたものとはまったく違う、まさに女を蹂躙し尽くすための肉の凶器だった。
（こんなモノに奉仕させられるくらいなら、ミスティに虐げられる方がまだマシというものですわ……！）
大切なスターティアがまだこれの毒牙にかかってないことがせめてもの慰めと自分を励まし、無心で巨乳を揉み動かすシャインミラージュ。だが、その吐息には次第に熱く湿ったものが混じり始めていた。
「はぁ、はぁ……っ♥ くっ、熱い……っ♥ な、なんて馬鹿みたいなサイズのおチンポですの……っ！ む、胸が火傷しそうですわぁぁ……！」
目の前でパンパンになった亀頭がニュッ♥ ヌブッ♥ と乳谷間から飛び出て鼻先に迫るたび、輝く金髪の下で令嬢ヒロインの目はうっすら潤み、先のフェラ奉仕の時に教えられた淫語までつい口に出る。
感度のいい乳肉を自分で丹念に揉み続けているわけだから、この行為が快楽をもたらしてしまうのも道理だった。それに加えて、彼女自身は決して認めないだろうが……眼前でむんむんとオス臭い熱気を放つふたなり巨根の威容は、正義のヒロインがコスチュームに押し込めた女としての未開発の欲望を、じわじわとトロ火で炙るように刺激してもいたのだ。
「んぉぉおッッ♥ ま、また濃ゆいスペルマこみあげてきたわぁッ♥ 来そうよ出そうよドピュりそうよぉぉッ♥」
そして無意識に熱心さを増す乳コキ奉仕に、ご満悦の女幹部は金玉を不気味にドクドク脈打たせる。
「こ、今度は顔よぉ♥ バイザーごとブチ汚してやるわぁ♥ ほらほらっ、さっき教えた通りに顔射乞い媚びゼリフ言いなさいこの変幻ホルスタインっ！♥」
「くぅぅっ……！ わ、わたくしの……調子に乗った小生意気な処女顔にっ……！ たっぷりと悪のスペルマ吐き出して、コスチュームのままザーメン臭いお便器ヒロインにしてください、ませ……っ！」
無理やり卑猥なセリフを紡がされるヒロインの表情は、従順とは程遠い怒りと嫌悪に満ちた睨み顔だが、それがなおさら女幹部のぶちまけ欲をムラムラと刺激する。
「おおぉッ出る出る出るお望み通りひっかけてやるわメスガキぃぃ♥ デカパイ搾精でクソ生意気なお嬢様っツラにザーメンビンタぶっ放すぅ～～～ッ!!♥」
んどぴゅッ♥ ぶびゅっ、んびゅるるんッ♥ びゅくんっ♥
どりゅっんぶりゅりゅん♥ どぴゅどぴぃぃッ♥ ぶばぁっ♥
「きゃっ、あっ熱ぅぅ!! ひ、ひぃぃぃんっっ！ うえぇぇぇっっ、く……臭いですわぁぁあ!!」
バイザーにべちょぉッ♥ と初弾がブチ当たるや、嬉しそうにびゅくびゅく胴震いする太肉竿から次々と放たれ正義の美顔を汚しぬく濃厚ふたなりヘドロ。
「おぉおッ♥ おぉ出るっ♥ ぶりゅぶりゅ出るぅッ♥ あ～もうデカ乳ぶら下げといて使えない便女ヒロインねぇ！♥ こうやって発射中に乳肉みっちり寄せて残りザーしっかり搾るのよぉ♥ お、おふっ♥」
「か、勝手にあひぃっ♥ い、いやぁぁ……っ!!」
型取りプレスのように双球が変形するほど柔肉を押し潰され、敏感な乳快感と真ん中に感じる硬い剛棒の脈動に思わず甘い声を漏らしてしまう令嬢ヒロイン。
だが恐るべきことに、たっぷり放出して満足したかに見えた女幹部のチンポはなお隆々と精液塗れでそそり勃ち、次の目標に狙いを変えるのだった。
「さぁて、チンポウォーミングアップはこれくらいにして……いよいよお待ちかねのハメハメタイムよぉ♥」
「えっ!! そっそんなっ……そ、挿入はしないと約束したはずですわ！」
そう、このド変態調教が始まる前、女幹部は確かに言ったのだ。『ミスティとの取り決めで、まだ処女は奪わないから安心しなさい』……と。
「んふふ、勘違いしてるようねぇ？ もちろん処女はブチ抜きたいけどまだ我慢するわぁ……そっちじゃなくて、今からハメ犯すのはあんたの、こ・こ♥」
「ひゃうぅッ!!」
素っ頓狂な声が令嬢ヒロインの口から漏れた。オブシディアがいやらしくまさぐったのは、タイトなコスの下からでもむっちり主張する安産型のデカ尻……その谷間にある窄まり、アナルだったのだ。
「そうよぉ、このケツ穴ぁ♥ くくっ、一目見た時からなんとなくわかっちゃったのよねぇ……あんたはここをほじくられるケツセックスの素質があるって♥」
「なっ、何をバカなことをっ!! ……んひっ!! や、やめなさいオブシディアッ、そんな場所を指でっ……んぉふ

著者近況 元々はでぃふぃーと先生と同人感覚でちょっとずつ考えていたコラボがこうして誌面でまさかの実現！ 感無量です！（あろまーら）

っ!!♥」

レオタードコスチュームの上から、指で押して布を穴に押し込むようにグリグリいじる女幹部の指技に、令嬢の口から本人も予想外の甘い悲鳴が漏れた。

（な、なんですの今のは!! わ、わたくしがまさか、お尻の穴で感じるなんてそんなバカなこと……っ!!）

心中の当惑を見透かすように、弱々しい抵抗を腕で押さえつけながらオブシディアは邪悪に笑う。

「んふふっ、やっぱり淫乱ケツマンコの素質十分じゃない♥ さぁ、このぶっといエグチンポであんたの弱点穴、みっちり躾けて辱めてやるわよぉ……♥」

「ひっ!! そ……そんな太いモノ、お尻の穴なんかに入るわけがっ……!」

血管がビッシリ走った子供の腕ほどもある凶悪ふたなり棒が、尻肉谷間をニュルニュル滑ってやる気満々の反り返りを誇り、変幻ヒロインを青ざめさせる。

「それが入るのよねぇ～♥ 気付かなかったと思うけど、さっき飲ませた私のザーメンにバイオナノマシン……肛門改造用のソレをたっぷり仕込んだもの♥」

「え!! な、なんですのそれッ……んぉぉひッ!!♥」

困惑するシャインミラージュの声が、更に一段階跳ねた。女幹部の手が素早く股布をずらし、露出した色素沈着一つない上品なお嬢様排泄穴を……むにゅぐっ♥ と左右に割り広げたからだ。

密かに改造したという言葉を証明するかのように、本来以上の弾力性と広がりでぱっくり口をあけた濃い肉色の処女洞穴は、うっすら光る腸液に濡れてヒクヒクと物欲しげに震えてすらいた。

「あんっ、いかにも掘りがいありそうな処女ケツ穴でチンポ反っちゃう♥ それじゃあ、さっそく……♥」

「ひっ熱ッ!! ちょっ……ま、待って、待ちなさいオブシディアっ、嘘ウソうそまさか本当にッ……!!」

両手を後ろ手に縛られるような形でベッドに押さえ込まれ、ゼリー状精液塗れの灼けた棍棒のような亀頭を穴にあてがわれた変幻ヒロインが、これから訪れる未知の変態プレイに心の準備を終えるヒマもなく。

「はぁぁ～～～いっ♥ シャインミラージュのケツハメバージン、いただいちゃいまぁ～～～すぅぅ♥」

ずぬッ♥ ぬぶぷぷぷっ……ぬぐりゅんッッ!!♥

「ひッ……ひぎぃぃぃぃぃぃぃぃぃっっ!!? ほっほぉぉぉおおぉぉぉおお!!♥ んおっおおぉッおしッお尻いいいいいい!!♥ ほんとにアヒィィィッッ!!♥」

とてつもない異物挿入感による絶叫は、あっという間に困惑交じりの甘い媚声混じりのものに変わった。

排泄のみに使われてきた清楚な令嬢肛門をメリメリと逆行する極悪なふたなりチンポは、バイオ改造で異常分泌した腸液とさっきの精液を潤滑油に、ケツヒダの一枚一枚をめくり返さん勢いでゆっくり押し進む。

そして変身ヒロインの敏感に改造されたアナル感覚は、その処女挿入感がもたらすおぞましいまでの背徳快楽を、脳天にバチバチ突き抜けるほどに嫌でも感じさせられてしまうのだ。

「おッッ♥ おぉほっ♥ んぉぉほぉぉぁ!!♥ ひぐっ、んぁぐぅぅぅぅッッ!!?♥ あぁあひィ!!♥」

ずぶっ♥ ずぬぬぬ……ッ♥ とふたなり巨根が容赦なく未開拓領域をこじあけるたび、高貴な令嬢らしからぬ野太い下品声がどうしようもなく漏れる。

（こんなの嘘、ウソですのぉぉ……！ お、お尻に醜い異物を入れられているのにっ、こんなッ……こんな感覚ぅぅぅぅ!!♥ あ、ありえませんわぁぁ!!♥）

痛みも苦しみもゼロではない。だが今シャインミラージュの脳を焼き焦がさんばかりに襲うのは、それらを帳消しにするほどの尻穴快楽の洪水だった。不浄の排泄穴でそんなものを感じてしまっているという信じがたい事実が、彼女を混乱のただ中へと突き落とす。

「んふふふっ、感度ビンビンのケツ穴エグられるのたまんないでしょう？♥ そりゃそうよねぇ、だってさっきのバイオナノマシンで快楽神経の敏感さも思いっきり高めといてあげたんだから♥」

「なっ!! そ、そんな卑怯なッ……んぉぉぉ!!♥」

ずズンッ♥ とS字結腸まで貫き通すような重い衝撃が襲い、後ろから女幹部に貫かれる変幻ヒロインは背筋をのけぞらせた。処女の令嬢には知り得ないことだが、快楽にトロけた子宮を思いっきり小突かれる以上の超絶快感が強制的に生み出させられていた。

「感謝なさいよぉ～？♥ 初めてのケツファックで意識ブッ飛ぶくらい感じられるって普通ありえないんだから♥ もしミスティの組織の筋肉バカとかに掘られてたらこうはいかなかったでしょうねぇ～♥」

「ふ、ふざけたことをぉッ♥ だ、誰が感謝なんかするとでもぉ……んほひっ♥ ぉぉんッ♥ んぎっ、ひぃぃ!!♥ とっ止めてぇぇえ!!♥」

必死に肩越しに睨もうとしても、いよいよリズミカルに放たれるピストンが快楽神経中枢と化した尻肉性器を縦横無尽に苛め抜いてくるのだからたまらない。

シャインミラージュは美しい金髪ツインテールを馬の手綱のように握られ、精液塗れの巨乳をぶるんぶるん揺らされながら、まるでオモチャかオナホのようにおぞましい快美を伴う肛虐に翻弄されるばかりだ。

「あぁ～～～んっ♥ 処女のままのメスガキヒロインをクソ穴交尾でよがら

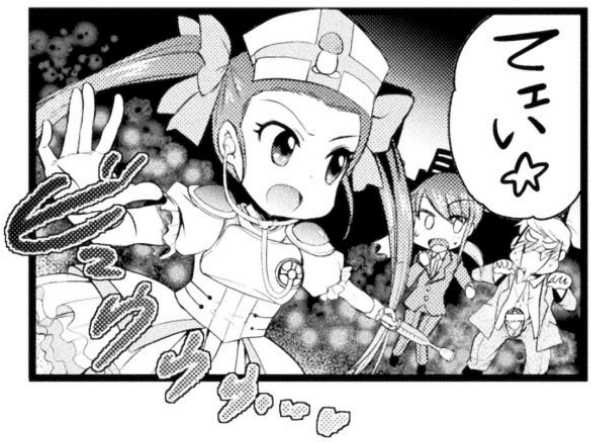
著者近刊 『聖光剣姫スターティア 女幹部にふたなり調教される変身ヒロイン』（あろまーら） 好評発売中！

可愛く元気に！
今日もたっぷり搾り取ります！

看護×戦士 ミルクin吸引ズ☆

漫画 COMIC／嘉納（かのう）あいら

はじまり



カ・イ・カ・ン

ギュルルルル!
うっ
ドクドクッ

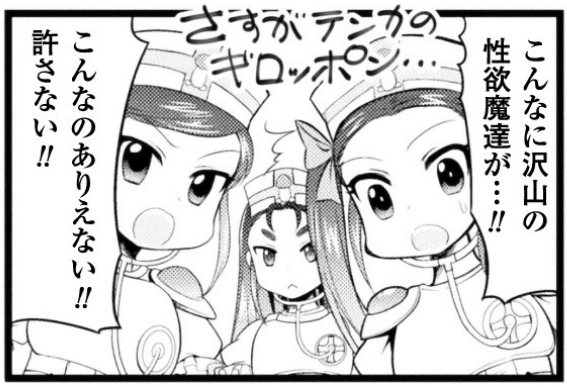
ガクッ
ペタッ
セーシミルクin吸入OK!!

さっ次の性欲魔達を倒すわよ!!
ダッ…
うんっ行こう! ウフカちゃん!
あっ

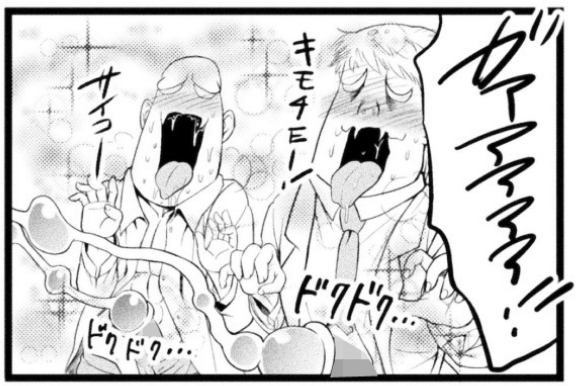
彼女たちは一体……?
杏〜ン…
素敵だ……

カ・イ・カ・ン2

うぅぅ…オナゴ…
フラ…
フラ…
フラ…
ワァイ オナゴは イネガァ〜〜…


こんなに沢山の性欲魔達が…!!
さすがテンカのギロッポン…
こんなのありえない!! 許さない!!

ザッミルクin キューイン☆


ガァァァァ!!
キモチェー!
サイコー
ドクドク…
ドクドク…

アナスタシアと7人の姫女神（ひめがみ）
淫紋の烙印
第3話
淫欲に溺れた姫女神達は世界を守ることができるのか……？
小説 NOVEL／筑摩十幸（ちくまじゅうこう）
挿絵 ILLUSTRATION／くろいわしんじ
原作／桜沢大（さくらざわひろ）

「う、うう……ハッ!?」
目覚めると、アナスタシアは自室のベッドの上、純白の下着だけの姿で横たわっていた。
（私は……確かロキに……）
ブリュンヒルデを人質に取られ、ついに処女を奪われてしまった。だが記憶が残っているのはそこまで。その後一体何をされてしまったのか、まったく覚えていない。
下腹に浮かんだ不吉な淫紋を見るとどす黒い不安が霧のように湧き起こり、小さな胸を締め付けた。
（でも……身体は動く……）
ロキの瞳術やユミルの侵蝕による影響が薄まっているのか、今は自由が利く。これは反抗のチャンスかもしれなかった。
「お加減はいかがですかな、アナスタシアお嬢様」
その時ロキがいやらしい嗤いを浮かべながら部屋に入ってきた。
「く……ロキ……」
睨み付けながら武器になりそうなモノを探す。ベッドサイドのテーブルに果物ナイフがあった。小さくとも使い方次第で十分な武器となるだろう。
（喉を切り裂いてあげます）
動けることを悟られないように、ジッと仰向けのまま距離を測る。あと一歩近づけば、必殺の間合いだ。
「朝食の準備ができましたよ、ヒヒヒ」
唇を淫猥に歪め、ズボンを下ろしていく。武器も持たず下半身丸出しという、まったく無防備な状態だ。
（今です！）
跳ねるように素早く身を起こし、伸ばした手がナイフをしっかり握り締める。
「穢らわしい虫ケラ！　ここで死になさいッ！」
「うおっ!?」
渾身の力を込めてナイフを男の喉に突き立てる！
だが、切っ先はロキの手前でピタリと止まっていた。それ以上はどんなに力を込めても腕が動いてくれない。
「うぅ……どうして……」
「フフ……クックックッ。無駄ですよ、お嬢様に私は斬れない。そういう風に『教育』しましたからね。少し思い出させてあげましょう」
「馬鹿なことを……うっ!?」
その時、いきなり脳裏に浮かび上がった淫靡な光景にアナスタシアは声を失う。
――――ミルク、ほちいの。パパのミリュク、いっぱい飲ませてぇ。
赤ん坊のような格好をさせられ、ロキに犯されているのは、アナスタシア自身に違いなかった。しかもその顔には満面の笑みが浮かんでいるではないか。
「ハア……ハアァ……こ、こんな……私が……？」
「思い出しましたか？　ククク、お嬢様は俺の娘として再教育され、その愛の証に俺の赤ん坊を身籠もったのですよ。ヒッヒッヒッ」
「ッ！　に、妊娠ですって？」
ブルブルッと肩を震わせ、銀髪を逆立たせる。最大級の屈辱とそれに対する怒りが、小さな身体から炎のようなオーラとなって噴き出す。
「馬鹿馬鹿しい。私は神族、そのような下等種族めいた行為など、絶対にしません！」
気色ばんで反論するアナスタシア。
神族は魂を直接交感させることによって新たな命を生み出すのが普通であり、肉体を使った生殖行為などあり得なかった。神族にとって肉体を使った繁殖は、下等生物の醜い習慣にすぎないのだ。
「ククククッ。それが可能なのですよ、ユミルの因子に侵蝕されれば、女神もただの牝に成り下がるのです」
「お黙りなさい！　それ以上の侮辱は……ううっ!?」
反論しかけて、突如アナスタシアは口元を覆い、腰を折った。得体の知れない嘔吐感に胃を突き上げられたのだ。
（これは……なんですか……）
攻撃を受けたわけではない。毒や術の気配もまったく感じられない。女神であるアナスタシアにとっても、完全未知なる事象だった。
「それはつわりですよ。妊娠すると女はそういう症状に襲われるのです」
「つわり？　ですって……そんな……女神である私が……あ、あぁぁっ!?」
いつの間にか下腹に禍々しい淫紋が浮かび上がり、紅い光を放っていた。侵蝕の進行を示すように、明らかに以前よりも大きくなっている。
ドクンッ！　ドクンッ！
「あ……あぁぁ……」
お腹の奥に感じる自分とは異なる鼓動。それは別の命が胎内に根付いていることを意味していた。
（こんなことが……私は本当に妊娠してしまったのですか……？）
美貌は血の気を失い、ワナワナと全身が震え、冷たい汗がドッと背中に噴き出した。事もあろうに、裏切り者の亜人ロキの子を身籠もってしまったなんて。ショックのあまり力を失った手からナイフが滑り落ちる。
「クハハッ、やっと理解できたようですねぇ」
勝ち誇った様子でベッドに上がり込み、アナスタシアの鼻先に肉棒を突きつける。
「ううっ……くさい……」
饐えた異臭が鼻を突き、思わず顔をしかめる。匂いもそうだが、ペニス自体もおぞましい姿形をしていた。標準男性の倍はあろうかという巨大さに加え、不気味な赤紫色の肉瘤がびっしりと表面を覆っているのだ。これもユミルの影響なのだろうか。
「さあ、朝食のモーニングミルクですよ」
「く……汚いモノを……あぁ……近づけるなと……はあぁ……」
――――ホチイ……ホチイ……ホチ

イ……ホチイ……。

おぞましいはずなのに、ロキの男根から目が離せなくなる。舌の根には甘ったるい唾液が湧き、膝立ちの姿勢を崩せない。

（なんなのです……この感じは……？）

唇も舌も歯茎も……喉も胃も小腸も大腸も……いやそれだけではない。身体中の細胞一つ一つが、ロキの精液を求めてざわめいているのだ。

「ハア……ハア……ッ……身体が……変に……」

身体の芯が火照り、呼吸が乱れる。何もされていないのに腋の下や太腿の付け根に粘っこい汗が滲んできた。恥ずかしいことにお腹までグウッと鳴ってしまう。

「大好きなのでしょう？　パパのミルクが……ククク」

ズイッと腰を突き出すロキ。

「う、うう……」

肉の傘が花弁のような唇をこじ開け、ジリジリと侵入してくる。

「い、いや……いやなのに……あむぅ」

鼻を突く腐臭、味覚が狂いそうなえぐみ、粘膜を擦り上げる不気味なイボの群れ……。死ぬほどいやなはずなのに、どうしても身体が動いてくれない。

「くふふっ……お嬢様のためにチンカスをたっぷり溜めてきましたよ」

歓喜の声を上げたロキが頭をガシッと押さえ、前後にピストンを開始する。窮屈で歯も時々当たるが、それもまたアナスタシアの初々しい魅力だといえる。

ジュブッ……ヌププッ……ズブッ……ヌプヌプヌプッ！

「んぐっ……うっ……ひゃめ……んむうっ！」

顎が外れそうな巨大さに圧倒され、口中に広がる恥垢の味に悶絶させられる。衝撃が頭蓋を突き抜けて、延髄にまでガンガン響く。そのたびに敵意や怒りといった感情が削り落とされ、抵抗しようという気力が萎えていく。

（ああ……どうして、こんな男に……逆らえないのですか……）

ハックを使われているわけでもないのに、抵抗できない自分が悔しかった。しかしそんな感情さえも次第に薄れ、代わって倒錯した幸福感が頭をもたげてくる。

――ホシイ……ミリュク……パパのミルクが……ホチイノ……。

朦朧とした頭の中で得体の知れない幼い声が響く。その声に促されるように舌が動き出し、肉棒にすり寄っていく。涎がドクドクと湧き出して、唇の端からだらしなく垂れてしまう。

「ほれ、ミルクが欲しかったらもっと唇を突き出して、チュパチュパ吸うのです。ヒヒヒ」

「んふっ……欲しくなんか……むちゅ……ちゅぱっ……じゅぱぁっ」

屈辱に胸を焦がしながらも、刷り込まれた赤ん坊の本能に逆らうことができない。

（ああ……お腹が……っ）

胃や腸といった内臓器官がロキのザーメンを求めてお腹の中で蠢動し、グウッグウッと浅ましい音を何度も響かせた。まるで精液を求めるだけの下品な生物にされてしまったかのよう。

「ンはっ……ちゅっ、ちゅぱ……いやあ……こんなことしたくない……んんっ……お腹、鳴らないレ……んむちゅ、くちゅん」

タコのように鼻の下を伸ばして唇を突き出し、頬を窄めて思い切り吸引する。ジュバジュバといやらしい吸着音が鳴ってしまうが、それを気にする余裕もない。

「へへへ、内臓も作り替えましたからね。ククク、いいザマですよ」

かつて自分を見下していた女神令嬢が、精液を求めてお腹を鳴らしながら肉棒にむしゃぶりついていると思うと、復讐と下克上の興奮で海綿体がガチガチに勃起する。

「そろそろ飲ませてあげましょう」

「はあ、ああ……みりゅく……くちゅぱぁっ」

射精の予兆を感じ取り、嫌悪とも期待ともつかない戦慄で、背筋がゾクッと粟立った。

「ほれぇっ！　くらいなさい！」

勝利の雄叫びと共に、濃厚な白濁がドクドクと唇に注がれてくる。

「んぐぐ……んっ……んっ……んむぅ……ぷはぁ……っ」

それを従順に飲み干してしまうアナスタシア。精液を飲まされることに抵抗感が消えていくのを恐ろしく感じながら……。

翌日、ブリュンヒルデはロキと腕を組んで城の庭園を歩かされていた。

「うう……手を、離しなさい……馴れ馴れしい」

「俺たちは結婚するのですから、これくらい普通のことですよ」

「け、結婚……ですって!?」

思わず大きな声を上げてしまい、ハッとする。先ほどから周囲の兵士たちは二人の様子をチラチラ盗み見ており、今の会話も聞かれてしまったかもしれない。彼らはまだ若い騎士見習いで、あどけない童顔が驚きで強張っている。

「ハハハッ。正式な婚約発表までは秘密にしてくださいよ。照れるじゃない

登場人物紹介

アナスタシア

主神オーディンの養子。ヴァルハラ兵団ワルキューレヴァクターの指揮官を務めるアスガルド王国最強の女神。

ブリュンヒルデ

主神オーディンの実子。アスガルド王国の第一王女であり、アナスタシアの義姉。王国軍の将軍として民を守る。

ロキ

亜人の男。アスガルド王国への復讐のため、催眠術『ハック』を操りアナスタシアとブリュンヒルデを徹底的に陵辱する。

前号までのあらすじ　邪悪なる巨人族から神々の国、アスガルド王国を守護する女神の姉妹、アナスタシアとブリュンヒルデ。二人は亜人の男ロキの操る催眠術『ハック』を受け身体も精神もロキに支配されてしまう。淫紋を刻まれロキの子を妊娠した姫女神姉妹は徹底的に陵辱されてゆく……。

著者近刊　『囚われた人妻捜査官　祐美子　母娘奴隷・黒い淫獄』『白百合の剣士 VS 黒薔薇の騎士　悦楽に散る断章コレクション』『紅の盗賊姫レイア』『淫堕の姫騎士ジャンヌ　美姫転生』ほか　好評発売中！

ですか」
わざと少年兵に聞こえるように言いふらすロキ。ロキの英雄的行為によって救い出されたブリュンヒルデ王女が、その男らしさに惚れ込んで結婚する、というのがロキのシナリオだ。内容はチープであるが、役者が揃っているだけに説得力がある。噂はいずれ城内からアスガルド全土へと広まっていくに違いない。
「うう……私は、あなたみたいな卑劣な男と結婚なんて、絶対しません」
小声ながらしっかりと反論するブリュンヒルデだったが……。
「俺の子を妊娠しているのに、今更遅いですよ」
囁きながら腰を肩を抱き寄せ、お腹を撫で回す。
「ひっ……こんなところで、やめて……人が……」
「見せつけてやりましょうよ、姫様」
腰に手を回して引き寄せ、強引に唇までも奪う。
「うう……あぁ……んむぅ……くちゅ」
身体の自由を奪われたまま舌を吸われ、生臭い唾液を注ぎ込まれると、抵抗の意志がガクンと落ちてしまう。身体の芯に力が入らなくなり、ロキの胸板に身を預けてしまう。
「お、おい、あれ……ブリュンヒルデ様とロキ様が抱き合ってるぞ」
「……いくら結婚するからって……すごい」
「そ……それに、妊娠とか言ってたような?」
若い兵士たちは目を丸くして二人の痴態に見入っている。まさかブリュンヒルデが肉体を支配されているとは思いもよらず、彼らの目にはラブラブなカップルに映っているだろう。
(ああ……人前で……いやなのに……身体が勝手に……)
くちゅっ……ちゅぱ……くちゅるっ……れろぉっ!
鼻を鳴らしながら舌と舌とがうねりながら絡み合い、クチュクチュと唾液を泡立てる。匂い立つような濃厚なディープキスに、少年兵は呆気にとられていた。
(ああ……こんなことさせないで……ドキドキしちゃう……っ)
淫紋を刻まれた胸の奥で鼓動が激しくなり、妊娠させられた下腹がきゅんっと熱く疼く。そして肉体のみならず、ロキに対する感情も次第に変化し、彼の命令には絶対従わなければならないという気がしてくるのだ。
「愛してますよ、姫様」
「あ、あん……っ」
ゾクゾクゾクッ!
耳元で囁かれると、魔薬を直接脳内にぶち込まれたような衝撃に襲われた。脳天からつま先まで、高圧電流がビリビリと駆け抜ける。
「う、うそ……です」
「ウソじゃありませんよ、ずっと姫様のことを想っていたのです。反乱を起こしたのもすべては姫様を手に入れるため。愛するがこそなのです」
キスを繰り返しながら、甘く囁き、さらに手指が秘所にも伸びる。ショーツの中は既にグッショリ濡れてしまっていた。
「うあぁ……だめです……こんなところで……人が見て……ンああっ」
「愛し合っているのですから当たり前。もっと積極的になってもいいんですよ」
「そんな……ああん」
ビクッビクッと身体が震えた。ロキの体温や体臭にも全身が反応してしまう。妊娠してさらに感度が上がったのかもしれない。
「んちゅっ……み、みんなが……見てますワ……ああぁ……はしたない……くちゅんっ」
抗議しながらも媚びた笑みを浮かべ、両手はロキの背中に回される。さらに乳房や太腿も、すり寄せていくのだ。
(嫌いなのに……ああ……どうしても、逆らえない……)
人前で痴女のような振る舞いをさせられ、ブリュンヒルデは耳まで真っ赤になる。死にたいほど恥ずかしいのに、得体の知れない興奮が子宮の底からこみ上げてくる。それは以前、人間たちの前でストリップをさせられたときに感じた感覚と同質のモノだった。
「お二人は……なにをしてるんだろう……」
神兵たちは、驚きの目でロキとブリュンヒルデを見つめる。肉体的な性行為を知らない彼らにとって、最高位の戦女神であるブリュンヒルデが、ひ弱そうなロキの指一本でメロメロにされてしまうなど、信じられない事態だった。
「ククク。こんなにオマンコを濡らして。見られて興奮したんですか」
「そ、そんなこと……」
もはやハッキリ否定することもできずに俯く。ロキの言うとおり、神兵たちの視線を意識すればするほど愛液がショーツから染み出して、太腿まで垂れているのだった。
「どうやら姫様は露出狂の気があるようですな。これは次の調教に都合が良い。ヒヒヒ」
「……ああ……これ以上何をさせる気なの……?」
「一ヶ月後、俺の巨人軍団がアスガルドに攻め込む予定です」
耳に口を寄せ、小さく囁くロキ。愛の囁きのようでありながら、その内容は悪意に満ちている。
「な……!?」
「その時のために、神兵共を骨抜きにしておこうと思いましてね。姫様の、このいやらしい身体を使って……クヒヒッ」
双乳を弄びながら、舌を絡ませ、太腿を股間に割り込ませてグリグリ圧迫してくる。ブリュンヒルデの弱点を同時に責め立て、考える隙も与えない。
「ン、うあぁ……そんなにされたら……はひぃ……ン」
「姫様のお身体はもう唇もオッパイも

オマンコも、ユミルに冒されています。その因子を神兵たちに感染させるのです。そうなれば王国軍は壊滅状態だ。ヒヒヒッ」

「ぷはぁ……そ、そんな恐ろしいこと……で、できません」

ロキの言葉に背筋が凍り付く。国を侵略する悪しき巨人に手を貸すなど、王国軍司令官として絶対に許されない裏切り行為だ。

「いやでもやってもらいますよ、姫様は俺のフィアンセなんです。愛する俺のためならなんでもできるでしょう？ハック！」

妊娠したお腹を撫で回しながら、淫呪を送り込む。

「ンあああぁ……っ」

ロキの言葉が直接脳内に刻み込まれる。ロキに対する愛が子宮の中から湧き起こり、ブリュンヒルデの意志を乗っ取っていく。ロキの術が、妊娠によってさらに強化された感じだ。

「はあはあ……わ、わかりました……ああぁ……ロキ様のため……チュッチュッ……この身体を使って……神兵たちを……んふっ……ムフン……だ、堕落させてみせますワ……あぁンっ」

（も、もう……わ、わたし……ロキ様に逆らえないっ）

ブリュンヒルデの眉が切なげにねじ曲がり、腰がブルブル震え出す。仲間を裏切る背徳感、植え付けられた愛情による多幸感、それを見られている羞恥……様々な感情が混ざり合って異様な興奮を呼び起こし、もう官能中枢は絶頂寸前だ。

「おっと、まだイってはいけません。続きは、あそこの神兵に相手をしてもらうといいですよ、ククク」

「ああぁ……はい……ロキ様」

従順に頷くとブリュンヒルデは遠巻きに見ていた神兵たちの方へ、フラフラと歩いていく。

トクン……トクン……トクン。

ゆっくり腰をくねらせながら……蠱惑的で、妖しい笑みを浮かべて……。

「こっちよ……」

三人の少年神兵を自室に連れ込んだブリュンヒルデは、そっとドアに鍵を掛ける。

（ああ……このコたちに……これからいやらしいことを……）

これまでも人間族やロキの前で辱めを受けたが、顔見知りの兵士たちの前で堕落した姿を晒すのは、格別の恥ずかしさがあった。

しかも相手は自分より年下と思われる初（うぶ）な少年兵なのであり、今回はブリュンヒルデがリードする立場だ。

「これから私が、色々教えてあげます」

微笑みながら服を脱いでいく。肌の露出が増えるにつれて、少年兵たちはゴクッと生唾を飲み込んだ。

（ああ……見られてる……）

普段のブリュンヒルデなら恥ずかしさのあまり失神してしまっただろう。しかし度重なるハックと過酷な調教のせいか、今やブリュンヒルデはその羞恥心を快楽に変えるすべを身につけてしまっていた。これも女の哀しい性といえるだろうか。

「ブリュンヒルデ様……す、すごい」

豊満な二つの乳果、それを包む扇情的なヒョウ柄ランジェリー。清純な法の女神のイメージとはかけ離れた身体を見て、少年兵たちは目をぱちくりさせている。

「これはロキ様に買って頂いたの。よく似合うでしょう？」

「は、はい……素敵です！」

「とてもお似合いだと、思います！」

興奮と緊張でガチガチになった神兵たちが声を揃えた。そんな初な反応を見ていると、妖しい情感がジワジワとこみ上げてくる。

「ウフフ、緊張しないで。私がちゃんと教えてあげるから」

肩をくねらせ、背中のホックを外す。

プルルンッと乳房全体が弾んで、ヒョウ柄のブラジャーは飛ぶようにして外れた。

「おおおっ……で、でっかい！」

「……服の上からも大きいとは思っていましたが……生で見ると……す、すごい迫力です」

「ハァハァ……乳首もあんなに赤く、サクランボみたいだ……それにあれは……ピ、ピアスですか……？」

妊娠したことで以前よりもボリュームを増した乳房を見て、若い神兵たちは大きくどよめいた。ただ大きいだけではなく、乳首には少年たちを挑発するようなハートのピアスがぶら下がっている。

「ウフフ、このピアスもロキ様のプレゼントなのよ」

自慢するように乳房をプルンッと揺さぶって見せる。妊娠によって乳房は肥大化し、乳輪や乳首も赤く、大きくなっていた。

それだけではない、最強の剣士として鍛え上げた筋肉はすっかり落ちて、代わりに柔らかな脂肪が身体全体を覆っている。量感を増して少し垂れ気味の乳房、くびれが消えふっくらと盛り上がったお腹、ムチムチの贅肉でパンティからはみ出した尻タブ……。

かつての抜群のプロポーションは影を潜め、どこかだらしなさを感じさせる熟れた女体。男を悦ばせるだけの牝肉。それが今のブリュンヒルデだった。

「私だけ裸は恥ずかしいわ。さあ、君たちも脱いで」

「は、はい……姫様」

全裸にさせた三人をベッドに腰掛けさせる。乳房を見ただけで興奮しているのだろう。幼げなペニスはピンと勃起し、包皮の先からピンク色の亀頭をのぞかせていた。

「とっても元気なのね。私を見てオチンチンを勃起させるなんて、いけない子たちね」

悪戯っぽく微笑むブリュンヒルデが、少年たちの前に跪（ひざまず）き、上体を傾けていく。

（ああ……男の子相手に……こんなことしてはダメなのに……）
時折理性が胸の奥で悲鳴を上げた。だが目の前のペニスを見ていると、そんな気持ちも薄れていく。
「ひ……姫様……？」
戸惑うのを無視して、ブリュンヒルデは双乳を寄せて勃起ペニスを挟み込んでしまう。三本並んだ肉竿のうち、最も大きなペニスを狙い撃ちだ。
「うわっ……ブリュンヒルデ様が……そ、そんなことを……っ!?」
「アフン、これはパイズリというんですよ。ウフフ、ほらほら、気持ちいいでしょう？」
ムニュ……キュッ……シュッ……ギュウッ……シュシュッ！
マシュマロのように波打つ乳脂肪が、左右からペニスを挟み込み、締め付ける。母乳を溜め込んだFカップは迫力満点で、少年のペニスはほとんど埋もれてしまうほどだ。
「ぅあぁぁっ……す、すごい……これ……すごいですぅ……くぁぁっ」
快感のあまり顔を真っ赤にして身悶える少年兵。
「こんなもんじゃないわよ、ほらぁ」
だらりと伸ばした舌から、唾液を大量に垂らし、少年のペニスにまぶしていく。
「あぁぁっ、姫様のつばがぁ」
ローションのようにぬめる唾液は甘酸っぱい匂いで少年の興奮を誘い、さらにパイズリの快感を爆発的に高めてくれるのだ。
「そ、そんなにすごいのか……」
「はぁはぁ……姫様……ぼ、僕たちにもっ」
他の二人は羨ましそうに、血走った眼を乳肉に向けている。
「慌てないで、君たちにも順番にしてあげるから」
一旦一人目の少年から離れ、二番目に大きなペニスを乳房で挟み込み、唾液をまぶしながら扱き上げる。吸い付くように密着し、根元から先端に向けて搾り上げる蠢きは、女性器と変わらない快楽器官だ。
ムニュムニュ……クチュンッ！
「くぅあぁぁ……こ、こんなにぃ……オチンチン……溶けちゃうっ」
ほんの数回擦っただけで、若い牡棒はビクッビクッと痙攣し始める。このまま責めればあっという間に果ててしまうだろう。
「まだ出しちゃダメよ。まだ本番が控えているんだから」
小悪魔的な笑みを浮かべて焦らし、三本目へと移行する。三人目の少年はまだ包茎状態で、恥ずかしそうにモジモジしている。
「ンふっ、可愛い」
そんな様子を見ていると、熱く激しい何かが胸の中で渦巻き、ブリュンヒルデは乳肉でサンドイッチにした包茎ペニスに、舌を這わせ始めた。
「ああっ……そんなところ、舐めたら……汚いです……あうう」
「そんなことないわ……ねろれろぉっ……女の子はみんなオチンポが大好きなの……ほらほらぁ……くちゅん……どんどん気持ちよくしてあげますワ」
キュキュッ……シュシュッ……ギュウギュウッ……シュシュシュッ！
乳肉を寄せる圧力を強めると同時に、上下に揺さぶるテンポも上げていく。白肌の上でタトゥが生きているように蠢き、乳首ピアスがキラキラと輝きを放った。
「ぅわあぁぁ……す、すごいよ……あぁぁ……オチンチンが……あぁぁ……オッパイに呑み込まれちゃうよ……あっ、あぁぁぁっ！」
「あ、あぁん……包茎チンポ、美味しい……はあ、はぁぁん」
乳肉と舌と唇とを巧みに操り、包皮を剥いていく。初々しい桃色の亀頭が露出し、ツーンと恥垢の匂いが鼻をくすぐるのもたまらない。
（いけないのに……あぁ……たまらない……）
ブリュンヒルデもまた若い牡棒を弄ぶ興奮に酔いしれていた。乳首は普段の倍ほどに勃起し、今にも母乳が噴き出しそうだ。
「はあっ、はあっ……もう……もう……何か……あぁぁ……オチンチンの奥からぁ……あぁぁ……来てるぅ！」
「あぁん、待って……まだ……」
肉体の快感に加えて、視覚的にも凄まじい刺激を与えてくるパイズリフェラ。経験がない少年兵が堪えられるはずもなかった。
「あぁぁぁ～～～～～～～ッ！」
ドビュッ！　ドピュッ！
「きゃぁんっ！」
避ける間もなく白濁が噴出し、ブリュンヒルデの顔面を直撃した。
「わっ、何か出た!?」
「白いオシッコ!?」
その意味さえ知らない小年兵たちは、呆気にとられたように口をポカンと開けている。射精した本人はぐったり虚脱して、何が起こったのか理解できていない様子だ。
「はあ……はあ……ブリュンヒルデ様……あぁ……一体……何が……僕の身体は……どうかしてしまったの？」
「これは精液っていうの。男なら普通のことよ」
「……せいえき？」
「これを出すことを射精といって、男の子はとっても気持ちがよくなるの。そして女の子も精液が大好きなのよ……んふっ、くちゅん」
微笑みながら舌を出し、口の周りについたザーメンの残滓をペロリと舐め取っていく。
（ああ……男の子の精液、おいしい……）
ロキや中年男たちのコッテリした濃厚精液は飲み慣れていたが、若くて清々しい少年の精液もまた違った味わいがある。何より自分から誘惑し、支配下においていることが新鮮な興奮をもたらす。

エルフの国の宮廷魔導師になれたので姫様に性的な悪戯をしてみた THE COMIC

最終話

漫画 COMIC 時丸佳久（ときまるよしひさ）
[原作] 磯貝武連
[キャラクター原案] 成海クリスティアーノート

おいキース しっかりしろっ

キース様

感動(?)の最終回！

いかん 体が鉛の様に 重い…

おまけに 全身 熱い…

ぐぐ…

やっぱアレか…？ 毎日2人を相手にする為に作った特製栄養ドリンクのせいか…？

ちょっと 強力に作りすぎたからなぁ…

はぁ

ヤベーぞ こりゃあ

はぁ

とっとと一発 抜かないと 体が爆発しちまう!!

アイシャ！ すぐに お医者様を

はっ

…!!

いえ… 待って アイシャ

キース様 おまたが!?

ぬなっ!?

ガキーン

まさか おちん…

おいっ ゲス野郎！

ナイア様の前で ふざけるなよ!?

!!

…なんて 熱だ…

尋常じゃ ないぞ…

まさか…

魔道具の話は 本当だったのか!?

いけない あれはきっと おちんぽのせい

わたくしが 助けなければ

姫…

ヤリマン エルフ

アイシャ！ ここは わたくしに任せて

2人きりにして 良いと言うまで 部屋には誰も 入れないで！

姫様!?

なりませんっ
あのような ふしだらで おぞましい事…
姫様に させるわけには まいりません
どうか 魔道具の件は 私にお任せ ください！
!?
キースが こうなったのは 私が魔道具の話を 信じなかった からだ…
姫様を 危険な目に あわせるわけ にはいかん！
どうして 知っているの？
！
キース様との 秘密なのに
しまった ——
で…では キースを 医務室に…
ちゃんと 答えて!!
ううむ マズイな…
オレが… 話しました
キース様！

あれは…伝説の恐るべき魔道具です
やはり姫様の御身に何かあってはいけません
おい…
一番信頼のおけるアイシャ様にお話ししたところ…
偶然にも清らかな乙女の資格を満たしておりました
そこで魔道具浄化の儀式を手伝って頂いたのです申し訳ありません
しかし2人とも大好きな姫様を思っての事…
どうかお許しください
…そうですか
秘密が守られなかったのは悲しいですが
そういう事であれば仕方ないです
それよりさぁキース様をこちらに！
あとはわたくしに任せて!!
…それはできません
え？

とにかく危険です

私にお任せください

だが私には魔道具を抑える魔力も術もない

どうやって助けるというんだ!!

だめなのっ!! キース様を助けるのは わたくしの役目なの!!

なんで意地悪するの!!

い…意地悪では

意地悪だもんっ

いくらアイシャがキース様の事キライでも

このままじゃキース様死んじゃうよっ

嫌い…

そんな事は…

そう…だった

助ける必要ないんだ…

元々殺すつもりだったんだこのまま死なせればいいんだ

そうだ…! 来たんだ

その時が…

やばい…険悪ムード
このまま発散できなきゃ破裂しちまう
だが…体がうごこ…
ぐぐ…
がっはあっ
お…おいっ
キース!!
キース様

め…命令です出て行ってアイ…
おーいっ
キース
しっかりしろおっ
死ぬな
死ぬんじゃないっ
おいっ
アイ…シャ?

あれ…?
どうして?
私…コイツに死んでほしくないって思ってる?
バカな…だとすれば私は姫様を守る為ではなく
姫様にキースを取られる事を恐れているだけなのか!?

漢刀戦姫
サクラヒメ
フタナリ淫獄に堕ちる黒髪乙女
第六回
最悪の罰ゲーム
転落する薔薇の戦姫
小説 NOVEL 有機企画
挿絵 ILLUSTRATION 緑木邑
今回のフタナリ調教は投票で決まる!?
シコシコ動画 NOW ON AIR!!
A 三角木馬
B グリセリン浣腸
C ムチ打ち
D 蝋燭責め

妖月の所有する調教部屋は数多存在し、そこでは毎日のように小鬼たちが女性を辱めている。
完全に堕ちた者は金持ちや犯罪組織などに出荷され、彼女を潤す資金源となっていた。
建宮流華と三城良平も引き離され、調教部屋に囚われていた。
（……わたしとしたことが、またしても不覚を）
神器結晶を取り上げられた流華は普通の女学生と変わらない。自力での脱出は不可能で、己の非力さに歯噛みするしかなかった。
クリスや良平の安否が気にかかるが、二人は無事だという鬼蛙の言葉を信じる以外に打つ手がない。
監禁から五日後。
流華はようやく恋人との面会を許された。
「良平！　怪我はないか⁉」
「流華……！」
薄暗い部屋の中で二人は抱き合う。もう誤魔化すことはできない。装刃戦姫やオニグミ、今まであったことすべてを打ち明けた。
さすがにフタナリ調教を受けたことは言い出せなかったが、丸メガネをかけた少年は、真剣な眼差しで耳を傾けていた。
「――というわけなんだ。すまない良平、ずっと隠していて。おまけにわたしのせいでこんな目に遭わせるなんて……装刃戦姫失格だな」
「すごく驚いたけど……うん、大丈夫だよ。流華やクリスさんが悪い怪物からぼくたちを守ってくれていたんだよね。ありがとう」
「りょ、良平っ！　怒ってないのか？　ぜんぶ鬼蛙を倒せなかったわたしのせいなのに……」
「平気だよ。流華がいてくれるならオニグミだって怖くない。またみんなで学園に帰ろう」
「ああ！　装刃戦姫サクラヒメの名に懸けて約束する。絶対にみんなで帰ろう」
少年をもう一度力いっぱい抱きしめる。互いの温もりが染み渡るように心を癒す。
黒髪の装刃戦姫は必ず鬼蛙、妖月を倒し三人で脱出するとここに誓う。
漆黒の瞳に灼熱の炎が灯った。

◆◆◆◆

同日同時刻。
装刃戦姫コーデリアこと、クリスティーナ・エイミスの罰ゲームが執行されようとしていた。
ブレザー制服は没収され、乳首にはハート型のピンクニップレス。陰嚢にはフリルをあしらった純白の金玉ブラジャーを着けられ、フタナリ器官をいやらしく装飾する。
細い首には大型犬用の首輪がはめられ、伸びた鎖は床に繋ぎ留められていた。
（こんな格好……屈辱ですわ）
女性を辱めるためだけの衣装に、真っ赤になって羞恥に震える。
しかし、コバルトブルーの瞳には一点の陰りもなく、淫語射精耐久ゲームの敗北からは完璧に立ち直っていた。
過酷な鍛錬を積む装刃戦姫は、一度や二度の敗北で心が折れることはない。
（前回は不覚をとりましたが、律儀に罰ゲームをする余裕を見るにチャンスはまだあるはず。わたくしを殺さなかったことを後悔させて差し上げますわっ！）
平静を保ちクリスは思案を巡らせる。妖月のグラマラスな胸元に収納された、神器結晶奪還の機会をうかがう。
当の本人は小鬼と共にカメラを調整していた。まるで新品の玩具で遊ぶように、ウキウキとした様子だ。
部下に任せるだけでなく、自らの手で準備をしていることが何よりの証拠である。
「技術の進歩ってのには驚かされるねぇ。あたしが生まれた時とは大違いさ」
カメラは三脚で支えられた大型のものが床に四台、小型のものが天井に二台取り付けられている。
昨日までは影も形もなかったディスプレイや機材類も運び込まれ、まるでテレビの中継でも始まるような光景だ。
チェックが終わると妖月はクリスに向き直り、罰ゲームの説明を始める。
「準備はいいかい装刃戦姫サマ？　逃げるんじゃないよ」
「準備も何もこんな格好で逃げられるわけないでしょう。どうせくだらない内容でしょうし、さっさと始めなさい」
「開き直るのもいいけど、お客さまの前ではお行儀よくしておきなよ。今日の罰ゲームはあたしがメインじゃないからねぇ」
「なっ、ではどなたですの⁉　まさか知らない殿方じゃありませんわよね⁉」
「当たらずとも遠からずってとこかねぇ。実際に見てみればいいさ」
見知らぬ男性と性行為を強要され、撮影でもされるのかと恐怖するお嬢さま戦姫。
妖月はあきれた様子で壁際にあるディスプレイのスイッチを入れた。
カメラから映像が転送され、画面に二人の姿が映る。しばらくするとそこに白や黒に赤、様々な色の文字が流れだした。
「これはなんですの？　意味がわからないのですけれど」
「お嬢さまはネット中継も知らないのかい？　簡単に説明すると、この部屋の様子は外部に生中継されている。流れているコメントは視聴しているお客さ

著者近況　寒くなってきたので、噂に聞く着る毛布を購入しました。はだけないし、足元もすっきりしていて使い心地がいいです。冷え性の方には特にオススメです（宣伝）。

登場人物紹介

建宮流華（たてみやりゅうか）
「装刃戦姫サクラヒメ」に転身し、人に仇なすオニグミを滅殺する。

鬼蛙（おにがえる）
オニグミを束ねる幹部。蛙坂蔵夫という名で流華と同じ学園に通い、彼女を徹底調教する。

クリス
流華の親友で「装刃戦姫コーデリア」に転身する。本名はクリスティーナ・エイミス。

妖月（ようげつ）
クリスに恨みを持つオニグミの幹部。

前号までのあらすじ 人に仇なすオニグミと戦う装刃戦姫サクラヒメこと流華は鬼蛙に敗北し、地獄のようなフタナリ調教を強いられる。そして、装刃戦姫コーデリアとして戦う流華の親友、クリスにも妖月によるフタナリ調教の魔の手が迫り……。

まが打っているってことさ」
「わたくしの姿が中継されてますのね。うぅっ、最悪ですわ……」
「その通り。裏社会のVIPたちがこの放送を楽しみにしているってわけ。そして罰ゲーム内容は視聴者の皆さまに決めてもらう。今回のあたしはただの司会者さ」
「理解はできましたわ。ホンットに下衆なことばかりよく思いつきますわね！」
「そりゃどうも。じゃあ、さっそく番組を始めようか。まずは自己紹介だよ」
「このっ……わ、わたくしはクリスティーナ・エイミス。岩戸（いわと）学園に通う女学生ですわ。夜は装刃戦姫コーデリアとして悪魔（デモン）……オニグミを狩っていますの」
「なるほどねぇ。で、股間のそいつはなんなんだい？」
「ふ、フタナリおチンポですわ。妖月さまに生やしてもらいましたの……これからは変態フタナリ女として生きていくつもりですわ。っ……画面の前のあなた覚えてらっしゃい。必ず見つけ出してギタギタにしてやりますわ！　この変態っ！」
「こらこら、失礼な口をきくんじゃないよ。今から何をするのか説明しな」
「罰ゲームですわ……『淫語射精耐久ゲーム』で負けてしまいましたので。お客さまにわたくしの恥ずかしいところを見てもらいますわ……」
テレビ画面に『フタナリってマジ!?』『すげー初めて見たw』『金髪お嬢さまサイコー！』『おちんぽクリスちゃんはぁはぁ』などのコメントが流れる。
そのどれもが少女の痴態を嘲笑い、醜悪な表情が目に浮かぶようだ。
今日は若い視聴者が多いのか、早くも興奮を抑えきれないコメントが増える。ドス黒い欲望はまるでコールタールのようだ。
「本日の雌奴隷は活きがいいねぇ。お客さまにもきっと楽しんでもらえると思うよ。まずは……アンケートスタート！」
妖月の言葉に反応して、画面の下に選択肢が浮かび上がる。
内容はプレイの種類だ。
【投票。A、三角木馬　B、グリセリン浣腸　C、ムチ打ち　D、蝋燭責め】
シンキングタイムは二分。各アルファベットのコメントが右から左へと流れていく。
それだけでもかなりの人数が参加していることがわかった。一人一票で視聴者がより多く投票したプレイが採用されるのだ。
結果はすぐに発表された。
【結果。A、三角木馬　15％　B、グリセリン浣腸　66％　C、ムチ打ち　12％　D、蝋燭責め　7％】
「なんですのこれ……」
グリセリン浣腸の断然トップに、クリスの美貌が青ざめる。
どれもまともなシチュエーションではないが、浣腸が一位とは思わなかったのだ。
妖月はニヤリと口角を吊り上げ、
「罰ゲームはグリセリン浣腸に決定。さっそく執行するよ」
「待ちなさい！　ま、マジメに言ってますの!?　あなたたち狂っていますわ！」
「お客さまが決めたんだから仕方ないだろう。あたしにはどうしようもないさ」
「っ、うぅ……絶対にあとで切り刻んでやりますから！」
「ここのところお通じがよくなかったんだろう？　丁度いいじゃないか。ねぇ？」
「わたくしのお通じは関係ありませんわ！」
便秘気味でもう一週間も我慢しているのは事実だが、大勢が見ている前で暴露されたいわけがない。
もし漏らせば大量の大便を電波に乗せることになってしまい、想像するだけでもおぞましい。
（とにかく我慢。我慢ですわ）
クリスがやわらかな桃尻を突き出すと、小鬼がどこからともなく浣腸器を運んでくる。ガラス製で巨大な注射器のようだ。
中は薄黄色の液体で満たされ、量もたっぷり二リットルはある。
小鬼は肛内壁を舐めて揉み解し、先端をぷっくりと膨らんだ菊門に差し込み、注入体勢に入る。
ピンク色のアナルに異物が入り込み、「んっ」とか細い声が漏れた。
妖月はすぐに注入を命令せず、カメラに向かって問いかける。
「ここでアンケート。お客さまはどちらが好みかねぇ？」
画面に二択のアンケートが浮かび上がる。
内容は注入の早さだ。
【投票。A、ゆっくり注入する　B、素早く注入する】
「そんなことまで……吐き気がしますわ」

著者近刊 『天煌聖姫ヴァーミリオン　フタナリ調教されちゃう母娘ヒロイン』『天煌聖姫ヴァーミリオン２　フタナリ快楽に堕ちる母娘ヒロイン』 好評発売中！

「いいから黙って見ていな」
眉根を吊り上げるクリスを他所に投票は進んでいく。
視聴者の答えは、
【結果。A、ゆっくり注入する　74％　B、素早く注入する　26％】
となった。
「ぐっ、品性下劣にもほどがありますわね」
ナメクジのようにノロノロとした動きでピストンが押され、じわりじわりと浣腸液が注入される。
グリセリンのひんやりとした感触が直腸を苛み、アナルを苦しめる。
内蔵に得体の知れない感触が広がり、チリチリと下腹が痛みはじめた。
チュウ♥　チュウウゥ～♥　チュウチュウ♥
「苦しい……うううぅ！　はうううぅ、くうぅ……もっと早くできませんの⁉」
「お客さまの意見は絶対さ。それより何かしゃべりなよ。黙りこくっている生放送があるかい」
「勝手なことを……こんな奴らに話すことなんて何もありません！」
「ならあたしが質問してやるよ。あんたが今お浣腸をされているのはどこだい？」
「お……お尻の穴ですわ」
「そんなお上品な言い方じゃダメさ。罰を受けているんだからもっといやらしく、お客さまを愉しませるようにしゃべるんだよ」
「その……あ、アナルですわ」
「それも違うねぇ」
「くっ……うぅ、こ……こう……」
「はっきり言いな！」
司会者の言葉には逆らえない。自分が惨めで情けないがどうにもできない。
花弁のように可憐な唇が恥辱に開かれる。
「こ……肛門ですわっ！　わたくしの汚いクソ穴です！　んんっ、くうううぅ……毎日用を足している穴ですわっ！」
「そう、肛門だろう……ん？　なんだ汚い穴だねぇ。ところどころに毛が生えているじゃないか。これはなんて毛なんだい？」
「ケツ毛ですわ！　わたくしのケツ毛です！　お手入れをサボってごめんなさい……クリスは肛門の周りにケツ毛を生やしていますの……んん、お浣腸つらいいっ！」
「へぇ、お嬢さまはケツ毛も生やしているのかい。とても恥ずかしいねぇ」
「うぅ……わたくしはケツ毛女なんですの。あっ、ひぐッ！　ぐうううっ！　金色のケツ毛生やしているだらしないバカ戦姫なんですの！　お見苦しい尻毛を晒してごめんなさいっ！」
淫語調教の影響もあって、次々と恥ずかしいセリフを口にするケツ毛乙女。
四、五本生えたお尻の毛のことを謝罪させられる。
『げっ、ケツ毛生えてんのかよ』『うわっ、汚ったねぇw』『気持ち悪い。ヘドが出るぜ』『オレに剃らせてw』と醜悪なコメントが流れる。
コメントの量が多すぎて画面が見えづらい。
（こんなの最低ですわ……ぐうう、お腹も……ふう、うううううぅっ！）
浣腸液でじくじくとお腹を嬲られ、クリスは身体を悶えさせる。
股間のフタナリペニスは完全に勃起し、竿にフリルを着たまま上下に揺れる。
「おやおや、勃起しているのかい？　浣腸で勃起するなんて変態の上にマゾなんだねぇ」
「ちっ、ちがっ……違いますわ！　わたくしはマゾなんかじゃありません！　言葉に気をつけなさいっ！」
「偉そうな態度をとっていいのかい？　正直に言いなよ変態マゾなんだろう？」
「ちが……うぅ、くうぅ、あぁぁ……」
妖月の言葉が毒のように染み込んでいく。抵抗する気力が削られる。
「変態マゾなんだよねぇ？」
「――わたくしは変態マゾです！　お浣腸でチンポフル勃起させる淫乱装刃戦姫ですわ！　ひぅ……んんッ！　お尻気持ちいいですの♥」
「やっぱりねぇ。一人の時はアナルでオナニーしていたんだろう？」
「ええ、そうですわ。中指を突っ込んでアナルオナニーやりまくりでしたの！　おッ♥　うぐん♥　お……おマンコよりアナルが好きなドスケベですの！」
カメラに向かって無理やり笑顔をつくる。
死にたいくらい恥ずかしいのに、身体がゾクゾクと反応してしまう。ペニスの先っぽからカウパーの滴がしたたり落ちた。
『お嬢さま最低じゃん』『さすがにアナルはないわ』『アナルマゾとかバカすぎ。終わってんな』『もっとお尻の穴見せて！』と視聴者が好き勝手にコメントを送る。
内臓を焼かれるような苦しみに耐える、彼女を心配する気配はまったくない。
（わたくしはなんてことを……）
変態性癖を公言させられ屈辱に震えるブロンドの戦姫。目じりにはうっすらと涙が浮かぶが、逃げることもできない。
時間をかけてたっぷりと浣腸を施され、引き締まった下腹部がイカのように膨らむ。キュポンッと浣腸器が引き抜かれ、ようやく注入の苦しみが終わった。
しかし、それはさらなる地獄の始まりにすぎない。
「ぐっ⁉　あ、ひぐっ！　あぐうううぅぅぅ～

～ッ!?」

下腹から雷鳴のような音が響き、猛烈な勢いで排泄欲求が高まってきたのだ。

肛門を引き締めて決壊に耐えるが、とても長くは持ちそうにもない。

気を抜けば今すぐにでも大便を漏らしてしまいそうだ。

大勢の顔も知らない視聴者の前で。

ギュルル！　グルルル！　グルルルルル！

「すごい音だねえ。大丈夫かい？」

「だっ、大丈夫なわけないでしょ……早くおトイレに……トイレへ行かせなさい！」

「それはお客さまに聞いてみないとねぇ。はい、アンケート」

【投票。A、トイレに行かせる　B、トイレに行かせない】

すぐに回答が返ってくる。

【結果。A、トイレに行かせる　6％　B、トイレに行かせない　94％】

やはり圧倒的に行かせない人間が多い。

『当然』『知ってた』『ですよねーw』『お前ら信じてたぜ！』『笑うわw』と歓喜のコメントが流れていく。

オニグミのような怪物とつながっている人間がまともなわけがない。

だが、それでも、クリスは懇願し奇跡を信じるしかなかった。

お漏らしなんて絶対にできない。大便を鑑賞されるなんて女性として以前に人として終わってしまう。

「お願いですからトイレへ行かせて！　本当に漏らしてしまいそうですの！」

「なら何か芸でもしてみるかい？　おもしろい芸を見ればお客さまの気も変わるかもねぇ」

「ホントですの!?　芸をすればトイレに行かせてくれますのねっ!?」

必死の形相でカメラに訴えかける。

お腹が死ぬほどつらくて苦しくて、トイレに行けるならどんな可能性でも賭けてみたいのだ。

願いが通じたのか『いいぜ』『やってみろよ』『チョー、楽しみ』と画面に同意するコメントが大量に流れる。

うなる下腹を押さえながら、意を決してクリスは芸を始めた。

「い、一発芸！　今からお尻で字を書きますわ！　くいっ♥　くいっ♥　くいくいっ♥　くいっ♥　ま、マゾブタと書きましたわ♥　これでいいでしょう!?」

「いいでしょうって、それだけかい？　やる気がないなら漏らしちまいな」

「うぅ……くいっ♥　くいっ♥　んひうぅぅうう♥　ふ、フタナリバカ女ですわ！」

「次は？」

「はう、んん……♥　あぁぁん♥　ケツマンコ大好きですわ♥　ふうぅう……♥」

男を誘うように腰を振り、自らを貶める。排泄のためだけに恥ずかしい言葉を選んで書く。

「他にはどんなのがあるんだい？」

「ひゅ、あひうぅぅ……腋臭クサ子です♥」

「いまいち気合いが足りないね。もっとお客さまに媚びなきゃトイレには行けないよ」

「ぐいっ♥　くいっ♥　ふんぐぅぅう♥　淫乱マンコですわ！　も、もういいでしょう!?　わたくしをトイレに行かせて！　い……行かせてほしいにゃん♥　にゃんにゃん♥　雌猫クリスにゃんのお願いだにゃん♥」

手を口元で揃えて片足を上げた、ネコのような媚び媚びポーズをとり、上目遣いで機嫌をうかがう。

もうなりふり構ってはいられない。

だが、流れてくるコメントは『思ってたのと違う』『全然ダメ』『やる気あんの？』『バカにしてんのか？』『ねーよw』といったものばかりで、トイレに行かせる気はまったくないようだ。

「そんな……あぐっ、ぐひぁぁあああぁ！」

クリスはお腹を押さえてうずくまってしまう。恥ずかしくて痛くて涙が出そうだ。

と、そこへ妖月が助け舟を出した。

「やれやれ。だれにでもできる芸じゃお客さまも満足しないさ。あんたしかできない芸をしなきゃ意味ないだろう？」

「わたくしにしか？　……思いつきませんわ」

「股間のイチモツがあるじゃないか。それでオナニーするんだよ。フタナリ女のオナニーなんか滅多に見られるもんじゃないからねぇ。お客さまもそう思っているはずさ」

その言葉に同調し画面には『オナニーしろ』という内容のコメントが溢れかえる。

（なんてこと考えますの。こいつら全員地獄行きですわ！）

人間のために命がけで戦ってきたことがバカらしくなる。こんな奴らだと知っていたら装刃戦姫にならなかったかもしれない。

だが、ごちゃごちゃと迷っている暇はない。痛みのスパンはどんどん短くなる。

浣腸戦姫は勃起した肉竿を握り、真剣な眼差しでカメラを見る。

「そ、それではお客さま♥　フタナリ変態女クリスのおチンポオナニーショウをご覧くださいませ♥　はい、シ～コシコ♥　シ～コシコ♥　おチンチンしこしこ～♥　うっふ～ん♥」

卑猥なセリフを口ずさみ肉竿を擦っていく。白魚のような指で円をつくり、根元から亀頭の先端へせわしなく動かす。

魔剣士リネ2
乙女穢されし戦場
【第11話】邪悪の皇子
原作／まくらカバーソフト
小説／酒井仁
挿絵／桐島サトシ
淫蕩に妬だる後宮にて胎動する脅威!?
邪悪なる影が凛々しき女騎士を襲う!!

1

「……ということで、こちらがアレス将軍が倒したヒッピア軍のマンズールの残した魔剣でございます、リーネさま」

今は亡きルートヴィッヒの妻、マルティナは兵士が運んできた細長い箱をリーネの前に置いた。物憂げにベッドに横たわった金髪の少女は、さして興味もそそられなかったのか「そう……」とだけ言った。

まだ発展途上にあるその肢体は、いつもの強化服姿ではない。どうかすると乳首まで透けてしまうような、薄布のドレス一枚だ。

そのままでは触れることすらできない、魔族の化身ともいうべき魔武具。しかし、その特質に合ったマナの持ち主が解呪を行うことで、それは聖なる武具に生まれ変わり、強力な武器となるのだ。

魔人と化したマンズールは三つの聖武具を身につけたアレスに討ち取られ、見るもおどろおどろしい剣を残して塵となって滅びた。その特質は焔――すなわちストームランスの剣の女王リーネこそが、唯一この魔剣を解呪できるということ。

「その魔剣の解呪をすればいいのね。わかったわ、そこに置いておいて」

「はい。ヒッピアはほぼ壊滅状態だそうですが、まだ残党が各地に残っております。アレス将軍はその残党狩りに追われておりますゆえ、なるべくお早めにとのことです」

「ええ、わかったわ」

と、まるでやる気のない声で返事をし、リーネはごろりと横を向いてしまう。

あの凛々しくも美しく、戦場で剣を振るう少女がなぜこんな態度なのか。それはもちろん、魔剣の解呪などに時間を取られていたら、バロックに種付けをしてもらう回数が減ってしまうからだ。

今のリーネにとっては魔武具もヒッピアも、そしてアレスでさえまったく何の感興も呼び起こさなかった。

重要なのは聖王バロック。聖王の子種を子宮に注がれ、その世継ぎを孕むことこそがリーネの関心事であり、悦びであったのだ。そのことを重々承知しているマルティナは、それ以上何も言うことなく、恭しく頭を下げて退出する。

「マルティナさま」

「これはクロエさま。何度も申し上げましたが私はただの後宮メイド。マルティナとお呼びくださいませ」

リーネの部屋を出たマルティナを待っていたのは、クロエ。

深い緑の長髪に水色の瞳、膝丈まであるロングワンピースに腰と両手の甲冑も勇ましい女騎士。だが谷間のできる巨乳、曲線でできたボディラインは成熟した大人の魅力を放っている。

これだけの美女が後宮にいて、バロックが食指を動かさないわけがないが、それだけはありえなかった。

なぜならクロエは聖王バロックの実の妹だからである。

「その、マルティナ。リーネさまは……」

「ええ、心ここにあらずといった感じです。けれど魔剣の解呪はちゃんとしていただけると思います。なにしろリーネさまは剣の国の女王ですから」

そうだろうか……クロエはバロックとのまぐわいに夢中になっているリーネに、危うさを覚えていた。

一人でも多く聖王の世継ぎを作る、兄バロックの考えはわからなくもない。

しかし実の妹であるからこそ、兄の言葉は単に生娘を犯し、快楽の限りを尽くしたいが故の口実にすぎないということを誰よりも知っていた。

（兄君さまの放埒は収まるばかりか増す一方……リーネさまたち以外の貴族の娘にも世継ぎを生ませるために、『黄金の騎士団』なるものまで結成させたとか）

バロックには国の王たる器などない。

グスタフ王のような権力欲もないが、人の上に立ち、世を平定して民に幸せをもたらすことになど何の興味も持っていない。

ただ毎日美女と戯れ快楽に耽ることだけを愛する、そんな男なのだ。

（それでもヒッピアという侵略者がいなくなった今、国政だけならウォードさまやランドルフさまにワインバーグさま、それになによりアレス将軍という頼もしいお方たちがいらっしゃる。けれど……）

クロエには兄バロックの放埒とは別にもう一つ、懸案があった。

（あの側近……やはり彼は以前とは別人のよう。例の騎士団設立を進言したのも彼らしいし、もしや何かよからぬことを企んでいるのでは）

かつてバロックとクロエは、グスタフ王によってセバスチャン城に軟禁状態にあった。側近はその頃からバロックたちの身の回りの世話をしてくれていた、忠臣といってもいい。だがルートヴィッヒが倒れ、バロックが聖王になってからの彼は、まるで人が変わってしまった。

以前は地味で目立たず、自分の仕事を淡々とこなす青年だったのだが、最近は如才なく振る舞いつつ、まるで陰からバロックを操っているかのようだ。

（まさか……でも、いちど彼と話をして、はっきりさせるべきかもしれないわ）

側近、彼の名は――ヘルメスといった。

それは、あの禍々しい魔剣ブリュンヒルデが生まれ変わったものには到底見えなかった。

燦然と輝く聖なる光、どんな邪悪をも切り裂く黄金の剣「聖剣ラグナロク」。たとえバロックとの荒淫に明け暮れようとも、やはり剣の女王の名は伊達ではないのだと、マルティナは改めて感

著者近況　そろそろ……本気でお酒をやめないとやばいかもしれません。つうかやめれ。

動の目をリーネに向けた。
「素晴らしいですわ、リーネさま。早速、将軍にお届けするよう手配いたします」
「ああ、うん……じゃ、もういい？」
マルティナが兵士たちに聖剣を運ばせるのを見届けると、リーネは後ろも向かずに言った。
「ヘルメス――もうお役目はすんだのよね？」
カーテンの影から音もなく姿を現したのは、執事服の青年。
青白い肌と切れ長の瞳、だがどこか人間性を感じさせない不気味さがあった。青年は一礼をし、少女を別室に案内した。
「それでは――」
リーネが足を踏み入れたのはいつもの寝室。巨大なベッドが部屋の大半を占め、そこで二人の美女が仰向けになった男の胸に頬ずりをしていた。
長い金髪も美しい、魔導の国の女王ベアトリス。肩までの青い髪も眩しいアウラの女王にして聖巫女シンシア。彼女たちは愛おしげに全裸の男の乳首をちろちろと舐めている。男は悠然と少女たちの腹部を撫でる。
リーネと同じ薄布のドレスに包まれたその腹はぽっこりと膨らみ、出産間近であることを物語っている。
いかに好色といえど、世継ぎを無事出産するまでは少女たちを犯すことは控えているようだ。
「おぉ、戻ってきたかリーネ」
気配に顔を上げた男の股間で、巨大なる肉棒がぴくりと震える。
「バロックさま……今日こそ、今日こそリーネはバロックさまのお子を孕んで見せます。リーネの子宮にバロックさまの尊い子種を注いでいただけますか……？」
「言うまでもなきこと。近う寄るがよい、リーネ」
バロックの手招きに瞳を潤ませ、金髪ツインテールの美少女は薄布ドレスの前をそっとはだける。下着はつけていない、下腹部にわずかに茂るアンダーヘアは、髪の毛と同じ金色。
「さあ、存分にバロックさまのおちんぽを味わってくださいね」
ベアトリスとシンシア、二人の少女妊婦は満面の笑みでリーネを迎え入れる。彼女たちは同じ男の子を孕むことを切に願っているのだ。
「ありがとう二人とも。あたしも頑張ってバロックさまの世継ぎを、元気な赤ちゃんを妊娠するわ」
仰向けになったバロックの股間では、見るも巨大な肉棒が天を仰いでいる。リーネは見せつけるように自ら指で花びらを開いて見せた。
「バロックさま、リーネはもう濡れ濡れで、こんなにいやらしいおつゆが垂れ落ちてるんです。バロックさまの立派なおちんぽで蓋をしてもよろしいでしょうか……」
「遠慮することはない、今日のワシはまだ一度も射精しておらんのだ。さぞ濃厚な子種汁が出ることだろう」
「バロックさま、うれしいっ」
感極まったようにリーネは全裸の男に抱きつき、突き出した舌と舌を絡める。右手はせわしなく勃起したペニスをまさぐり、いやらしく腰をくねらせると、前戯も何もなく膣穴に陰茎をくわえこんでいく。
「あぁあああ、お腹の奥まで届いちゃうっ。デカちんぽでおまんこ穴ひろげられちゃいますぅ」
「どれ、お前たちもリーネをもっと喜ばせてやるがいい。開いた子宮に我が聖なる汁を腹いっぱいに注いでくれようぞ」
バロックに言われるまま、ベアトリスとシンシアはちゅっちゅとリーネの頬に口づけをし、ピンク色のニップルを指でつまみ上げる。
魔剣の解呪をする間も、リーネの頭にあるのはバロックのペニスのことだけだった。ようやく待ち望んでいたものを得た少女は、挿入されただけで早くもアクメに達していた。
「いいっ、バロックさまのおちんぽ気持ちいいれすぅ！　入れただけで、イクッいぐぅうう」
「そんなにワシのマラが欲しかったのか、リーネ？　大事なお役目があったのだろう？」
「ひいっ、ば、バロックさまのおちんぽをくわえこむ以上に大事なことなんて、ありません！　あぁあぁ先っぽが、子宮をずんずん突き上げてるぅウ」
「まあリーネさんのクリトリス、こんなに硬くなって」
「乳首もこりこりですわ」
ベアトリスたちに耳元でささやかれると、快感が何倍にも膨れ上がる。膣奥からはねっとりと濃厚な蜜液が溢れ出て、バロックの巨根に絡みつく。
もう何十回、数えきれないほどに犯されていても、少女の膣穴はしなやかに男の肉を包み込み、ざらりとした肉襞で擦りあげるのだ。
「ふふふ、まずは景気づけの一発目を受け止めろ、リーネ！」
「はひぃいい～～～～っ」
どぴゅっ、びゅるるる～～っ。糊のように粘っこい体液を撃ち込まれ、金髪の淫乱少女はエクスタシーの痙攣を始める。
すかさずシンシアたちがその身体を支えるが、バロックの射精が終わるまで、リーネの痙攣は収まらなかったのだ。
「まだまだこれからだぞ。今度はこっちから突っ込んでやろう」
バロックの大きな手が少女の骨盤を掴み、持ち上げる。
陰茎が引き抜かれると同時に「どぼどぼっ」と白濁液が垂れ落ち、ベアトリスがそれを指ですくって美味しそうにねぶりあげる。
シンシアはリーネに肩を貸す格好で、リーネの位置をさっきとは逆に、背面騎乗位の体勢にさせると、自分もリーネの股間に指を伸ばす。

著者近刊　『魔法少女W調教　フレイア&クリスタ』『引きこもり勇者のために美少女パーティーが一肌脱ぐようです』『乙女騎士団が隊の存続のために枕営業するようです』『お兄ちゃんが大好きな妹は実は「プロの妹」だったようです』　好評発売中！

「今日の聖王さまの子種はいつにもまして濃厚……これならきっと、バロック陛下の世継ぎを孕むことができるでしょう」
「うふふ、私たちも早くお腹の子を出産して、また聖王さまの濃厚汁を注がれたいわ」
「ならば、早くリーネを孕ませてやらなくてはな。そらっ」
「ふぎぃいっ？」
リーネの腰を掴んだバロックが腰を突き上げると、細身の肢体が浮き上がる勢いで跳ね上がる。
そこからはバロックの一方的なピストンだった。ベアトリスとシンシア、二人の妊婦少女は左右からリーネに抱きつき、首筋をねぶり、乳首に歯を立て、指でクリトリスを弄ぶ。
「ひい、あひぃい、おちんぽがおまんこの前をゴリゴリこすって、またイクイクイクぅウウ」
バロックの上の少女の肢体が快感にえびぞっていく。激しく出し入れされる陰茎の動きで、リーネの下腹部が不気味に突き上げられるほどだ。
「お前もすっかりワシのちんぽ奴隷になったな。もう生意気な口は利かぬのか？」
「そんなのっ、このしゅごいちんぽ無しで、もうリーネは生きていけませんっ、生意気な口なんか、もう二度とバロックさまに利いたりしません！」
「ほう、ではお前が望むことはなんだというのだ、剣の国の女王よ」
「ば、バロックさまのおちんぽっ、ちんぽ汁っ、聖王陛下のお子を孕みたいです！　それ以外に大事なことなんかありませんっ」
舌を突き出しだらしなくよがり悶える少女の二の腕を掴むと、バロックの動きがさらに激しくなる。
びくんびくんとアクメに震えるリーネを二人の妊婦少女が抱きしめ、敏感な部分を的確に刺激してくる。三人がかりで犯され、リーネはすすり泣きとも嬌声ともつかぬ声で叫ぶ。
「ふひぃい、ぐひ、ひぎいい！　またイクっ、イキ続けておかしくなっちゃうぅうう」
バロックが二発目の精液をリーネの中に吐き出すまで、リーネがいったい何回絶頂に達したのか……時おり快感に白目を剥いてもなお、バロックは容赦なく少女の胎内を巨根で犯し抜いたのだった。
「バロック聖王陛下――――」
音もなく現れた青年に、バロックは驚いた様子もなく顔を向ける。執事服を着た青年は存在感に薄く、ベアトリスたちも気にした様子はない。
ただ一つ、いつもは持っていない水晶が青年の手にあった。
「バロック陛下、おめでとうございます。この魔水晶にて、リーネさまのご懐妊を確認いたしましてございます」
一介の側近がどうしてそんな魔法アイテムを持っているのか、バロックは気にする様子もなく、シンシアはパッと顔を輝かせる。
「まあ、なんて素敵！　これで私たち揃ってバロックさまの世継ぎを産むことができるのね」
「うむ、まずはめでたい。だがワシはまだまだヤリ足りないな……念のため、もう四、五発は注いでおいてやるとするか」
「まあ、バロックさまは相変わらず絶倫ですこと。リーネさんももっとバロックさまに犯されたいのね」
ベアトリスの言葉はもはやリーネに届いてはいない。いまだ萎えることのない陰茎の熱と大きさにただ酔いしれ、唇の端から涎を垂れ流していた。
「もっとぉ……バロックしゃまのおちんぽ汁、もっとぉ……」

2

「あれは……？」
クロエは騎士階級ではあるが、聖王の妹ということで後宮にも出入り自由の身である。
そのクロエにリーネ懐妊の一報が届いて、しばらくしてのことである。後宮に甲冑姿の騎士をよく見かけるようになったのだ。
しかも大抵貴族らしい娘を連れている。どうやら噂の「黄金の騎士団」のようだ。
しかし騎士団とは名ばかり……要はバロックの世継ぎを産ませるために貴族の娘を集めるのが主たる目的の集団である。
（しかもアレスさまの指揮下には入っていないと聞くし、それではただの兄君さまの私兵ではないの）
アレスたちの活躍によって、ヒッピアの脅威はほぼなくなったといってもいい。
残党はまだあちこちで騒ぎを起こしているようだが、アレスたちは各地に兵を配置し、ダイヤモンドシティではウォードたちが中心になって、新たな秩序づくりに精を出している。
「これはクロエさま。聖王陛下にご用事でしょうか」
「マルティナ……いえ、特に用というほどでは。兄君さまは相変わらずのようですね」
ええ、と微笑むマルティナは、もうすっかり後宮メイドの仕事に慣れたようだ。
「ベアトリスさま、シンシアさまに続いてリーネさまも無事にご懐妊なされたのはよいのですが、聖王陛下のお世継ぎは一人でも多いに越したことはありませんから」
処女好きのバロックは、自分以外の男に処女を奪われた女には一切興味を示さない。いかに美しくとも、ルートヴィッヒの妻であったマルティナには、手を出すつもりもなさそうだ。
そして妊娠したリーネも安定期に入るまでは、あまり無体なこともできないとあって、さぞ性欲を溜めこんでいるのだろう。
「これはクロエさま」

と、一人の娘を連れてきた騎士が慇懃に礼をする。娘は服装身なりから、高級貴族と思われる。

「く、クロエさまに置かれましては、ご機嫌麗しゅう存じます」

「こちらヴァレンティン公の長女セーラどのにございます。我らが偉大なる聖王の世継ぎを産むという名誉にあずかりまして」

黄金の騎士団の役目はバロックの相手集め。処女であり、身分が高く美形の娘を連れてきた騎士は、バロックから褒賞をもらうという。

しかし肝心の娘は緊張しているようで、どこか落ち着かない。

（無理もないわ、兄君さまに種付けされるためだけに連れてこられたのだから……）

同じ女性として、バロックの行為は放埒としか思えない。だが「聖王の血を絶やさないため」という言葉は何よりも優先されるのだ。

「そ、それではクロエさま、失礼いたします」

娘が連れていかれた先からは甘い声が漏れ聞こえてくる。きっと他の騎士が連れてきた娘とバロックは淫らな行為に耽っているのだろう。

（本当にこのままでいいのかしら。それに以前にも増してヘルメスが好き勝手に振る舞っている気がする）

バロックとクロエの側近であったヘルメス。しかし以前の彼とは人が違ったようにクロエには思えるのだ。

以前のような地味な忠臣ではなく、バロックの欲望を煽り立て、操っているようにすら思える。それに最近のヘルメスを見ていると、ぞわりと悪寒を感じるのだ。

「兄君さま、少しよろしいですか」

「おおクロエ。お前がここに来るとは珍しいな。何かあったのか」

ベッドの上で娘たちと戯れる兄から微妙に視線をそらしながら、クロエはヘルメスについて問うてみた。

「む？　あやつはよくやってくれておるぞ。やつが見定めた娘は一人の例外もなく処女だったしな」

「あぁん、バロック陛下ぁ～っ」

左右に半裸の娘を従えた兄の股間では、先ほどの娘が陰茎をしゃぶっていた。妹であるクロエにはわからないが、バロックには女を従える牡の魅力があるようだ。

「おやクロエさま。聖王陛下はただいま公務中ですので」

ぞくりっっっ。

真後ろからかけられた声に、クロエは背筋が凍る思いだった。この気配のなさは尋常ではない。いや、クロエの中の「聖王の血脈」とでもいうべきものが、危険を訴えている。

「わ、わかったわヘルメス……」

確証があるわけではない――だがクロエはこの側近の青年に人間離れした「邪悪」を感じていたのだ。

やはり自分が何とかしなければ。

クロエの思いは日に日に募るばかりだった。ウォードやワインバーグに相談することも考えたが、ヘルメスが魔族と通じていると訴えて信じてもらえるかどうか。

実際に魔族と対峙したアレスやエルヴィンは今もヒッピアの残党狩りに追われている。

（これ以上、アレス将軍のお手を煩わせることはできない。それに、私だって騎士ですもの）

剣の一つも使えない兄と違い、クロエはセバスチャン城にいた頃から、剣の鍛錬を欠かしたことがない。

ルートヴィッヒが存命だった頃も、アレスやリーネと共に剣を振るい戦っていたのだ。それにあのとき……魔剣に魅入られたオーウェンを滅ぼしたのは、聖王の光だった。

（私にだって、兄君さまと同じ聖王の血が流れている。私だけでヘルメスの正体を暴いて見せる！）

深夜半――さすがのバロックも娘たちと交わり疲れたのか、寝室は静寂に包まれていた。今日だけでいったい何人の少女たちがバロックに純潔を奪われたのか。

主にバロックの身の回りの世話を務めているヘルメスの私室は、後宮の一角にある。強化服に身を包んだクロエは腰に剣を携え、息を殺しヘルメスの部屋に向かう。

（どうにかしてあの男が魔族と通じている証拠を掴まないと。いえ、もしかしたら彼自身が）

「おや――こんな夜更けにどうかなさいましたか、クロエさま」

まったく何の気配も感じさせなかったその声に、クロエのうなじの毛が逆立つ。やはりこの男がただの側近であるはずがない。

「あなたは――何者です。あなたは私の知っているヘルメスではありません。兄君さまを煽り立てて、この国に災禍を招こうというのですか」

一瞬で振り返り剣を抜くクロエに、しかし青年はあわてた様子もない。

「まさか聖王陛下の御妹君ともあろうお方が、深夜に側近に夜這いをかけるとは、呆れ果てましたな」

「なっ」

あまりに無礼な言い草に、クロエの顔がさっと赤らむ。いまやヘルメス、いやヘルメスによく似た何者かはその悪意を隠そうともせず、パチンと指を鳴らす。

すると、物陰に隠れていたごつい人影が数名。黄金の騎士団の騎士たちが無言でクロエに迫ってくる。

「無礼者ッ、私を誰と心得るか！」

しかし騎士たちは怯むどころか、薄笑いすら浮かべて灯りの元に姿を表す。彼らの姿にクロエは息を呑んだ。

甲冑こそつけていたものの、彼らの股間からはにょっきりと巨大な陰茎がそそり立っていたのだ。

「うひひひ……おんな……おんなぁ」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/